「七千餘騎にて參向す」

さん-かう〔參校〕 參照して校正すること。柳宗元文(段太尉)「得二大尉實跡一參校備具」

さん-がう (名) 物を計り考ふること。談草

さん-がう〔山號〕(名) 寺院に冠する稱號。もと所在の山を以て呼びしより起こる。寺社法則下「寺。山號之儀、容易難レ成筋候得共」同「大勝院儀三寶院御門跡より寺山號差免有レ之候共、新規之儀に付、難レ成筋と存じ候間」一話一言十九、山號寺號「今市中にある寺にても、必ず山號・寺號ある事、をかしき事と思ひしに、西土にてもある事なり。譚友夏が鵠灣文草の中に、重修寶峰山觀音寺碑記あり。其文中に曰、邑百里無レ山、何山之足レ名、寺必麗レ山、寺レ之斯山レ之矣とあり」

ざん-かう〔殘肴〕(名) くひのこりのさかな。酒宴あとの殘物。

ざん-かう〔殘香〕(名) うつりが(移香)に同じ。

ざん-かう〔殘更〕(名) 夜のあけ方。五更。朗詠「夜向二殘更一寒磬盡」張耒詩「郵亭結束問二殘更一」

ざん-がう〔塹濠〕(名) 城の周圍のほり。城池。城塹。唐書(裴行儉)「大軍中略營二塹壕一」

さんがう-ざっし〔三號雜誌〕(名) 第三號位まで發行したるのみにて、廢刊となれる雜誌。發行後、續刊の見込みなき雜誌を嘲りていふ語。

さんかう-しき〔三項式〕(名)【數】三つの項よりなる式。

さんかう-にん〔參考人〕(名)【法】裁判所の呼出しに應じ、宣誓をなさずして、其の實驗したる事實を陳述する人。事實參考人。

さんかう-みほん〔參考見本〕(名)【商】商品の參考用に供する見本。

さん-かえふ〔山荷葉〕(名)【植】小蘗(ギ)科、山荷葉屬の多年生草本。高さ二三尺。一株に二箇の葉を有し、葉は大形、扁圓にして、二つの深き缺刻相對し、緣邊不整の齒牙を有す。六七月の頃、白色の花數箇を花莖上に開く。果實は黑色、小楕圓形なり。我が國、各地の深山に自生す。

さん-かく〔山客〕(名) 山に住む人。山中に住居する人。やまびと。山人。王維詩「花落家僮未レ歸、鳥啼山客猶眠」

さん-かく〔山閣〕(名) さんろう(山樓)に同じ。蘇軾詩「山閣醒時月照レ林」

さん-かく〔棧閣〕(名) さんだう(棧道)に同じ。後漢書(隗囂傳)「白水險阻、棧閣絕敗」

さん-かく〔三革〕(名) 一 革令(甲子の年)・革運(戊辰の年)及び革命(辛酉の年)の稱。二 甲・胄及び盾の三種の武具の稱。國語(齊)「教大成、定二三革一、隱二五刃一」

さん-かく〔三角〕(名) 一 三つの稜(カド)ある形。三稜。二【數】さんかくけい(三角形)、又は、さんかくじゅつ(三角術)の略。

さんかく の ゆき 三角雪 白紙を鱗形に切りきざみて、芝居の雪降りの場に散布するもの。

さん-がく〔山岳・山嶽〕(名) 高大なる山。陸地の一部、附近の土地より著しく隆起して、高く峙てるもの。やま。たけ。朗詠「出二紫闈一而東望二山岳一、半插二雲根之暗一」盛衰記九、宰相申二預波少將一「山岳傾き崩れて、石巖海に入る」左傳(莊公廿二年)「山嶽則配レ天、物莫二能兩大一」後漢書(鄧禹傳)「功名重二山岳一」

さん-がく〔山壑〕(名) 山と谷と。沈約文(謝齊竟陵王教撰高士傳啓)「孤芳隱二山壑一共遠」

さん-がく〔三學〕(名) 佛語。戒・定・慧の三種の學。太平記二(三人僧徒關東下向)「戒・定・慧の三學を兼備し給へる一人の沙門おはしけり」觀經疏記「三學之中、以レ戒爲レ首」

さん-がく〔算學〕(名) 算數の學。數學。周邦彦文(汴都賦)「算學以窮二九九一」

さん-がく〔散樂〕(名) さるがく(散樂)に同じ。(正樂また雅樂の對) 本朝文粹三、對冊「辨二散樂一」周禮(春官旄人)「掌レ教二舞散樂一舞二夷樂一」注「散樂、野人爲レ樂之善者、自有レ舞」隋書(音樂志)「總追二四方散樂一、大集二東都一」唐書(孫伏伽傳)「武德初、伏伽上レ言三事、其二、百戲散樂、本非二正聲一、隋末、始見二崇用一」

さん-がく〔產額〕(名) 產出のたか。生產のたか。產物のたか。

さん-がく〔參學〕 學事に參すること。學問にたづさはること。太平記廿六、妙吉侍者「左兵衞督日夜の參學、朝夕の法談無レ隙ければ」黃鎭成詩「直到二無生一參學畢」

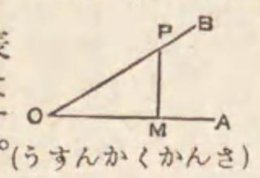
ざん-がく〔殘額〕(名) 差引して殘れるあとの高。のこりだか。殘高。

さんかく-いなづま 三角電 (名) 紋所の名。

さんかくいり-さんかくいなづま 入三角電 (名) 紋所の名。

さんかく-かう〔三角江〕(名)【地】河の海に入る所の、潮流急激の爲めに浸蝕せられて、喇叭狀に開けるもの。

さんかく-かんすう〔三角函數〕(名)【數】一つの角の正弦・餘弦・正切・餘切・正割・餘割の總稱。任意の銳角∠AOBの一つの邊OB上の一點Pより、他の邊OAに垂線PMを引くとき $\frac{PM}{OP}$, $\frac{OM}{OP}$, $\frac{PM}{OM}$ を夫れ夫れ∠AOBの正弦・餘弦・正切と云ひ、正弦・餘弦・正切の反比を夫れ夫れ餘割・正割・餘切と云ふ。又、一の角、例へば α の正弦・餘弦・正切・餘切・正割・餘割等は夫れ夫れ次の如く表はす。



(さんかくかんすう)

sin α, cos α, tan α, cot α, sec α, 及び cosec α.

さんかく-きふすう〔三角級數〕(名)【數】sin x, cos x, tan x, …… 等を x の昇羃の級數に展開したるもの。例へば、

$$\sin x = x - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \cdots\cdots$$

さんかく-きん〔三角筋〕(名)【醫】鎖骨及び肩胛骨より起こり、上膊骨に終はる筋肉。上肢を扛擧する作用をなす。

さんかく-けい〔三角形〕(名)【數】三つの直線にて圍まれたる平面の部分。

さんかく-さう〔三角草〕(名)【植】すはまさう(獐耳細辛)の異名。

さんかく-しう〔三角洲〕(名)【地】河流のために運搬せられたる土砂の、河口に堆積して成りたる島。其の形によりて稱す。三稜洲。

さんかく-じゅつ〔三角術〕(名)【數】さんかくはふ(三角法)に同じ。

さんかく-すげ (名)【植】さんかくゐ(藨草)の異名。

さんかく-すゐ〔三角錐〕(名)【數】底面が三角形なる角錐。

さんかく-そくりやう〔三角測量〕(名)【數】其線及び其の兩端と或る地點とのなす角を測り、依りて三角形を作り、之に三角法を應用して距離及び面積等を計ること。

さんかく-たう〔三角壔〕(名)【數】底面の三角形なる角壔。

さんかく-ぢやうぎ〔三角定規〕(名) 一種の定規。三角形をなすもの。

さんかく-づる (名)【植】一 かんがれい(水毛花)の異名。二 ぎやうじやのみづの異名。

さんかく-てん〔三角點〕(名) 原野等の一角に、遠望し得るやうに構成したるものにして、三角測量の角點を表示するもの。望標。

さんかく-どうめい〔三角同盟〕(名) 三國又は三者の締結せる同盟。

さんかく-の-はふ (句) 事をかくと、義理をかくと、恥ぢをかくとの稱。吝嗇なる者の所行を嘲りいふ語。俚言集覽

さんかく-はうていしき〔三角方程式〕(名)【數】未知角の三角函數と已知數との關係を表はす方程式。

さんがく-はかせ〔算學博士〕(名) さんはかせ(算博士)の唐名。

さんかく-はふ〔三角法〕(名)【數】三角函數の性質及び關係を攻究する科學。

さんかく-ひ〔三角比〕(名)【數】さんかくかんすう(三角函數)に同じ。

さんかく-へう〔三角表〕(名)【數】0°より90°までの角の三角函數の値と、其の對數とを列記したる表。前者を三角函數の眞數表、後者を三角函數の對數表と云ふ。

さんかく-りやうはふ〔三角量法〕(名)【數】さんかくそくりやう(三角測量)に同じ。

さんかく-ゐ〔藨草〕(名)【植】莎草科、藨(フト)屬の多年生草本。莖の高さ三尺許り、ほぼ三稜形にして、叢生す。葉は僅かに莖の下部に痕跡を止むるのみ。花は莖頂に近く小さき穗をなして生じ、夏季、茶褐色を呈す。我が國、各地、水濕の地に自生す。さんかくすげ。

さんかく-ゐげた 三角井桁 (名) 紋所の名。

さんか-しはらひ〔參加支拂〕(英 Payment par intervention)(名)【商】爲替手形又は約束手形の支拂人が、其の支拂を拒絕したる場合に、豫備支拂人・參加引受人、又は其の他の者のなす支拂。榮譽支拂。商法第四編第二章第八節第三款「參加支拂」

さんかしはらひ-にん〔參加支拂人〕(名)【商】參加支拂ひをなせる人。榮譽支拂人。商法第五百十一條「豫備支拂人又は參加引受人に非ざる參加支拂人か被參加人を示ささりしとき」

さんか-とちしょいうしゃ〔參加土地所有者〕(名)【法】御料地・國有地・官用地に非ずして、耕地整理地區內に編入せられたる土地を所有するもの。明治三十二年三月法律第八十二號耕地整理法第七條「參加土地所有者」

さんかど-の-そじゃう〔三箇度訴狀〕(名) さんもんじやう(三問狀)に同じ。沙汰未練書「三問狀者、三箇度訴狀也」道照愚草「一、訴論人の事中略三問狀、三箇度の訴狀也」

さんかど-の-ちんじゃう〔三箇度陳狀〕(名) さんたふじやう(三答狀)に同じ。沙汰未練書「一、三答狀者、三箇度陳狀也」道照愚草「一、訴論人事中略三問狀三箇度の訴狀也。此の答を三答と云ひ、三箇度の陳狀共云ふ」

さん-が-にち〔三箇日〕(名) 正月の元日・二日・三日の稱。大藏流狂言(米市)「三箇日さへ仕舞ひますれば」

さんか-にん〔參加人〕(名)【法】參加する人。特許法第七十七條二項「參加人」

さんか-の-ごゐ〔山家五位〕(名)【動】鳥類中、涉禽類の一種。大形の鷺なり。全部、淡黃色にして、數多の黑色斑條あり。夏季、我が國に見ることあり。

さんか-の-ちゃうじ〔三箇重事〕(名) 御卽位・御禊及び大嘗會の三箇の重大なる朝廷の式事。夏山雜談

さんが-の-つ〔三箇都〕(名) 江戶時代、江戶・京都・大阪の三箇の都府の稱。三都。

さんが-の-つ〔三箇津〕(名) 一 昔時、筑前國の博多津と伊勢國の安濃津と薩摩國の坊の津との稱。或ひは安濃津を除きて和泉の堺津を加ふ。二 前條に同じ。和訓栞「世に京・大阪・江戶の三都を三箇の津といふは、此の三都を謬りたる成るべし」三 京都と大阪と堺との稱。攝陽群談六、津「世俗、京・大阪・堺を指して三箇の津と稱す」

さんか-ひきうけ〔參加引受〕(英 Acceptation par intervention)(名)【商】爲替手形の支拂人が、單純なる引受けをなさざる場合、又は引受人が破產の宣告を受けて相當の擔保を供せざる場合に、豫備支拂人又は其の他の者のなす引受け。名譽引受。榮譽引受。商法第四編第二章第八節第一款「參加引受」

さんかひきうけ-にん〔參加引受人〕(名)【商】參加引受けをなしたる人。榮譽引受人。商法第五百三條「參加引受人」

さんがふ-どし〔三合年〕(名) 大歲と大陰と害氣とが合ふ年の稱。この年は凶災ありといふ。

さんか-ぼし (名) さん(參)をいふ、武藏國葛西の方言。物類稱呼

さん-かん〔三羹〕(名) 羊羹(ヤウカン)と鼈羹(ベツカン)と猪羹(チヨカン)との稱。類聚名物考

さん-かん〔山閒〕(名) やまのなか。やまのあひだ。やまあひ。蘇軾文(前赤壁賦)「惟江上之清風、與二山閒之明月一」

さん-かん〔三韓〕(名) 朝鮮の古稱。卽ち、馬韓・辰韓・弁韓の稱。後には新羅・百濟・高麗の稱。國姓爺三「御出陣と勇みしは、三韓退治の神功皇后」後漢書(東夷)「韓有二三種一、一日馬韓、二日辰韓、三日弁韓中略三韓之地」

さん-かん〔三竿〕(名) 日の高く昇りたること。蘇軾詩「曈朧曉日上三竿」

さん-かん〔參看〕 一 參照して看ること。參考して見ること。みくらぶること。二 人の中にまじはりて看ること。三 まゐり見ること。

さん-かん〔算勘〕 算盤(ソロバン)の勘定。算法上の勘考。計算上の才。東鑑卅六、寬元三年八月一日「參河守教隆及二算勘一」狂言記(算勘)「算勘の達して、五百具の朶の目を中で申す人あらば、聟に取らうと存ずる」

ざん-かん〔殘簡〕(名) 紛失したる殘りのかきもの。宋史(歐陽修傳)「凡周漢以降、金石遺文、斷編殘簡、一切綴拾、謂二之集古錄一」

ざん-かん〔讒奸〕(名) 妄りに人を讒言する惡人。

ざん-かん〔讒閒〕 讒を構へて離閒すること。晉書(劉元海載記)「王渾李熹以二鄉曲一見レ知、每相稱達、讒閒因レ之而進、深非二吾願一」

ざん-かん〔讒陷〕 讒を構へて人を罪に陷るること。後漢書(來歷)「共讒二陷太尉楊震一」

ざん-かん〔慚汗〕 いたくはぢてあせの出づること。

ざん-がん〔巉岸〕(名) きり立てたる如くけはしき岸。きりぎし。絕壁。

ざん-がん〔巉巖〕(名) きったての如くけはしきいはほ。銳く聳ちたる巖石。宋玉文(高唐賦)「登二巉巖一而下望兮」

ざんかん-じゃう〔斬奸狀〕(名) 奸人を斬殺する趣意をしたためたる書狀。

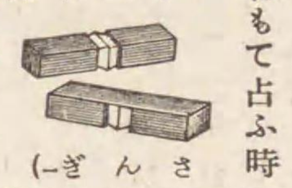
さん-き〔山氣〕(名) やまあひより起こる氣。淮南子(墜形訓)「山氣多レ男、澤氣多レ女」陶潛詩「山氣日夕佳」

さん-き〔三歸〕(名) 一 佛語。三寶に歸依すること。又、その戒。三歸戒。狂言記(呂蓮)「三歸・五戒を授く」大藏法數「如來初成二正覺一、因爲二提謂長者一、聞レ受二三歸之戒一」二 三寶に歸依することを述べて唱ふ

る經文。即ち、南無歸依佛・南無歸依法・南無歸依僧。又は歸依佛・歸依法・歸依僧の三句。著聞十六「此の男すこし立ちしりぞきて、三歸を唱へてゐたる所に」

さん-き〔三期〕（名）㊀取引所の語。當期・中期・先期の稱。㊁帳合商にて、毎年十月十七日より十二月二十四日までの期間と、翌年一月四日より四月八日までの期間と、四月十七日より十月八日までの期間との稱。

さん-ぎ 算木（名）㊀筮竹もて占ふ時に用ふる六箇の方柱狀の木。各陰陽あり、三箇は二面に中を凹めて陰の象とし、他の三箇の凹なきを陽となす。筮竹にて數へ出だして陰陽を知り、横に下より順次に爻を作り、卦の象によりて占ふ。狂言居杭「此の八卦も引きちらし、算木を取りましたら、算は合ひますまい」㊁【數】算盤の使用し難きとき、和算に用ふる一種の計數器。其の形、柱狀をなし、赤色のものと黒色のものとあり。前者は加を表はし、後者は減を表はす。之を横にしたるときは五、竪にしたるときは一、十等を表はす。平板上に配列・進退せしめ、以て計算をなす。


（さんぎ一）

さん-ぎ〔三儀〕（名）さんさい（三才）に同じ。

さん-ぎ〔贊議〕（名）朝鮮總督府中樞院の職員。中樞院の院議に參與するのみにて、其の決議に加はらざる勅任待遇。朝鮮總督の奏請により、内閣にて任命す。朝鮮總督府中樞院官制第三條「贊議」

さん-ぎ〔參議〕參木 ㊀議事に參與すること。續紀二、大寶二年五月丁亥「令レ參二議朝政一」明治二十六年五月勅令第三十五號軍事參議官條例第二條「軍事に關する機務に參議せしむ」㊁古昔、太政官中に置かれし官名。大臣及び大中納言と共に官中の政事に參議せしめしもの。四位以上の人を以て之れに任じ、公卿の列にあり。おほまつりごとびと。宰相。八座。續紀二、天平三年八月辛巳「擢二中略六人一、並爲二參議一」㊂明治二年七月太政官中に置かれ、左右大臣の次に位して大政の機務に參與せし職名。明治十八年十二月の官制改革によりて廢せられたり。

ざん-き〔殘期〕（名）のこりの期間。民法第五百八十一條二項「其殘期一年間に限り」

ざん-き〔慚愧〕心にはぢ入ること。はづること。太平記廿五、北野通夜物語「此に梨軍支比丘大に慚愧して」漢書貢禹「終亡二以報一厚德、日夜慚愧而已」

ざんき さんげ〔慚愧懺悔 さんげ（懺悔）に同じ。七十一番歌合「先達のざんぎさんげは我れやせん、板の目につくむしの下かな」曾我虎磨下「ざんぎ懺悔、六根罪障」

ざん-き〔慚悸〕はぢて恐れをののくこと。蘇頲文陳情表「周章慚悸、惶駭戰慄」

ざん-き〔讒毀〕人をあしざまにいふこと。

ざん-き〔殘毀〕そこなひやぶること。又、いたみそこなはるること。郭璞文封豕讚「薦食無レ厭、肆二其殘毀一」

ざん-き〔殘虧〕そこなひかくこと。一部を毀損すること。舊刑法第三百條二項「身體を殘虧し」

さんき-あきなひ 三期商（名）帳合商の三期の取引。

さんぎうば-くみあひ 産牛馬組合（名）牛馬の改良及び組合員の共同の利益を圖るため、牛若しくは馬の生産に從事するものの設置せる公共組合。産牛馬組合法「産牛馬組合」

さんぎうばくみあひ-れんがふくわい 産牛馬組合聯合會（名）産牛馬組合が互ひに氣脈を通じ、其の目的を達するために設置せる組合聯合會。

さんき-かい〔三歸戒〕（名）佛語。三寶に歸依すべき戒。盛衰記卅九、重衡請法然房「上人剃刀をとり、三位中將の頂に三度あて給ふ。初めには三歸戒を授け、後には十重禁をぞ說き給ふ」

ざん-ぎく〔殘菊〕（名）秋の末まで咲き殘りたる菊の花。唐太宗詩「殘菊猶承レ露」

ざんぎく の えん 殘菊宴 古昔、十月五日に宮中にて行はれし御宴。のこるきくのえん。本朝文粹三、詔「停二九日宴一、十月行二殘菊宴一詔」

さんぎ-くばり 算木配（名）算木をくばること。大藏流狂言居杭「算木配りと申して、此れを悉く置き直す事でござる」

さんぎ-くわい〔參議會〕（名）軍事參議院の會議。軍事參議院條例第三條「參議會」

さんぎ-くわん〔參議官〕（名）ぐんじさんぎくわん（軍事參議官）の略。軍事參議院條例第八條「陸軍又は海軍のみの參議官」

さんぎ-ごばう 算木牛蒡（名）ひらきごばう（開牛蒡）に同じ。

さんぎし（名）さぎあし（鷺足）をいふ、薩摩國の方言。下文を見よ。梅園日記一「今も遠江・駿河・常陸・上野・豐後にて鷺足といひ、薩摩にてさんぎしといふは、鷺足の訛りなり」

さん-きしや〔三騎射〕（名）笠懸・やぶさめ・犬追物の稱。

さんぎ-ちやくわ 算木茶菓（名）伊勢國宇治地方にて、年賀の客に出だす物。下文を見よ。鹽尻「伊勢宇治邊は、年禮の客來たれば、先づ折敷にさんぎちやくわとて、二寸ばかり割きたる木二三枚、稾にて結びたるを置き、田作・からじなどをまじへ、これを年始の饗とし、次に芋がしら三つ、椀に入れて寶珠といふ、これを据ゑわたし、小紙一帖を以て引出物とす」

さんきふ-せんきよ〔三級選擧〕（名）【法】次條の略。

さんきふ-せんきよはふ〔三級選擧法〕（名）【法】等級選擧法の一。納稅額などに基き、選擧人を三級に分かち、各級より同數の議員を選出せしむるもの。

さん-きやう〔三卿〕（名）江戸時代、將軍家の親族たる田安・一橋・淸水の三家の稱。其の官八省の卿に任ずるを以ていふ。宗家を輔翼し、宗家に嗣子なき場合には入りて繼嗣となるもの。德川八代將軍吉宗の時に置かる。

さん-きやう〔慘況〕（名）悲慘の狀況。慘狀。

さん-ぎやう〔鑽仰〕〔論語の子罕篇に、顏淵喟然嘆曰、仰レ之彌高、鑽レ之彌堅とあるに基く〕他人の德を仰ぎ慕ふこと。保元左府御最後「内外の鑽仰、只一心の爲めなり」

さん-ぎやう〔三形〕（名）さまやぎやう（三摩耶形）に同じ。

さん-ぎやう〔山行〕山中を旅行すること。さんかう。太平記二、三人僧徒關東下向「一行阿闍梨の火羅國に流されし、水宿・山行の悲しみも」

さん-きやく〔山脚〕（名）山のすそ。ふもと。山麓。山下。山足。杜荀鶴詩「路沿二山脚一潮痕出」

さん-きやく〔三脚〕（名）さんそく（三足）に同じ。

さん-ぎやく〔簒虐〕主君を弑して、その位をうばふこと。

ざん-ぎやく〔殘虐〕そこなひしへたぐること。殘酷に取り扱ふこと。唐書安祿山「虜性得レ所レ欲、則肆爲二殘虐一、人益不レ附」

さんぎやく-か〔三脚架〕（名）三本脚が適宜に開き得べき裝置の臺。

さん-きよ〔山居〕山中に住居すること。又、其の住居。やまずまひ。太平記十二、文觀僧正奢侈「詠二山居風味一、得二已熟印可一給へり」戰國策韓「韓地險惡山居、五穀所レ生、非レ麥而豆」

ざん-きよう〔殘兇〕（名）殘りの兇徒。うちもらされたるわるもの。徐陵文與二章昭達一書「殘兇所レ餘、唯有二歐紇一」

さん-きよく〔三極〕（名）さんさい（三才）に同じ。易經繫辭「六爻之動、三極之道也」

さん-きよく〔三局〕（名）太政官中の少納言局・左辨官局・右辨官局の稱。後に左辨官局・右辨官局・外記局の稱。令義解職員「太政官謂太政官内、總有二三局一。少納言・左辨官・右辨官、是也」職原抄「太政官中有二三局一、左右辨官・外記是也」

さんきよく の そう 三局奏 三局の史生が、縣召の除目後には京官の除目に、申文を上つりて任官を請ふこと。江次第四、除目「三局奏」

さん-きよく〔三曲〕（名）㊀筑紫琴・胡弓・三味線の稱。又、琴・三味線・尺八、或ひは琴・胡弓・三味線の稱。又、其れを合奏すること。㊁琵琶の祕曲たる流泉・啄木・楊眞操の稱。

さん-きらい〔山歸來〕（名）【植】百合科、山歸來屬の草本。攀緣植物にして、葉の長さ七八寸、幅一寸許り、三縱脈あり。葉腋より花軸を抽き、紫黃色の細花、二三十箇を簇生す。支那の産にして、往時我が國へ渡來し、地下莖を藥用に供す。

さんきらい-いばら 菝葜（名）【植】さるとりいばら（菝葜）の異名。

ざん-ぎり 散切（名）㊀髮を切り亂して結ばぬこと。なでつけ。さらがみ。いっそくぎり。若風俗三「髮、散切に夢元坊と名を替へ」傾城色三味線「つれたる散切の禿に入れさせ」㊁江戸時代、囚徒を取り扱ふ非人の稱。㊂斬髮（ザンパツ）に同じ。

ざんぎり-あたま 散切頭（名）ざんぎりにしたる頭。

ざんぎり-がみ 散切髮（名）散切にしたる髮。さんぱつ。關八州繫馬四「ざんぎりがみにて、驅け出で」

さん-きん〔山金〕（名）鑛山より採掘したる金。山相祕錄上「凡そ金の山中岩石より採りたる者を山金と名づく。其の色深黃にして甚だ美なり」大和本草三、金玉土石「山金を精煉したる、是れ眞金なり」

さん-きん〔散禁〕王朝時代、罪人に刑具を加へずして禁獄せしこと。一說、きんそく（禁足）に同じ。契沖令義解獄令「凡禁レ囚、死罪枷杻、婦女及流罪以下去レ杻、其杖罪散禁謂不レ關二木索一、唯禁二其出入一也、年八十歲以上・十歲以下及癈疾・懷孕・侏儒之類、雖レ犯二死罪一亦散禁」萬六「皆散二禁於授刀寮一、而妄不レ得レ出二道路一」

さん-きん〔參勤〕㊀まゐりつとむること。出勤。東鑑四十一、建長三年八月廿二日「評定衆中、所勞於下不二參勤一之輩上、不レ可レ乘二著到一之由、有二其沙汰一」㊁領地を出でて主君の許に在勤すること。關八州古戰錄東上野神梅郷士關由良國繁「桐生家頻敗の後は、北條氏政に屬して、一歲の内、一兩度宛、小田原へ參勤し」

さん-きん〔參覲〕㊀出仕して君にお目にかかること。㊁江戸時代大小名が一年おきに領地より江戸に參勤せしこと。

さんきん かうたい〔參覲交代 さんきん（參覲）に同じ。

ざん-きん〔殘金〕（名）のこりの金子。

ざん-ぎん〔殘銀〕（名）のこりの銀子。心中萬年草中「お梅を欲しいばっかりで、年年の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して」

さん-く〔慘苦〕（名）いたましき苦痛。

さん-ぐ〔産具〕（名）出産の時に要する種種の道具。

さん-ぐ〔蠶具〕（名）養蠶に要する種種の道具。

さん-ぐ〔散供〕㊀神佛の供物を取り下ぐること。江次第六、大殿祭「次南殿御膳宿、散供畢」㊁米などをまき散らして神佛に供ふること。散米。盛衰記九、康賴熊野詣「淸き砂を散供として、名句祭文を讀み上げて」

さんぐ の こめ 散供米 神佛に供ふるためにまき散らす米。七十一番歌合米買「戀せじと神のみ前にぬかづきて、さんぐの米のうちはらふかな」

ざん-く〔慚懼〕はぢおそるること。漢書朱博「誠慚懼」

さん-ぐう〔三宮〕（名）太皇太后と皇太后と皇后との三つの宮の稱。三后。

さん-ぐう〔三隅〕（名）〔論語の述而篇に擧二一隅一、不下以二三隅一反上、則不レ復也とあるより出づ〕三方のすみ。一方を除きて、他のすべての方面。太平記卅九、光嚴院禪定法皇行脚「一言未レ擧先に、三隅の高察も候はん歟」

さん-ぐう〔參宮〕伊勢神宮に參詣すること。宗五大草紙「いにしへの人の敎へ申す事。一、伊勢へ御參候を參宮と申し候」花營三代記應永廿八年二月十八日「爲二御參宮一御出京有」

さん-くつ〔山窟〕（名）山にあるいはや。山の洞窟。

さん-くづし 算崩（名）〔算木崩しの義〕三筋づつ縱横に石だたみにしたる縞又は染模樣。

さん-くばい〔山苦蕒〕（名）【植】あきののげし（山苦蕒）に同じ。

さん-くわ〔山花〕（名）山中に咲く花。李白詩「沽レ酒來何遲、山花向レ我笑」

さん-くわ〔山果〕山菓（名）山中にてみのりたる果物。太平記卅九、光嚴院禪定法皇行脚「山菓落レ庭朝、三食飽二秋風一」王維詩秋夜獨坐「雨中山果落」

さん-くわ〔三貨〕（名）金と銀と錢との三種の貨幣の稱。

さん-くわ〔三過〕（名）口の過ちと身の過ちと意の過ちとの三つの稱。

さん-くわ〔産科〕（名）出産に關する醫術。

さん-くわ〔參和〕まぜあはすること。又、まじりあふこと。

さん-くわ〔酸化〕【化】或る物質の酸素と化合すること。廣義には、第一鐵が第二鐵に變ずる如く、陽いおん・の價の增すことをもいふ。

ざん-くわ〔殘花〕（名）ちり殘りたる花。殘英。殘葩。朗詠「風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂寞紅」庾信詩「舊﨟憔悴長、殘花爛熳舒」

ざん-くわ〔殘果〕（名）㊀木にとりのこされたる果物。劉商詩「鳥喧殘果落」㊁食殘しの果物。

ざん-くわ〔殘菓〕（名）食ひ殘しの菓子、又は果物。

さんくわ-あえん〔酸化亞鉛〕（名）【化】あえんくわ（亞鉛華）に同じ。

さんくわ-あるみにうむ〔酸化——〕（英 Aluminium Oxide）（名）【化】白色の粉末。一にあるみな（Alumina）と稱す。天然に産出するは鋼玉にして、其の硬さ金剛石に亞ぎ、透明なるは寶石となし、粒狀をなすものは研磨用となし、又、時計の軸受けなどにも用ふ。紅玉・靑玉等は不純物の爲めに著色せる鋼玉なり。礬土。

さん-くわい〔三槐〕（名）〔支那にて周の世に、外朝に三本の槐を植ゑ、三公は其れに向かひて坐位を設けしといふ故事

に基く」さんこう(三公)に三の異稱。周禮秋官「面三三槐、三公位焉」宋史王旦「祐手植三三槐於庭、曰、吾之後世、必有下爲三三公一者上」

さんくゎい　山廻　(名)　鷹の肩部の名所。たか(鷹)を見よ。

さんくゎい　杉檜　(名)　すぎの木とひの木と。李中詩「杉檜已依二靈塔一老」

さんくゎい　參會　㊀會合の人數に加はること。まゐりあはすること。出あふこと。保元義朝弟共被誅「六道の衢にてかならず參會奉るべく候」白居易文「參二會於夷陵一」㊁よりあひ。集會。會合。狂言秀句大名「此の中の彼方・此方の御參會は、おびただしいことでござる」大藏流同二千石「彼方の振舞、此方の參會のと申して」

さんくゎい　散會　㊀集會はてて、人人の退散すること。㊁取引所の語。立會を閉鎖すること。

ざんくゎい　殘懷　(名)　心中に思ひ殘すこと。又、その思ひ。

ざんくゎい　殘壞　そこなひやぶること。殘毀。北史裴寶「殘二壞舊宅一」

ざんくゎい　慚悔　罪過などをはぢ悔ゆること。後漢書魯恭「亭長乃慙悔」

さんくゎいき　三回忌　(名)　死したる年より數へて三年目の回忌。三年忌。管見記永享五年十月九日「今日慶壽院殿三廻忌也」

さんくゎう　三光　(名)　㊀さんくゎうてん(三光天)の略。川中島合戰三「月日と星の三光の、一度に照らすかと身に應へ」禮記鄉飲酒「紀レ之以二日月一參レ之以二三光一」史記孝文本紀「朕下不レ能レ理二育群生一上以累二三光之明一其不德大矣」㊁【動】三光鳥の聲を擧びて鳴く鶯の稱。江戶の方言。物類稱呼 狂言「あれは世間に重寶する、三光とやらいふ鳥であらう」雅筵醉狂集春「鶯中略此の鳥の月・日・星となくを、俗に三光と賞するなり」

さんくゎうの びゃう　三光鋲　兜の鉢の三所に打ちたる鋲。

さんくゎうの ほし　三光星　さんくゎう(三光)㊀に同じ。義經記一、遮那王殿鞍馬出「夕べには三光の星を戴き」

さんくゎう　三皇　(名)　支那上古の著名なる三人の帝王。即ち、伏羲・神農・黃帝の稱。一說に包犧氏・女媧氏・神農氏、又は天皇氏・地皇氏・人皇氏の稱ともいふ。平治信賴信西不快「三皇・五帝の國を始め」周禮春官「外史掌二三皇五帝之書一」

さんくゎう　散光　(名)　【理】平滑ならざる表面に於いて反射せる光。表面が種種なる方向の小平面の集まりなるため、一定の方向より來たれる光も種種なる方向に反射し、恰も其の表面自身より光を發する如くに見ゆるもの。自ら光を發せざる物體を、各方より見止め得るは此の光による。

ざんくゎう　慙惶　はぢおそるること。蕭后文述志賦「雖レ沐二浴于恩光一內慙惶而累息」

さんくゎうごう　三皇后　(名)　太皇太后と皇太后と皇后との稱。三后。三宮。

さんくゎうてう　三光鳥　(名)　【動】㊀鳥類中、燕雀類の一種。體は雀大にて、嘴尖りて赤く、基部側扁にて鬚を生ず。頭と腹とは白く、背は淡紫色にて、翅は淡藍色。深山に棲み、鳴聲月・星・日と囀るに似たり。保護鳥の一なり。㊁まめまはし(豆廻)の異名。

(さんくゎうてう―)

さんくゎうてん　三光天　(名)　日天と月天と星天との稱。三光。繫八卦柱曆卌「三光天を拜むとて、七十になる道順が、朝每垢離を取る時は」

さんくゎうどり　三光鳥　(名)　【動】さんくゎうてう(三光鳥)㊀の異名。

さんくゎ-えん　酸化鉛　(名)　【化】黃色の粉末。空氣中にて鉛を强熱して成生す。硝子の製造に用ひらる。密陀僧(みつだそう)。

さんくゎ-えん　酸化焰　(名)　【化】焰の外部は酸素の供給十分なれば、燃燒最も盛んなるを以て、ここにて他物を熱するとき、それに觸れたる處、最もよく酸化す。故に外部を酸化焰といふ。

さんくゎ-かるしうむ　(英 Calcium oxide)〔酸化――〕(名)　【化】生石灰ともいひ、白色塊狀にして、水を注加すれば烈しく熱を發生し、漸次膨大して粉末狀となる。石灰石・大理石等、炭酸かるしうむ・を灼熱して製す。

さんくゎ-ぎん　酸化銀　(名)　【化】黑色粉末狀の物質。鹽化銀を苛性加里液と共に熱すれば生ず。熱によりて酸素と銀とに分解し、酸化力强し。

さんくゎく　參畫　計畫に參與すること。參與して畫策すること。元稹詩「參畫敦龐」

さんくゎく　贊畫　計畫を贊助すること。贊助して畫策すること。

ざんくゎく　斬獲　斬馘することと捕獲することと。又、敵の首級などをうちとること。左傳襄公十三年「用二大師一焉曰レ滅。」杜注「斬獲俘馘、用力難重」

ざんくゎく　斬馘　首を斬ること。くびきり。陸游文南唐書「被レ堅執レ銳、提レ戈斬馘」

さんくゎ-くろむ　(英 Chromic oxide)〔酸化――〕(名)　【化】Cr_2O_3 くろむ・の酸化物にして、通常三二酸化くろむ・と稱すべきもの。綠色の粉末にして、くろむ綠といひ、顏料となし、又、青色がらす・を造るに用ふ。

さんくゎ-ざい　酸化劑　(名)　【化】他の物質を酸化する能を有する物質。硝酸・過酸化水素・おぞーん・鹽素の如き類。

さんくゎ-さよう　酸化作用　(名)　【化】他の物質の酸素と化合する作用。

さんくゎ-すゐぎん　酸化水銀　(名)　【化】黃赤色の重き粉末。熱すれば酸素と水銀とに分解す。

さんくゎ-だいいちすず　酸化第一錫　(名)　【化】暗褐色の粉末。空氣中にて强熱すれば、酸化第二錫に變ず。

さんくゎ-だいいちどう　酸化第一銅　(名)　【化】Cu_2O 銅の酸化物。帶黃赤色結晶狀の粉末をなし、硫酸に溶けて硫酸銅となる。硫酸銅のあるかり溶液を葡萄糖等にて還原して得らる。

さんくゎ-だいにすず　酸化第二錫　(名)　【化】天然には錫石となりて產出す。錫を空氣中にて燃やせば生ず。水及び酸に不溶にして、炭と共に强熱すれば錫を生ず。酸化第二錫を油にて煉りたるものをばて・と稱し、硝子の接合に用ふ。

さんくゎ-だいにてつ　酸化第二鐵　(名)　【化】綠礬を强熱して得らるる赤色の粉末。研磨用・顏料等とす。べにがら。天然には赤鐵鑛となりて產出す。

さんくゎ-だいにどう　酸化第二銅　(名)　【化】銅の酸化物。第一銅よりも普通なるが故に、通常單に酸化銅又は黑色酸化銅と呼ぶ。さんくゎどう(酸化銅)を見よ。

さんくゎ-たん　散華丹　(名)　げんわうたん(玄黃丹)に同じ。和名抄「玄黃丹一名、散華丹」

さんくゎ-たんそ　酸化炭素　(名)　【化】無色・無臭・無味の有毒なる氣體。靑色の焰を擧げて燃ゆ。酸素の供給不十分

なる處にて炭素を燃やすか、又は赤熱せる炭火に炭酸瓦斯を通じて得べし。盛んに熾こりたる炭火の上にて靑焰を見るは、此のものの燃燒によるなり。

さんくゎ-ちっそ　酸化窒素　(名)　【化】銅・銀等の硝酸に溶くるとき、發出する無色の水に溶け難き氣體。空氣中に出づれば直ちに酸化して、赤褐色の過酸化窒素となる。

さんぐゎつ　三月　(名)　一年の第三番目の月。やよひ。花見月。

さんぐゎつ の せっく　三月節句　陰曆三月三日の節句。女子の祝日として雛祭を行ふ。桃の節句。重三。上巳。

さんぐゎつ-ぎり　三月桐　(名)　紋所の名。

さんぐゎつ-だいこん　三月大根　(名)　【植】十字花科、萊菔屬の一二年生草本。大根の一種。秋の末に種を下ろし、翌年春季、根を取りて食用に供す。白く肥えて、皮厚し。楊花蘿蔔。

さんくゎ-どう　酸化銅　(名)　【化】酸化第二銅といふべきものにして、銅を空氣中にて熱するとき生ずる黑色物。

さんくゎ-どう　參和銅　(名)　金銀貨幣を鑄造するとき、これに參和する銅。

さんくゎ-にっける　(英 Nickel oxide)〔酸化――〕(名)　【化】NiO 綠色の粉末。酸に溶けてにっける鹽を生ず。硝酸鹽又は炭酸鹽を熱して得べし。

さんくゎ-ばりうむ　(英 Barium oxide)〔酸化――〕(名)　【化】BaO 白色の粉末。空氣中にて適度に熱すれば過酸化ばりうむ・となり、水と烈しく化合して水酸化ばりうむ・を生ず。通常硝酸ばりうむ・を熱して製取す。

さんくゎ-ぶつ　酸化物　(名)　【化】酸素と他の物質との化合によりて生じたるもの。

さんくゎ-まぐねしうむ　(英 Magnesium oxide)〔酸化――〕(名)　【化】まぐねしうむ・を燃やしたるとき生ずる白色の粉末。極めて熔け難く、酸に溶けて鹽類となる。まぐねしあ。苦土。

さんくゎ-めいちゅう　三化螟蟲　(名)　【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。幼蟲を髓蟲と稱す。年三回發生して、稻に大害をなす。卵は葉の表に產み附けられ、母蛾の毛を以てこれを被ふ。これより孵化したる幼蟲は、稻の莖中に侵入し、初めは莖の上部に在るも、老成すれば最下部に降り、粗繭を作りて化蛹す。成蟲は體の長さ四分、翅の開展八分許り、全身曇白色にて、翅は淡黃灰色を帶ぶ。雄蛾は稍小さく、褐色を呈す。幼蟲の儘にて越年し、翌春化蛹す。

さんくゎん　三澣　三浣　(名)　〔くわん(澣)は洗ふ義。支那にて唐の時、官吏が旬日每に休沐を賜はりしよりいふ〕上澣・中澣・下澣の稱。三旬。和漢名數師序「三旬十日曰レ旬、又曰二三澣三浣一」

さんくゎん　三管　(名)　笙と笛と篳篥との三種の管樂器。樂家錄十三、三管總論「名二三管一之說。號レ管者以二吹物一謂爾、笙・篳篥・笛之三也。故號二之三管一也。管和訓不使毛乃」

さんくゎん　三關　(名)　古昔の重要なる三つの關所。即ち、伊勢國の鈴鹿關・美濃國の不破關・越前國の愛發(アラチ)關の稱。後には伊勢國の鈴鹿關・美濃國の不破關・近江國の逢坂關の稱。又、勢多・鈴鹿・不破をもいふと。令義解軍防「其三關者謂、伊勢鈴鹿・美濃不破・越前愛發等、是也」二中歷六、關「三關。勢多・鈴鹿・不破關」名目抄公事「三關會坂・鈴鹿・不破、固關之時、此三關也」

さんくゎん　散官　(名)　一定の職務なき官。又、事務の少なき官。通鑑唐玄宗紀註「散官無二職掌一」

さんくゎん　山館　(名)　山中の旅館。山中の建物。朗詠「山館雨時鳴自暗、野亭風處織猶寒」太平記廿九、光嚴院禪定法皇行脚「道すがらの山館・野亭を御覽ぜらるるにも」韋應物詩「山館夜聽レ雨」

さんくゎん　三觀　(名)　佛語。空・假・中の三諦を觀ずること。盛衰記三、一院御幸「今世拂二天氣於三觀之窻一來世證二妙果於一佛之土一」

さんくゎん　參館　人の家を訪問することの敬語。參堂。

さんくゎん　參觀　まゐりみること。參加して觀ること。參看。

さんくゎん-あめ　三官飴　(名)　江戶時代、江戶芝の菓子商三官の製せし飴。紫一本「菓子は日本橋一丁目鹽瀨がまんぢゆう、麴町助總がふの燒き、池の端のめりやすせんべい、本町馬場の葛せんべい、芝三官の唐飴」

さんくゎん-こく　三關國　(名)　三關のある國國。令抄「三關國。愚謂、伊勢鈴鹿關・美濃不破關・越前愛發關、謂二之三關國一也」

さんくゎん-りゃう　三管領　(名)　室町時代の管領たる斯波・細川・畠山の三家の稱。さんくわんれい。

さんくゎん-れい　三管領　(名)　前條に同じ。

さんぐん　三軍　(名)　㊀支那の周代に、大諸侯の出だす定めなる上軍・中軍・下軍(各軍一萬二千五百人づつ)の稱。後、轉じて大軍の意に用ふ。太平記十、赤橋相模守自害「三軍をば可レ奪レ帥とは、彼れをぞ云ふべき」周禮大司馬「王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍」論語子罕「子曰、三軍可レ奪レ帥也、匹夫不レ可レ奪レ志也」㊁軍隊の前鋒と中堅と後拒と。又は左翼と中軍と右翼との稱。又、全軍の稱。川中島合戰三「我が師範となり、三軍を司り、弓箭の力を助け給はば」

さんぐん　參軍　軍事に參與すること。又、その人。晉書孫楚「天子命レ我、參二卿軍事一」同職官志「增二參軍一爲二六人一」

さんけ　產氣　(名)　出產の氣色。さんのけ。盛衰記四十三、御產皇后宮新羅「御產氣止まりて、異國へ渡り給ひしに」

さんけ　三家　(名)　江戶時代、將軍家の一門たる尾張の德川家と紀伊の德川家と水戶の德川家との稱。大名の首座に位し、爵位、宗家に次ぐ。

さんげ　(名)　さいげん(際限)の訛り。かた言「さいげもない」

さんげ　散華　佛語。法會の時など、樒の葉又は紙製の花をまき散らすこと。盛衰記八、讃岐院「燒香 散華を奉る參詣の者も無かりけり」

さんげ　懺悔　〔懺は梵 Ksama の略、悔過の義。悔の字を加へたるは漢・梵を並擧したるもの〕㊀佛語。過去の罪惡を悟りて後悔すること。又、過去の罪惡を悔いて神佛に告げ謝すること。金槐集下「堂をたて塔をつくるも人なげき、さんげにまさるくどくやはある」梁武帝詩「今日此衆、誠心懺悔」㊁ざんげばなし(懺悔話)の略。狂言塗師平六「職の有様、懺悔せよ」

さんげ めつざい　懺悔滅罪　佛語。懺悔して、つくりたる罪を滅ぼすこと。盛衰記卅九、重衡請法然房「先非を悔いて後世を恐るる、是れを懺悔滅罪の功德と名づく」

ざんげ　懺悔　佛語。前條の訛り。

さんけい　三景　(名)　我が國にて、風景の最もすぐれたる三箇の場所。即ち、陸前國の松島・安藝國の嚴島・丹後國の天の橋立の稱。又、紀伊國の和歌浦・陸前國の鹽釜・丹後國の切渡の文珠をもいふ。

さんけい　三形　(名)　高地と下地と平地との三種の地形。

さん-けい〔三徑〕(名)〔陶潛の歸去來の語句に基く〕庭園中の三つのこみち。陶潛文歸去來「三徑就ㇾ荒、松菊猶存」

さん-けい〔山徑〕(名) 山中のこみち。やまみち。孟子盡心下「山徑之蹊閒、介然用ㇾ之而成ㇾ路」

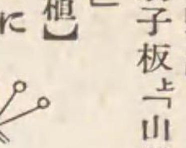
さん-けい〔山景〕(名) 山中の風景。山の景色。

さん-けい〔山形〕(名) さんせい(山勢)に同じ。駱賓王詩「山形類㆓九折㆒」

さん-けい〔慘刑〕(名) 慘酷なる刑罰。酷刑。

さん-けい〔山雞〕(名)【動】やまどり(山雞)に同じ。雪女五枚羽子板上「山雞を鳳凰とし、燕石を珠と見て」

さん-けい〔繖形〕(名)【植】植物學上の用語。花穗の一にして、軸頂の一點より數箇の花梗の、圖の如く出でたる形。


(いけんさ)

さん-けい〔山系〕(名)【地】山脈の集まりて、系統をなすもの。

さん-けい〔參詣〕㊀まゐりまうづること。往き訪ること。晉書藝術「王嘉遷㆓于倒獸山㆒、苻堅累徵不ㇾ起、公侯以下、咸躬往參詣」㊁神社・佛閣にまうづること。かみまうで。ものまうで。保元法皇熊野御參詣「法皇熊野へ御參詣あり」

ざん-けい〔斬刑〕(名) 斬首の刑罰。斬罪。死刑。保元爲義最期「罪既に斬刑に當たる由、法家の輩、勘へ申ししかども」

さんけい-くわ〔繖形科〕(名)【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本。葉は數回複葉、稀に單葉互生し、葉柄の基部往往擴張せり。托葉は稀に存す。花は小にして、概ね繖形又は複繖形花序に排列し、兩性又は屢雜性なり。蕚の筒部は子房に合著す。花冠は離瓣、五瓣より成り、蕚の遊離緣に附著す。雄蘂は五箇を有し、子房は下位、二室より成る。花柱は二箇、永存性なり。子房の各室は一胚珠を藏す。果實は多く懸果をなし、種子は軟骨樣の胚乳を有す。本科に屬するものは殊に溫帶地方に分布し、食用或ひは藥用として有用なるものあり。

さんけい-くわじよ〔繖形花序〕(名)【植】植物學上の用語。總狀花序の一種にして、花軸の各節短縮して、恰も花軸の頂端より數箇の同長なる花梗を有する花を簇生する如き觀を呈するに至りしもの。例へば、櫻の花序の如し。

さんけい-たん〔三景丹〕(名) 古昔の藥の名。和名抄十「三景丹」

さんけい-ぼく〔傘形木〕(名) 外觀、傘の形をなせる木。松・びやくしんの類。

さん-けう〔三教〕(名) ㊀三つのをしへ。即ち、儒教と佛教と道教と、又は神道と儒教と佛教との稱。三教指歸「勒成㆓三卷㆒、名曰㆓三教指歸㆒」註「三教所ㇾ謂、釋・李・孔之教也」大原問答青葉笛三「しんいんは摩訶迦葉、辯舌はふるな尊、行ひはしゆ菩提、三教一致の上人なれば」文中子問易「程元曰、三教何故」註「儒・老・釋」㊁佛語。阿合(アゴン)・般若(ハンニャ)・深密(ジンミツ)の三時の教へ。

さん-けう〔山橋〕(名) 山間に架けたる橋。杜甫詩「野店山橋送㆓馬蹄㆒」

さん-けう〔棧橋〕(名) さんばし(棧橋)に同じ。

さん-げき〔慘劇〕(名) 悲慘なるすぢの演劇。又、悲慘なる出來事。

さんげ-し〔散華師〕(名) 佛語。大法會の時、散華を掌る僧。

ざんげ-しよ〔懺悔所〕(名) 過去の罪惡を悔悟して、神佛に告げ謝するに充てられたる場所。

さん-げだつ〔三解脫〕(名) 佛語。定・無想・無願の三種の解脫。

さん-けつ〔三傑〕(名) 三人のすぐれたる者の稱。太平記五、大塔宮熊野落「則祐が忠は孟施舍が義を守り、平賀が智は陳丞相が謀を得、義光が勇は北宮黝が勢ひを凌げり。此の三傑を以て我盍ㇾ治㆓天下㆒哉」蘇頲詩「野餞廻㆓三傑㆒、軍謀用㆓六奇㆒」小學紺珠「漢三傑、留文成公張良・酇文終侯蕭何・淮陰侯韓信」

さん-けつ〔參決〕 參與して決斷すること。決議に參與すること。魏書高宗紀「每ㇾ有㆓大政㆒、常參㆓決可否㆒」唐書武后紀「遺詔、軍國大務聽㆓參決㆒」

さん-げつ〔產月〕(名) うみづき(產月)に同じ。

さん-げつ〔山月〕(名) 山の上に出でたる月。朗詠「念㆓極樂之尊㆒一夜、山月正圓」曾我四、箱王下曾我「山月東に前途を指して」王勃詩「山月照㆓秋林㆒」

ざん-けつ〔殘缺 殘闕〕 そこなひかけて全からぬこと。漢書藝文志「周室既微、載籍殘缺」賈至文宓子賤碑銘「古碑殘缺」

ざん-げつ〔殘月〕(名) 曉まで空に殘りたる月。ありあけ月。朗詠「遊子猶行㆓於殘月㆒、函谷雞鳴」陳子昂詩「飛霜遙度ㇾ海、殘月廻臨ㇾ邊」

ざんげ-ばなし〔懺悔話〕(名) 自ら過去の罪惡を悔いて人にうちあけ話すこと。嫗山姥二「初對面の皆樣へ、在りし昔の懺悔話、お恥づかしやとばかりにて」

さん-けふ〔山峽〕(名) 山と山との閒。たにあひ。はざま。溪閒。淮南子「彷㆓洋乎山峽之旁㆒」

さん-げふ〔產業〕(名) ㊀世渡りの仕事。家の業務。なりはひ。生業。續紀二、大寶元年九月戊寅「遣㆓使諸國㆒、巡㆓省產業㆒、賑㆓恤百姓㆒」韓非子解老「外不ㇾ事ㇾ利㆓其產業㆒」史記高祖本紀「不ㇾ能ㇾ治㆓產業㆒、不ㇾ如㆓仲力㆒」同平準「民偸㆓甘食好衣㆒、不ㇾ事㆓畜藏之產業㆒」㊁生產の事業。太平記十五、藤太「絹中略是れは產業の財なればとて」產業組合法第二條「組合員の產業」

さん-げふ〔蠶業〕(名) 養蠶の事業。

さんげふ-かうしふじよ〔蠶業講習所〕(名) ㊀蠶業に關する學理及び技術を講習する所。㊁農商務大臣の管理に屬して、蠶絲業に關する講習・試驗・調査・巡廻講話・質問應答及び蠶種配布の事務を掌る所。所長・技師・舍監・技手・書記の職員を置く。蠶業講習所官制「蠶業講習所」

さんげふ-かうしふじよ-ちやう〔蠶業講習所長〕(名) 農商務大臣の管理に屬する蠶業講習所の長官。技師を以てこれに充て、農商務大臣の指揮・監督を承けて、所中全般の事務を掌理するもの。

さんげふ-くみあひ〔產業組合〕(名) 組合員の產業、又は其の經濟の發達を企圖するため、地方長官の許可を得て設立したる營利的社團法人。信用組合・販賣組合・購買組合及び生產組合の四種に分かつ。各條を見よ。產業組合法「產業組合」

さんげふくみあひ-ちゆうあうくわい〔產業組合中央會〕(名) 產業組合及び產業組合聯合會の普及・發達及び聯絡を圖るために、主務大臣の許可を受けて設立する社團法人。產業組合・產業組合聯合會及び其の以外の者を會員とし、會員及び會員たる產業組合又は產業組合聯合會の理事・監事の中より選任せる理事及び監事の機關を置く。產業組合法第九章「產業組合中央會」

さんげふくみあひちゆうあうくわい-とうきぼ〔產業組合中央會登記簿〕(名) 產業組合中央會に關する事項を登記するために、各登記所に備ふる帳簿。產業組合法第九十七條「產業組合中央會登記簿」

さんげふくみあひ-とうきぼ〔產業組合登記簿〕(名) 產業組合に關する事項を登記するために、各登記所に備ふる帳簿。產業組合法第九十七條「產業組合登記簿」

さんげふくみあひ-れんがふくわい〔產業組合聯合會〕(名) 產業組合が道・府・縣以內の範圍にて其の區域を定め、組合相互の氣脈を通じ、其の目的を達するために設立する社團法人。信用組合聯合會・販賣組合聯合會・購買組合聯合會及び生產組合聯合會の四種に分かつ。各條を見よ。產業組合法第九章「產業組合聯合會」

さんげふくみあひれんがふくわい-とうきぼ〔產業組合聯合會登記簿〕(名) 產業組合聯合會に關する事項を登記するために、各登記所に備ふる帳簿。產業組合法第九十七條「產業組合聯合會登記簿」

さんげふ-せいど〔產業制度〕(名) 產業に關する制度。

さんげふ-そしき〔產業組織〕(英 Industrial organization) (名) 產業上必要なる要素を結合して、永續の經濟關係を形成する組織。

ざんげ-ぶみ〔懺悔文〕(名) 懺悔の意を記したる文。

ざんげ-ものがたり〔懺悔物語〕(名) ざんげばなし(懺悔話)に同じ。賀古教信七墓廻五「罪を助けてたび給へ、懺悔物語申すべし」

さん-けん〔山犬〕(名) 山にすむ犬。山家の犬。やまいぬ。溫庭筠詩「柳閣山犬吠、蒲荒水禽立」

さん-けん〔三賢〕(名) 書道にて、三人の賢者。即ち、小野道風・藤原佐理・藤原行成の稱。尺素往來「道風・佐理・行成、稱㆓之三賢㆒候哉」

さん-けん〔三權〕(名)【法】國權を區分したる立法・司法及び行政の三種。

さんけん-ぶんりつ〔三權分立〕(佛 Separation de pouvoir. 英 Separation of power)【法】三權を各獨立せる三種の機關に分配して、互ひに相侵さざらしめ、因りて人民の自由を保護せんとする主義。佛蘭西國の碩儒もんてすきゆー氏の唱導せるもの。

さん-けん〔蠶繭〕(名) かひこのまゆ。又、養蠶の稱。後漢書列女傳樂羊子妻「此織生自㆓蠶繭㆒、成㆓於機杼㆒」

さん-けん〔散見〕 あちこちに見ゆること。ちらほら見ゆること。

さん-けん〔鑽研〕 みがききはむること。深く考へきはむること。研鑽。研究。後漢書鄭玄傳「以ㇾ書戒ㇾ子曰、君子之道、鑽研勿ㇾ替、敬㆓愼威儀㆒、以近㆓有德㆒」

さん-げん〔三元〕(名) ㊀上元と中元と下元との稱。㊁〔年と月と日との始めの義〕正月元日の稱。玉燭寶典「正月一日爲㆓元日㆒、亦云㆓三元㆒」㊂天地の始・中・終の稱。十六國春秋「盡㆓三元㆒而止」

さん-げん〔三絃〕(名) ㊀支那にて、三つの絃を張りたる樂器の稱。元史禮樂志「指㆓授工人㆒、造㆓琴十張㆒、一絃・三絃・五絃・七絃・九絃、各二」楊愼文「今之三絃、始㆓于元時㆒」㊁さみせん(三味線)に同じ。

さん-げん〔三軒〕(名) 芝居にて用ふるかづらの一種。

ざん-げん〔讒言〕 事實を虛構・附會して人を惡しざまにいふこと。しこづること。宇治拾遺十「この事、申し人の讒言にも侍らん」盛衰記十九、文覺發心「何人が如何と讒言したれば、かく憂き振舞をばし給ふぞ」書經盤庚「爾無㆓共怒、協比讒㆒言予一人㆒」詩經小雅「豈弟君子、無ㇾ信㆓讒言㆒」

さんげん-とび (名)【動】あをがへる(青蛙)をいふ、豐前國の方言。俚言集覽

さんげん-は〔山元派〕(名) 眞宗の十派の一。釋善鸞を流祖とし、越前國今立郡横越村(始めは山元村)の證誠寺を本山とするもの。明治五年本願寺派に從屬せしめられしが、同十一年別派獨立の許可を得たり。釋門寺物紀原上「眞宗山元派越前證誠寺」

さんげん-れんりつはうていしき〔三元聯立方程式〕(名)【數】相異なる三つの未知數を含む聯立方程式。

さん-こ〔三孤〕(名) 支那の周代にて、三公の次に位したる少師と少傅と少保との稱。書經周官「少師・少傅・少保曰㆓三孤㆒」

さん-こ〔三鼓〕(名) ㊀太鼓と羯鼓と鉦鼓との稱。樂家錄廿五、三鼓總論「夫羯鼓・太鼓・鉦鼓者、雖㆓其器各異㆒、而擊ㇾ之爲ㇾ節、皆同類也」㊁さんかう(三更)に同じ。程鉅夫詩「獨徹宮蓮三鼓後」

さん-こ〔三鈷〕(名) 金剛杵(コンガウシヨ)の一種。こんがうしよ(金剛杵)を見よ。弘法大師行化記「以㆓三鈷㆒向㆓日本㆒投ㇾ之、則三鈷遙飛㆓入空中㆒」井筒業平河內通「いで一祈りと烟にのぞみ、獨鈷・三鈷・鈴・錫杖」

さん-こ〔三顧〕〔支那、蜀の劉備が三たび諸葛亮の廬を訪ひたる故事に基く〕上に立つ人より、特別の信任・優遇を受くること。諸葛亮文前出師表「三顧㆓臣於草廬之中㆒、諮ㇾ臣以㆓當世事㆒」

さん-ご〔三五〕(名)〔三と五との相乘積十五なるよりいふ〕㊀じふごや(十五夜)の稱。特に八月十五夜をいふ。禮記禮運「地秉ㇾ陰竅㆓於山川㆒、播㆓五行於四時㆒、和而後月生也、是以三五而盈、三五而闕」文選古詩「三五明月滿、四五詹兔缺」㊁ここに三つ、かしこに五つと、まばらなるさまにいふ語。ちらほら。詩經召南「嘒彼小星、三五在ㇾ東」㊂びは(琵琶)の異稱。歌舞品目三、八音「琵琶中略三五又妙音院殿下の撰み玉ひし琵琶の譜をば三五要略と題せられしは、風俗通に見えたる琵琶長三尺五寸といふ本文に取り玉ひしなるべし。其の度は、後漢の制を以て定むべきにや」

さんご の じふはち 三五十八 ㊀商賣上の見込の、實際に合はぬにいふ語。世間胸算用一「何ほど利發・才覺にしても、若き人には、三五の十八、ばらりと違ふこと數數あり」㊁心得違ひなるを悟らずして滿足するにいふ語。

さんご の つき 三五月 陰暦十五夜の月。特に八月十五夜の月の稱。劉孝綽詩「明明三五月」

さんご の ゆふべ 三五夕 陰暦十五日の夜。特に八月十五夜の稱。

さんご の よ 三五夜 前條に同じ。

さん-ご〔產後〕(名) 子を生みたるあと。分娩後。(產前の對) 若風俗四「產後・產前の名人、銀鍋にはやめ藥を仕かけ置きぬ」

さん-ご〔山後〕(名) 山のうしろ。やまかげ。山背。盧綸詩山中「偶從㆓山後㆒到㆓山前㆒」

さん-ご〔珊瑚〕(名) ㊀珊瑚蟲の群體の作りたる中軸骨格の稱。史記司馬相如傳「玫瑰碧琳、珊瑚叢生」㊁さんごじゆ(珊瑚珠)の略。浦島年代記四「瑠璃の瑤珞、珊瑚の華鬘」

さん-ご〔參伍〕 彼れ此れ入りまじること。とりまぜて組み合はすること。易經繫辭「參伍以變」

さん-こう〔三后〕(名) 太皇太后と皇太后と皇后との稱。三宮。三皇后。舊刑法第百十六條「天皇三后皇太子」

さん-こう〔三公〕(名) ㊀太政大臣・左大臣・右大臣の總稱。後には左大臣・右大臣・內大臣の總稱。名目抄「三公サンコウ太政大臣左右

大臣」 ⊟支那の周にては、太師・太傅・太保、前漢にては、大司馬・大司徒・大司空、後漢及び唐にては、大尉・司徒・司空の稱。書經周官「立二大師・太傅・大保一、玆惟三公」 ⊟さんすけ(三助)に同じ。

さんこう きうけい 〔三公九卿〕 三公と九卿と。

さん-こう 〔參候〕 ⊟參向して樣子を伺ふこと。伺候。雪女五枚羽子板中「御供申さん爲め參候仕る」 後漢書鄧禹傳「遣レ人參候、果如二其言一」 ⊟御歌所の役名。

ざん-こう 〔讒口〕 (名) 讒人の口先き。讒言。東鑑十二、建久三年九月五日「依レ令二讒口一、被レ除二籍一」 詩經小雅「無レ罪無レ辜、讒口囂囂」

ざん-こう 〔讒構〕 讒言を構(カマ)へて人を陷るること。李康文運命論「讒構不レ能レ離二其交一」

さんこう-の-びやう 〔三公鋲〕 (名) 兜の名所。さんたいのざ(三臺座)に同じ。類聚名物考武備一「この立物臺をとり附くるに、菊頭の鋲にて打ちとむる也。是れを三公の鋲と云ふ。此の筥に壹本、左右は眞庇を腰卷へとり附くる鋲にて、都合三本なり。これを三公といふは、紫微宮の天の三公の星に象るといへども、鎧匠の家にて後世云ひ出だせし事にて、古へさらにこの事をきかず」

さん-こく 〔山谷〕 (名) やまとたにと。山巒。太平記十五、建武二年正月合戰「彌、輪寶の山谷を平らぐるに不レ異」 戰國策趙「儒者一レ師而禮異、中國同レ俗而教離、又況山谷之便乎」 史記魏世家「伐レ楚、道涉二山谷一、行三千里」

さん-こく 〔慘酷 慘刻〕 極めてむごきこと。殘忍。殘酷。史記酷吏傳贊「一切亦皆彬彬、質有二其文一焉、雖二慘酷一、斯稱二其位一矣」

さん-ごく 〔三國〕 (名) ⊟三つの國。三箇國。⊟支那の後漢の末に、天下を三分して各其の一部を有せし蜀と魏と吳との三箇國の稱。太平記十三、龍馬進奏「此の八句の偈の文、三國傳來して」 ⊟日本と支那と天竺との三箇國の稱。

さんごく かんせふ 〔三國干涉〕 明治二十八年日本と淸國との媾和條約締結の後、露西亞・獨逸及び佛蘭西の三國が、日本と淸國との間に干涉し、媾和條約によりて日本の得たる遼東半島を淸國に還付せしめし事件。

さんごく さうでん 〔三國相傳〕 天竺より支那に傳へ、又、支那より我が國に傳へたること。今川大雙紙「三國相傳して、弓馬の祕事なり」

さんごく でんらい 〔三國傳來〕 前條に同じ。

ざん-こく 〔殘酷〕 嚴酷にして無慈悲なること。むごたらしきこと。殘忍。慘酷。詩經鄭箋「天下邦國之君、不レ爲二殘酷一」

さんごく-いち 〔三國一〕 (名) 日本・支那・天竺にも比類なきこと。寬永發句帳「聟ならで三國一や雲の月」 醒睡笑六「老僧のはたらき三國一」 百日曾我虎少將道行「我が身には三國一の殿持ちて、富士さへ次に見し山の」

さんごく-さむらひ 〔三石侍〕 (名) 公卿の家に仕ふる侍。

さんごく-さん 〔三石樣〕 (名) さんぴんやっこ(三一奴)に同じ。

さん-こくし 〔三國司〕 (名) 古昔、永續せし國司の三家。即ち、飛驒の國司姉小路家・伊勢の國司北畠家・阿波の國司一宮家の稱。

さんこく-の-ゆき (名) 紋所の名。ゆき(雪)四を見よ。

さんご-じ 〔珊瑚珠〕 (名) さんごじゅ(珊瑚珠)の訛り。

さんご-しちげん 〔三五七言〕 (名) 漢詩の一體。三言と五言と七言との句より成れるもの。支那唐の李白創む。

さんご-じゅ 〔珊瑚樹〕 (名) さんご(珊瑚)一に同じ。太平記廿五、自伊勢進寶劒「海底に生ふるなる珊瑚樹の枝かなんど思ひて」 晉書石崇傳「嘗以二珊瑚樹一賜レ之、高二尺許」

さんご-じゅ 〔珊瑚珠〕 (名) 珊瑚にてつくりたる珠。種種の裝飾に用ふ。さんごじ。

さんご-じゅ (名) 【植】忍冬科、莢蒾(ガマズミ)屬の常綠喬木。幹の高さ二丈許り。葉は對生、長楕圓形、全緣、滑澤にして質厚し。夏季、白色の小花を簇生し、圓錐花序に排列す。果實は赤色楕圓形にして美なり。我が國、各地の庭園に栽培せられ、觀賞用とし、又、材を細工物に用ふ。きさんご。きさんじゆ。

さんごじゅ-な 〔珊瑚樹菜〕 (名) 【植】あかなすあかぢさ(火焰菜)の異名。

さんごじゅ-なすび (名) 【植】あかなす(蕃茄)の異名。

さんご-せう 〔珊瑚礁〕 (名) 【動】珊瑚蟲類の分泌したる石灰質の骨格が主要の部分となり、之に軟體動物及び棘皮動物の介殼、又は有孔蟲類・環節蟲類の死殼等の堆積するによりて構成したるもの。其の形狀によりて、岸礁・緣礁・環礁の三種に別かつ。岸礁は裾礁ともいひ、島の沿岸に平盤狀をなして存するもの、緣礁は一に堡礁と稱し、島の周圍に海水を隔てて存するもの、環礁は環狀に礁を作り其の內に島なきものを云ふ。

さんご-たう 〔珊瑚嶋〕 (名) 【地】珊瑚礁より成る島。

さんご-ちゅう 〔珊瑚蟲〕 (名) 【動】腔腸動物、珊瑚蟲類の一屬。樹枝狀の群體をなす。各水螅は八箇の羽狀觸手を有す。群體の作りたる中軸骨格は即ち珊瑚なり。

さんごちゅう-るゐ 〔珊瑚蟲類〕 (名) 【動】腔腸動物分類の綱名。體は水螅形にして、單體を爲すもの、群體をなすものあり。下面にて他物に附著し、上面に口を開く。其の周圍に伸縮性の觸手を列生し、短き食道によりて腔腸に通ず。發芽若しくは分裂法によりて增殖し、樹枝狀又は塊狀の群體を作すもの多し。體壁に多くの小骨片と外皮より分泌したる骨軸とを有す。吾人の裝飾用に供するものは、外肉を去りたる骨軸なり。其の種類多けれども皆海產にして、觸肢の數と體の構造とによりて、八射珊瑚類・多射珊瑚類に大別す。

さん-こつ 〔山骨〕 (名) 山の、土砂などが落ちて、其の骨を露はしたるもの。楊萬里詩「天女似レ憐二山骨瘦一、爲縫二霧縠一作二春衫一」

さんこ-づか 〔三鈷柄〕 (名) 三鈷の狀をなせる刀劍の柄。太平記廿五、自伊勢進寶劒「金にもあらず石にもあらざる物の三鈷柄の劒」

さんご-な (名) 【植】なつつばきの異名。

さんこ-の-まつ 〔三鈷松〕 (名) 【植】松杉科、松屬の常綠喬木。黑松の一種。葉の三叉をなしたるもの。紀伊國高野山にありと。三針松。三鬣松。

さん-ごふ 〔三業〕 (名) 佛語。⊟身業と口業と意業と。即ち、身・口・意にて善惡等種種の事を作爲すること。太平記廿、結城入道墮地獄「三業を靜めて、此の經を讀誦候べし」 ⊟貪と瞋と痴との稱。

さんご-べい 〔沙縠米〕 (名) さごべい(沙縠米)の音便。

さんご-や 〔三五夜〕 (名) 陰曆の十五日の夜。特に八月十五日の夜の稱。國姓爺四「二千里の外古人の心、三五夜中にあらねども、影をもらさぬ月の船、疾く疾く召され候へ」 白居易詩「三五夜中新月色、二千里外故人心」

さんご-るゐ 〔珊瑚類〕 (名) 【動】さんごちゅうるゐ(珊瑚蟲類)の異名。

ざん-こん 〔殘痕〕 (名) 殘れるあと。陸游詩「漲餘野水有二殘痕一」

ざん-こん 〔殘恨〕 (名) あとに殘れるうらみ。孟郊詩「覺來殘恨深」

ざん-こん 〔慙恨〕 はぢてうらむこと。程顥文李仲通墓誌「其人必慙恨、累レ日痛自勵」

さん-さ 〔三叉〕 (名) 三筋に分かれたる所。みつまた。蘇軾詩「溪邊古路三叉口、獨立二斜陽一數二過人一」

さん-さ 〔三佐〕 (名) 大佐と中佐と少佐との總稱。佐官。法令全書明治五年八月二十五日軍艦乘組員官等表「三佐從僕」

さん-さ (感) 俚歌の掛聲にいふ語。若風俗七「上方ははや唄うて仕まひぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから彈いて」 生玉心中上「さんさ思ひの種かいの」 傾城酒呑童子二「さんさ如才は御坐らねい」

さん-ざ 〔參座〕 ⊟會合の席に參列すること。參會。源紅葉賀「さんざしにとても、あまた所もありき給はず」 同初音「夕つかた、御かたがたのさんざし給はんとて、心ことにひきつくろひ、けさうじ給ふ御かげこそげに見るかひあめれ」 ⊟明治六年九月二十二日臨時裁判所に設けたる陪審官の稱。同年十月二十九日裁判の完結によりて解かる。明治職官沿革表一、職官部上、明治六年「設二陪審官一、尋稱二參坐一」

さん-ざ 〔散散〕 (副) さんざん(散散)の略。

さん-さい 〔三災〕 (名) 水災・火災・風災。又、水災・火災・兵災の總稱。又、饑饉と疾疫と刀兵との三種の災難。盛衰記四十三、安德帝不吉瑞「三災・七難殘ることなし」

さん-さい 〔三才〕 (名) ⊟天と地と人との稱。三極。三儀。太平記十六、日本朝敵「夫れ日本開闢の始めを尋ぬれば、二儀已に分かれ、三才漸く顯れて」 易經繫辭「有二天道一焉、有二人道一焉、有二地道一焉、兼二三才一而兩レ之、故六」 ⊟宇宙間に存在する萬物の總稱。

さん-さい 〔三際〕 (名) 佛語。現在と過去と未來との稱。三世。

さん-さい 〔山妻〕 (名) 我が妻の謙稱。荊妻。愚妻。杜甫詩「方法報二山妻一」

さん-さい 〔山塞 山砦〕 (名) ⊟山中に構へたる寨(トリデ)。宋史岳飛「太行一帶山砦、必有二應者一」 岑參詩「山塞多二離憂一」 ⊟山賊などのすみか。

さん-さい 〔山齋〕 (名) 山間にある燕居の室。山莊。山亭。南史謝擧「擧二宅內山齋、捨以爲レ寺」

さん-さい 〔散齋〕 あらいみ(荒忌)に同じ。(致齋の對) 禮記祭義「致二齋於內一、散二齋於外一」

さん-ざい 〔散材〕 (名) 役に立たぬ材木。散木。莊子人間世「散木也中略是不材之木也」

さん-ざい 〔產財〕 (名) ざいさん(財產)に同じ。東鑑三、元曆元年十一月廿一日「不レ知二產財之所一レ費」

さん-ざい 〔散財〕 財をちらすこと。金錢を費消すること。書經武成「散二鹿臺之財一」 梁書王珍國「發レ米散レ財、以拯二窮乏一」

さん-ざい 〔散在〕 ちらばりてあること。盛衰記十一、旋風「上は桁・梁・垂木・こまひなどは、虛空に散在して」

ざん-ざい 〔斬罪〕 (名) ⊟首を斬る刑。うちくび。死罪。死刑。斷罪。盛衰記四十五、內大臣京上被斬「今度義經相具して上洛、行二斬罪一之相、依二何不審一、重又可レ被レ渡二大路一哉」 御成敗式目追加「一、犯人斷罪事。右爲二夜討强盜之張本一、所犯無二遁方一者、可レ被レ行二斬罪一也」 ⊟江戶時代、士以上の者に科せし死刑の一。死罪・下手人と均しく斬に處すれども、其の死屍を樣斬(タメシギリ)の用に供せざるもの。御定書百箇條「一、斬罪。於二淺草・品川兩所之內一、町奉行同心斬レ之、檢視御徒目付町與力」

さんざい-ぶくろ 〔散財袋〕 (名) 宴會の席などにて、祝儀物を入れ酌婦などに與ふる紙袋。

さんさい-りう 〔三齋流〕 (名) 茶道の千家流の一派。細川三齋忠興を流祖とするもの。茶傳集「三齋翁の門下に茶道執心の輩多しといへども、中にも一尾徹齋其の一にして秀逹也。或時翁物語に、茶は流有りてなきもの也。予、休門下にして、人皆休の旨要を其の儘守るといへども、人皆利休流とは不レ云して、三齋流といへり」

さん-さう 〔三草〕 (名) ⊟麻と藍と紅花と、又、木綿と麻と藍との稱。大和本草二、雜「三草、麻・藍・紅花」 地方要集錄「畑方作毛見分三草・四木之類、雜穀・野菜之類、三草は麻・木綿・藍なり、たばこ・蘭・紅花共六草と云ふ」 ⊟古今傳授中の三種の草。即ち、かはな草・くれのおも・めどにけづり花の稱。一說、かはな草・さがりごけ・めどにけづり花ともいふ。

さん-さう 〔山草〕 (名) 山に生えたるくさ。易林「鹿食二山草一」

さん-さう 〔山莊〕 (名) 山中の別莊。拾遺雜春「北白川の山庄に、花の面白くさきて侍りけるを見に、人人まうで來たりければ」 盛衰記七、信俊下向「所所の御山莊、屋敷をつくし棟をならべ」 昭明太子詩「命レ駕出二山莊一」

さん-さう 〔山相〕 (名) 山の地質・氣象・形相等。山相祕錄上「山相は必ず北方より觀る者なるが故に」

さん-さう 〔蠶桑〕 (名) かひこ ことくはと。又、養蠶の事業。後漢書辰韓「土地肥美宜二五穀一、知二蠶桑一、作二縑布一」

さん-さう 〔酸棗〕 (名) 【植】さねぶとなつめ(酸棗)の異名。

さん-ざう 〔三藏〕 (名) 佛語。⊟經藏と律藏と論藏との稱。阿毘達磨集論「何故如來、建二立三藏一」 ⊟經藏と律藏と論藏とに通じたる僧の稱。⊟天台宗にて小乘の別稱。四佛と菩薩と聲聞との稱。

ざん-さう 〔殘粧〕 (名) 前日の粧飾のなごり。朗詠「露應二別淚一珠空落、雲是殘粧髻未レ成」

ざん-ざう 〔殘像〕 (名) 【心】或る色を見つめて後瞑目するとき、その色若しくは其の色の補色の、暫時猶ほ視界に殘留するもの。

さんさう-か 〔山相家〕 (名) 山相學に達したる人。山相祕錄上「凡山相家に於いて、一子相傳の大事とする所の三箇の祕訣あり」

さんさう-がく 〔山相學〕 (名) 山相を研究する學。草木六部耕種法序「奧羽兩州有下唱二山相學一者上、大抵以二我曾祖翁一爲二開山手一焉」

さんざう-けう 〔三藏教〕 (名) 佛語。⊟經藏・律藏及び論藏に說きある教義。⊟小乘を旨とする佛教。

さん-さがり 〔三下〕 (名) 三味線の調子の一。本調子より三の絲の調子のひくきもの。聖德太子繪傳記三「瞽女・座頭に一曲彈かせ中略右の手の三脈が三下り・二上りに、びんびんしたる見立てなり」 鶉衣音曲說「本調子は譬へば女のさげ髮に、打ちかけしたる如く、二上りは、髮當流にとりあげ、姿も一つまへに亂れたり。三下

りは、しづまりたるに似たれど、かくし化粧にしどき帶したるよそほひ、物思ふ人はここに涙をも落として、中中淫奔の媒とはなりぬべし」

さん-さく〔算策〕 はかりごとをめぐらすこと。籌策。計策。策略。

さん-さく〔散策〕 目的なく此處彼處とあるきまはること。つゑにまかせて歩むこと。散歩。蘇軾詩「散策塵外遊」

さん-さく〔參錯〕 いりまじること。交互にまじふること。史記秦楚之際月表注「時天下未レ定、參錯變易」

さん-さく〔剷削〕 剗削 山地などをけづりおとすこと。けづること。

さん-さく〔刪削〕 けづること。刪除。削除。周書考「孔子刪削之餘」

さん-ざく 三三九 三尺 (名) 射藝の語。三的ノ類なるべし、詳かならず。一說、くはん(九半)に同じと。採櫃集覽 東鑑廿七、元年十月廿二日「三的之役、三三九・四六三以下、作物等各射レ之」同十、建久元年八月十六日「三尺・手挾・八的等也」

さんざ-さわぎ 散散騷 (名) 酒宴の席などにて歌ひ舞ひして騷ぎ立つること。そこぬけさわぎ。

さんざし 山樝子 (名)【植】薔薇科、山樝子屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺、所所に枝針を有す。葉は楔形にして先端に深き重鋸齒あり。春季、白色の單瓣花を簇生す。果實は小球形にして赤く熟し、食ふべし。我が國、各地の庭園に栽培せらる。

さんざ-しぐれ 散散時雨 (名) 一 霏霏として降りしきる時雨。ぬかあめ。細雨。俗謠「さんざしぐれか、萱野の雨か、音もせで來てぬれかかる」二 もと仙臺地方にて流行せし小唄の名。さんざぶし。

さんさ-しんけい〔三叉神經〕(名)【醫】腦神經の第五對。わろる氏橋より起こり、前額・上下顎等に至り、知覺及び運動を司る。

ざん-さつ〔斬殺〕 斬り殺すこと。殺害。戕害。禮記月令「申二嚴百刑一斬殺必當」

ざん-さつ〔殘殺〕 そこなひころすこと。殘忍なる殺害。唐書李綱「綱頓首曰、潘仁賊也、志殘殺、然毎レ諫輒止、爲二其長史一、故無レ媿」孟雲卿詩「殘殺非レ不レ痛、古來良有レ由」

さんざっぱら (副) さんざん。あくまで。したたか。はらさんざん。浮世風呂上「さんざっぱら、あばれ食ひをして」

さんざ-ぶし 散散節 (名) さんざしぐれ(散散時雨)二に同じ。若風俗四「さんざぶしを謠はせて戲れし事もと、手に手を取りかはし」

さん-ざふらふ 然候 (句)〔然(サ)に候ふの音便〕應諾するに用ふる敬語。さやうにて候ふ。さやうでございます。平治義朝被レ害三、六波羅「あれに控へたるは賴政か。さん候」謠白鬚「さん候、此の浦の漁夫にて候」

ざんざ-めかす (他動四) さざめかすの音便。丹波與作下「御乘物ざんざめかいて舁きよする」世間手代形質「ねりものの如く、富藏屋へざんざめかして擔ぎ込み」

ざんざ-めく (自動四) さざめくの音便。薩摩歌上「花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃き庭の」

ざんざら-がけ (名) 女の髮飾りの一種。色紙など細く裁ちたるもの。

ざんざら-がさ (名) 菅笠の一。編み上げたる菅の末を笠の頂に出だしてばらばらにしたるもの。

(さがらざんざ)

ざんざら-めく (自動四) ざんざめくに同じ。國姓爺後日合戰道行「明石の瀨門にざんざらめくは、琴の調べか松吹く風か」

さん-さん〔三三〕(名) 五目並(ゴモクナラベ)にて、碁石の三目が二箇所以上ならぶこと。

さんさん ごご〔三三五五〕 あちらこちらにちらばりあるさまにいふ語。李白詩「岸上誰家遊冶郎、三三五五映二垂楊一」

さん-さん〔參贊〕 其の事に參與して輔佐すること。南史王儉「參二贊大業一」

さん-さん〔燦燦〕 粲粲 (副) あざやかに美しきさまにいふ語。きらきら。詩經小雅「西人之子、粲粲衣服」

さん-さん〔潸潸〕(副) 涙又は雨などの落つるさまにいふ語。さめざめ。郭璞詩「踈林日暮雨潸潸」元稹詩「分詞別二兄弟一、各各涙潸潸」

さん-さん〔毿毿〕(副) 毛などのふさふさと長きさまにいふ語。詩經國風疏「長尺餘、毿毿然、與二衆毛一異」

さん-さん〔珊珊〕(副) 佩玉などの鳴る聲にいふ語。宋玉文神女賦「拂二墀聲之珊珊一」

さん-ざん〔散散〕(副) 一 殘る所なきさま、又は極度に及べるさまにいふ語。甚だしく。したたか。あくまで。保元官軍手分「弓取り直して、散散に射るに」平治信賴信西不快「信賴卿は、涌壺入道がさんざんに申しけることを漏れ聞きて」二 甚だ見苦しきさま、又、樣子のあしきさま、又、不幸などに遭遇したるさまにいふ語。著聞卅「うつくしき裝束、さんざんになりにけり」庭訓往來五月「資具又散散式候也」謠正尊「路次より違例仕り、散散の事にて候」狂言三人片輪「此の間は、さんざん仕合せが惡うて」夕霧阿波鳴渡上「霧樣の御氣色、秋の頃はさんざんで、勤めもお退(ヒ)きなされしが」

さんざん-く〔三三九〕(名) さんざく(三三九)に同じ。

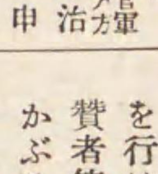
さんさん-くこん〔三三九獻〕(名) 婚禮などの獻盃の式。三獻づつ、三度やりとりすること。さんさんくど。狂言さんじむこ「も一つまゐれ、しうと殿、さんさん九こん重なれば」

さんさん-くど〔三三九度〕(名) 前條に同じ。壽門松下「手拍子に口拍子、仕合せ拍子の三三九度」

さんさんくわ-くろむ〔三酸化——〕(英 Chromium trioxide)(名)【化】CrO_3 重くろむ酸加里の冷濃液に濃硫酸を作用せしめて得らるる赤色長針狀の結晶。頗る強き酸化劑なり。

さんさんくわ-ゆわう 三酸化硫黃 (名)【化】亞硫酸瓦斯と酸素との混合物を白金石綿に觸れしむるとき生ずる絹絲狀の結晶。一四・八度にて熔け、四六度にて沸騰す。揮發性にして、空氣中に出づれば白烟を生じ、水と烈しく化合して硫酸を生ず。無水硫酸。

さんざん-くわん〔三山冠〕(名) 冠の一。古へ朝賀、御卽位の禮を行はせ給ふ時、主殿・闈書・贊者等の官人が、禮服(ライフク)にかぶるもの。


(さんざんくわん)

さん-し〔算師〕(名) 一 算術の達人。算者。東鑑十六、正治二年十二月三日「吾爲二天下第一算師一也」二 古へ主稅主計兩寮の被管。租稅を勘へ計るもの。又、木工寮にもあり。

さん-し〔三始〕(名)〔歲の始め、月の始め、日の始めの義〕元旦の稱。三元。元三。漢書鮑宣「日蝕二於三始一」

さん-し〔三史〕(名) 支那の三部の著名なる歷史。卽ち、史記・漢書・後漢書。一說、史記・漢書・東觀漢記の稱。源帚木「三史・五經の道道しきかたを、あきらかにさとりあかさんこそ」二中歷經史「三史。史記・漢書・後漢書。一云、史記・漢書・東觀漢記」

さん-し〔三子〕(名) 老子・莊子・列子の稱。

さん-し〔三尸〕(名) 人の體中に棲み、庚申の夜、寢息を窺ひ、體中より出で、昇天して、その罪惡を訴ふといひ傳ふる三匹の蟲。三尸蟲。太平記廿九、道譽大原野花會「細馬鑣を鳴らして馳せ散り、喚き叫びたる有樣、只三尸・百鬼、夜深けて衢を過ぐるに不レ異」雲笈七籤「除二穢惡一滅二三尸一」

さん-し〔三支〕(名) 十二支を東・西・南・北の四方に配當したる各方の三箇の稱。卽ち、北方は亥・子・丑、東方は寅・卯・辰、南方は巳・午・未、西方は申・酉・戌とす。平治賴朝擧二義兵一「卯は是れ東方三支の中の正方として、仲春を司る」

さん-し〔三司〕(名) 琉球藩の重官たる元侯と法司と紫巾官との稱。

さん-し〔蠶絲〕(名) 蠶より取りたる絲。かひこのいと。きいと。

さん-し〔蠶紙〕(名) たねがみ(種紙)に同じ。養蠶絹篩上「和漢とも蠶紙を寒晒するに、一二晝夜或ひは四五日も水に浸し置き、氷に閉ぢさせて、其の後蠶紙を棹にかけ、家內にて自然と干乾なり」

さん-し〔讚詞〕(名) ほめことば。頌。

さん-し〔散士〕(名) 仕官せずして、民間にある人。又、世事を避けて閑散なる人。散人。

さん-し〔散史〕(名) 民間にありて文筆に從事する人の自稱。

さん-し〔山子〕(名) 猿を馬の守りとして馬屋に掛くる時、猿を山父といふに對して、馬をいふ稱。壒嚢抄

さん-し〔山市〕(名) 山間のまち。百合若大臣野守鏡二「麓に人家列って、世渡る業の品品は、さながら山市の晴嵐なり」許棠詩「鳥徑通二山市一」

さん-し〔山觜〕(名) 山のはな。山のはし。山端。楊萬里詩「山觜前頭別一村」

さん-し〔山趾〕(名) 山のすそ。ふもと。山脚。山足。山麓。劉禹錫詩「積潦搜二山趾一」

さん-し〔山積〕 山の如く積み重なること、又、積み重ぬること。後漢書趙壹「處士山積、學者川流」

さん-し〔參仕〕 參上して奉仕すること。太平記十七、自二山門一還幸「參仕の軍勢に對面して」

さん-し〔三思〕 幾度も思考すること。論語公冶長「三思而後行」

さん-し〔簒弑〕 君を弑して其の位を奪ふこと。

さん-じ (名) 三里の灸穴。かた言

さん-じ〔山寺〕(名) 山中にある寺院。やまでら。孟浩然詩「松門山寺深」

さん-じ〔三時〕(名) 一 一時より數へて、第三に當たる時間。二 農事に必要なる三つの時季。卽ち、春耕す時と、夏耘る時と、秋收むる時との稱。左傳桓公六年「三時不レ害、而民和年豐也」

さんじ ざぜん〔三時坐禪〕 佛語。早晨坐禪と晡時坐禪と黃昏坐禪との稱。禪林象器箋九、叢規「三時坐禪。四時坐禪中、省二後夜一也」

さんじ の つとめ〔三時勤行〕 寺院にて僧の勤むべき朝・晝・夕の三度の讀經。

さん-じ〔三事〕(名) 一 さんこう(三公)二に同じ。盛衰記四十六、吉田經房卿篤直「次第の昇進不レ滯、三事の顯要を兼帶し」詩經大雅「三事大夫、莫二肯夙夜一」二 春・夏・秋の三時に亘れる事業。卽ち、農業の稱。詩經大雅「三事就レ緒」三 三つの事ふべき人。卽ち、君と師と父との稱。吉野忠信二「兄弟國を爭ふは、三事を背く不孝と思へば」國語晉「民生二于三一事レ之如レ一、父生レ之、師敎レ之、君養レ之」四 處世上必要なる三つの事項。卽ち、利用と厚生と正德との稱。書經大禹謨「六府三事允治。註三事、正德・利用・厚生也」

さんじ けんたい〔三事兼帶〕 五位の藏人にて衞門佐などに補し、辨官を兼ねたるもの。當時にありて最も名譽とす。

さん-じ〔散事〕(名) 官職なくして位のみあること。さんに。散位。

さん-じ〔蠶事〕(名) 養蠶の事業。蠶業。禮記月令「蠶事既登、分レ繭稱レ絲」

さん-じ〔蠶兒〕(名) かひこ。蠶。蘇舜欽詩「蠶兒尙卵恰」

さん-じ〔贊辭〕 讚辭 (名) 賞贊のことば。贊の文辭。

さん-じ〔贊侍〕(名) 李王職の職員。李王及び李太王に近從して、身側の事を分掌する高等官。李王職官制第六條「贊侍」

さん-じ〔參事〕 一 或る事務を參贊すること。又、その職。二 明治二年五月待詔局に置きたる職員。局の議事に參與する奏任官。同年七月八日待詔局を廢して待詔院を置くと共に廢せられたり。明治職官沿革表一、職官部上、明治二年「置二主事參事于待詔局一」三 明治四年十月二十八日、府縣官制の改正によりて置かれたる府縣の職員。知事・權知事、又、令・權令を輔け、部內の庶事を參判する責めに任ずる奏任官。同十年一月十六日廢せられたり。明治職官沿革表一、職官部上、明治四年「參事」四 鐵道院の職員の一。官房又は部・局・所に分屬し、上官の指揮を承けて各部・局・所の事務を掌る奏任官。鐵道院官制第十三條「參事」五 專賣局の職員の一。收納長たる者を除く外、長官の指揮を承けて庶務又は監督に關する事務を掌る奏任官。專賣局官制第六條「參事」六 臺灣の廳に置かるる職名。部內の行政事務に關し、廳長の諮問に對して意見を述べ、或る場合には廳長の命を承けて事務に從事する判任官待遇。廳の管轄內に居住せる學識・名望ある者より廳長の命ずるもの。臺灣總督府地方官官制第三十條「參事」七 朝鮮の各道及び各府縣に置き、道長官又は府尹・郡守の諮問に應ずる名譽職。道・府・郡管轄內に居住し、學識・名望ある者につき、朝鮮總督の認可を受けて道長官の任命するもの。朝鮮總督府地方官官制第二十三條「參事」

ざん-し〔慚死〕 きし(愧死)に同じ。

ざん-し〔慘死〕 むごたらしく死すること。悲慘の死。

ざん-じ〔暫時〕 すこしの時間。しばらくのま。しばし。少時。高適詩「聖代卽今多二雨露一、暫時分レ手莫二躊躇一」

さん-しう〔三舟〕(名) みつのふね(三舟)を見よ。

さんしう の さい〔三舟才〕 詩・歌・管絃の道に堪能なること。

さん-しう〔三秋〕(名) 一 秋季の三箇月。卽ち、初秋・仲秋・晚秋の總稱。二 三つの春秋を經過すること。卽ち、三箇年の稱。三春。詩經國風「一日不レ見、如二三秋一兮」

さんしう の おもひ〔三秋思〕〔前の詩經の文より出づ〕待ちこがれて、すこしのまも永き年月の心地すること。

さん-しう〔纂修〕 一 材料を集めて書史を編修すること。纂輯。編輯。郭翼詩「前朝圖史已全收、詔起二丘園一重纂修」二 整へ修むること。國語周「時序二其德一、纂二修其緒一」同晉「亦能纂二修其身一、以受二先業一」

ざん-しう〔殘秋〕(名) 冬に入るに僅かの日數を殘す秋。名殘りの秋。秋の末。趙蝦詩「獨吟二紅葉一對二殘秋一」

ざん-しう〔殘醜〕(名) うちもらされたる醜類。のこり居るわるもの。殘兒。後漢書和帝紀詔「幸賴二股肱衆侮之助一、殘醜消蕩」

さんじら-とが 〔三獸渡河〕 (句) 佛語。一に象の河を渡る如く其の深きに達すること。菩薩の人に譬ふ。二に馬の河を渡る如く底に至らざれど漸く深きこと。緣覺の人に譬ふ。三に兎の河を渡る如く水に浮かぶのみにて深きに至ること能はざること。聲聞の人に譬ふ。猶、うさぎ(兎)の條、兎波を走るを見よ。

さんしら-みそ 〔三州味噌〕 (名) をかざきみそ(岡崎味噌)に同じ。

さんじ-かい 〔三事戒〕 (名) 佛語。身を謹むことと、言語を謹むことと、意を淸淨にすることとの三つのいましめ。又、身・口・意の三つの戒。

さん-しき 〔三色〕 (名) 三種のいろ。又、三種のもの。みいろ。周禮考工記「角長二尺有五寸、三色不失理。注三色、本白、中靑・末豐」

さん-しき 〔算式〕 (名) 【數】加減乘除の符號(即ち、+・-・×・÷)を用ひて、數の關係を數字にて書き表はしたる式。

さん-じき 〔棧敷〕 (名) さじき(棧敷)の訛り。東海道名所記三「さんじきを構へて、歌舞妓がましきことを致せり」

さんしき-えん 〔酸式鹽〕 (名) 【化】多鹽基酸の水素原子の一部分を金屬又は之に相當する原子團にて置換し、なほ酸に特有なる水素原子を有する鹽。(正式鹽の對)

さんしき-すみれ 〔三色菫〕 (名) 【植】菫菜科、紫花地丁(スミレ)屬の一。二年又は多年生草本。莖の高さ七八寸。葉は卵形、波狀鋸齒を有し、下部の葉は稍廣し。托葉は大にして羽狀に深裂す。花は長梗を有し、春夏の候開き、多くは黃・紫・白の三色により種種に彩られて美なり。歐羅巴原產の花草にして、觀賞用として栽培せらる。こてふすみれ。みいろすみれ。

さんじ-くゎい 〔參事會〕 (名) 府縣參事會及び郡參事會の總稱。

さんじくゎい-ゐん 〔參事會員〕 (名) 府縣參事會員及び郡參事會員の總稱。

さんじ-くゎん 〔散事官〕 (名) さんじ(散事)に同じ。(職事官の對)

さんじ-くゎん 〔參事官〕 (名) 各省(宮內省を除く)・法制局・臺灣總督府・關東都督府又は明治三十八年の地方官官制改正以前の府・縣・道廳に置き、長官の命を承けて審議・立案等の事を掌る高等官。各省官制通則第十四條三號「參事官」 法制局官制第二條二號「參事官」 臺灣總督府官制第二十四條「參事官」 明治二十六年十月勅令第百六十二號地方官官制第一條五號「參事官」 明治三十年十月勅令第三百九十二號北海道廳官制第三十二條「參事官」

さんじくゎん-ちゃう 〔參事官長〕 (名) 臺灣總督府に置かれし職員。上官の命を承けて、審議・立案に關し、參事官の事務を監督せる勅任官。後に廢せられたり。明治三十年十月勅令第三百六十二號臺灣總督府官制第十二條「參事官長」

さんじ-けう 〔三時敎〕 (名) 佛語。釋迦一代の說敎を三期に區別したる有敎(阿含時)と空敎(般若時)と中道敎(深密時)との稱。盛衰記四十四、戒賢論師「大小乘の奧義をきはめ、有・空・中の三時敎をぞ立てたりける」

さんし-げふ 〔蠶絲業〕 (名) 蠶絲の生產業。

さんじこ 〔山慈姑〕 (名) 【植】あまな(山慈姑)の異名。

さんし-とえふさう (名) 【植】ちくせつにんじん(土參)の異名。

さんじ-ごふ 〔三時業〕 (名) 佛語。順現業と順次業と順後業との稱。

さんし-すゐめい 〔山紫水明〕 (句) 日に映じて山の翠は紫に、澄める水はさやかに見ゆること。又、山水の淸麗なること。賴山陽詩「黃樹靑林對小欄、最佳山紫水明閒」 陳孚詩「霞明亂山紫」 陶峴詩「鷺立蘆花秋水明」

さん-した 〔三下〕 (名) 次條の略。浮世風呂三上「あほらしうて、對手にならればわいなんぞと、三下に見てゐるはな」

さんした-やっこ 〔三下奴〕 (名) 博徒の仲間にて、最も下劣なるもの。さんした。

さん-しち 〔三七〕 (名) 【植】次條の略。

さんしち-さう 〔三七草〕 (名) 【植】菊科、三七草屬の多年生草本。莖の高さ三尺許り。葉は大形、羽狀に分裂す。秋季、帶黃色の花を開き、頭狀花序に排列し、花序は莖頂に生じ、全部筒狀花より成る。我が國、各地の庭園に栽培せらる。葉の汁液は毒蟲の毒を消す効あり。

さん-しちにち 〔三七日〕 (名) 一 二十一日間。又、二十一日目。娍歌加留多二「我れ等も三七日の荒行にて、受けさづかりし秘文なれども」 二 人の出產後二十一日目の祝ひ。又、人の死後二十一日目の佛事の稱。みなぬか。

さんし-ちゅう 〔三尸蟲〕 (名) さんし(三尸)に同じ。柳宗元文罵尸蟲文序「人皆有尸蟲三」

さん-しつ 〔蠶室〕 (名) 一 蠶を飼ふ部屋。かひこべや。養蠶室。禮記祭義「古者天子諸侯必有公桑蠶室、近川而爲之」 二 支那にて、宮刑に處すべき罪人を入れ置く監獄。漢書司馬遷傳「僕又茸以蠶室、重爲天下觀笑」 後漢書光武紀「詔死罪繫囚、皆一切募下蠶室」注「宮刑獄名、有刑者畏風、須暖作窨室、蓄火如蠶室、因以名焉」

さん-しつ 〔產室〕 (名) 產をするへや。うぶや。產所。萬病回春「產室宜暖」

さん-しつ 〔散失〕 ちりてなくなること。ちりうすること。散逸。紛失。

さん-じつ 〔三日〕 (名) 一 正月の一日と二日と三日との稱。さんがにち。二 江戶時代、每月三日の式日。即ち、朔日・十五日・廿八日の總稱。守貞漫稿廿「朔日・十五日・二十八日之を三日と云ひ、さんじつと訓じ、式日とも云ふ中略此の三日には麻上下を著す」 將軍德川家禮典錄二「朔望の禮に廿八日を加へ三日と祝せしは、德川家に始まれり」

ざん-しつ 〔殘疾〕 (名) 身體に疾病故障あるもの。戶令「凡一目盲、兩耳聾、手無二指、足無三指、手足無大拇指、禿瘡無髮、久漏・下重・大瘿瘇、如此之類、皆爲殘疾」

ざん-しつ 〔讒嫉〕 ねたみて讒言すること。宋史陳東傳「讒嫉無所不至」

ざんしつ-ちゃう 〔殘疾帳〕 (名) 殘疾の者を記入せる帳簿。政事要略五十七、交替雜事「殘疾帳」

さんし-の-れい 〔三枝禮〕 (句) 鳩は禮讓ありて、親鳥のとまれる枝より三枝下にとまるといふこと。學友抄「鳥有反哺之孝、鳩有三枝之禮」

さんじ-はうていしき 〔三次方程式〕 (名) 【數】未知數の最高次が三次なる方程式。例へば $ax^3+bx^2+cx+d=0$ の如し。

さん-しふ 〔參集〕 まゐりあつまること。來集。

さん-しふ 〔纂輯〕 へんさん(編纂)に同じ。

さん-じふ 〔三十〕 (數) 十を三倍せる數。みそ。みそぢ。

さんじふいち-もじ 〔三十一文字〕 (名) 〔三十一の假字にてなれるよりいふ〕わか(和歌)の稱。みそひともじ。

さんじふ-かい 〔三十階〕 (名) 古昔の三十等に分かちたる位階。即ち、正從一位・正從二位・正從三位・正從四位上下・正從五位上下・正從六位上下・正從七位上下・正從八位上下・大少初位上下の稱。

さんじふ-かう 〔三十講〕 (名) 法華經二十八品に、無量義經を其の初めに、普賢觀經をば其の末に加へ、合せて三十品とし、そを三十日間に講ずること。又、朝夕二座に一品づつ、十五日間に講ずることをもいふ。法成寺攝政記「寛弘四年五月九日甲辰三十講初、閏五月八日癸酉三十講結願」 榮華初花「廿よ日より、れいの卅講おこなはせ給ふ」 十訓上「これは長元八年三十講の歌合せの歌なり」

さんじふこく-ぶね 〔三十石船〕 (名) 荷物及び旅客を載する河船。積荷の石數三十石。

さんじふさん-くゎいき 〔三十三回忌〕 (名) 數へ年にて三十三年目の回忌。三十三年忌。二水記享祿五年九月廿八日「今日奉爲土御門院卅三回忌、於般舟三昧院、被行曼陀羅供」

さんじふさん-じょ 〔三十三所〕 (名) 觀世音菩薩を安置せる寺堂三十三箇所の稱。之を巡禮するものは功德を得と稱せらる。三十三の數は觀世音が衆生濟度の爲め三十三身に化したりといふに因みたるもの。初め、畿內近傍に起こりしが、巡禮の風盛んなるに及び、之に擬するもの各處に生じたるを以て、夫れ等と區別するため近畿のを西國三十三所と稱し、其の他のもの內最も有名なるは、坂東三十三所・秩父三十三所とす。秩父は實は三十四所にて、西國・坂東と合して百の數に滿つ。其の他、江戶三十三所・洛陽三十三所・大阪三十三所等あり。千載釋敎「三十三所の觀音をがみ奉らんとて所所參り侍りける時、美濃の谷汲にて油の出づるを見てよみ侍りける。世を照らす佛のしるしありければ、まだともしびも消えぬなりけり」

さんじふさん-しん 〔三十三身〕 (名) 佛語。觀音が衆生濟度の爲めに化現したりといふ三十三體の稱。即ち、佛身・辟支佛身・聲聞身・梵王身・帝釋身・自在天身・大自在天身・天大將軍身・毘沙門身・小王身・長者身・居士身・宰官身・波羅門身・比丘身・比丘尼身・優婆塞身・優婆夷身・長者婦女身・居士婦女身・宰官婦女身・婆羅門婦女身・童男身・童女身・天龍身・夜叉身・乾闥婆身・阿修羅身・迦樓羅身・緊那羅身・摩睺羅伽身・人非人身・執金剛身、是れなり。

さんじふさん-てん 〔三十三天〕 (名) 佛語。須彌山の頂の四方に各一峰あり、其の各峰每にある八つづつの天と、其の中央に在りて之等を統轄する帝釋天との總稱。たうりてん(忉利天)を見よ。榮華本雫「三十三天の微妙の天女に齊しくおはする御身どもの」 盛衰記四十、中將入道入水「縱ひ人ありて、七寶の塔を立てんこと高さ三十三天に至るとも、一日出家の功德には猶及び難し」 金剛經注「須彌山中略其山頂有四峰、每峰八天、共三十二天、帝釋居中、以爲三十三天」

さんじふさん-ねんき 〔三十三年忌〕 (名) さんじふさんくゎいき(三十三回忌)に同じ。親元日記寛正六年八月四日「後小松院三十三年忌御佛事料」

さんじふさん-の-さう 〔三十三相〕 (名) 良馬に具備する三十三の相好。大磯虎稚物語五「先づ御馬はあけ七歲、八寸八分に立ち伸びて、三十三の相現はれ」

さんじふさん-ばん 〔三十三番〕 (名) さんじふさんじょ(三十三所)に同じ。緋縮緬卯月紅葉中「今日は五月の十七、とうからの約束、三十三番連れ立ちませう」

さんじふし-ちゃうだて 〔三十四挺立〕 (名) 船の名。こばや(小早)を見よ。

さんじふ-ちゃうだて 〔三十挺立〕 (名) 船の名。こばや(小早)を見よ。

さんじふに-さう 〔三十二相〕 (名) 一 佛語。佛の具備せりといふ三十二の相好。砂石集七上「三十二相の中の無見頂の因は乞食也」 用明天皇職人鑑「如來の三十二相を學び」 大般若經「佛有三十二相」 二 婦人の容姿に關するすべてのよき相。

さんじふにち-めうらがき 〔三十日目裏書〕 (名) 出廷の期日を其の發送の日より起算して三十日に限る目安裏書。憲敎類典四上、評定「一、家藏諸道具買留出入町人ども江相掛かり候訴訟は、三十日目裏書」

さんじふにちゃうだて 〔三十貳挺立〕 (名) 船の名。こばや(小早)を見よ。

さんじふはっちゃうだて 〔三十八挺立〕 (名) 船の名。こばや(小早)を見よ。

さんじふばん-じん 〔三十番神〕 (名) 天台宗及び日蓮宗にて、法華守護の神として、月の三十日に割り當てて祀る三十の神。即ち、熱田・諏訪・廣田・氣比・氣多・鹿島・北野・江文・貴船・伊勢・八幡・加茂・松尾・大原野・春日・平野・大比叡・小比叡・聖眞子・客人・八王子・稻荷・住吉・祇園・赤山・建部・三上・兵主・苗鹿・吉備津の各神の稱。保元新院御謀叛「殊には三十番神、朝家を守り奉り給ふ」 平治叡山物語「三十番神の守護し給ふ、根本の杉の洞、飯室の五つ坊の谷」

さんじふろく-かせん 〔三十六歌仙〕 (名) 一條天皇の時、藤原公任の選びたる三十六人の歌仙。即ち、柿本人丸・紀貫之・凡河內躬恒・伊勢・大伴家持・山部赤人・在原業平・僧正遍昭・素性法師・紀友則・猿丸大夫・小野小町・藤原兼輔・藤原朝忠・藤原敦忠・藤原高光・源公忠・壬生忠岑・齋宮女御・大中臣賴基・藤原敏行・源信明・源宗于・源順・藤原淸正・源重之・藤原興風・淸原元輔・坂上是則・藤原元眞・小大君・藤原仲文・大中臣能宣・壬生忠見・平兼盛・中務の稱。

さんじふろく-きゅう 〔三十六宮〕 (名) 〔支那漢の宮殿の數三十六ありしに基く〕帝王の宮殿の稱。花蕊夫人詩「三十六宮連內苑、太平天子住崑山」 駱賓王詩「漢家離宮三十六」

さんじふろく-けい 〔三十六計〕 (名) 次の諺の略。

(諺)三十六計逃ぐるに如かず 逃ぐべき時に逃ぐるは、兵法の上策との意。轉じて、面倒なる事は避くるをよしとするにいふ語。南史王敬則傳「敬則曰、檀公三十六策、走是上計」 冷齋夜話「淵才曰、三十六計走爲上計」

さんじふろくちゃう-だて 〔三十六挺立〕 (名) 船の名。こばや(小早)を見よ。

さんじふろくちゃうだて-なかせき 〔三十六挺立中關〕 (名) 前條に同じ。

さんじふろく-りん 〔三十六鱗〕 (名) 【動】こひ(鯉)の異名。夢溪筆談「鯉魚當脇一行三十六鱗、鱗有黑文如十字、故謂之鯉文」

さん-しゃ 〔山車〕 (名) だし(山車)に同じ。通鑑唐玄宗紀「以山車・陸船、載樂往來」

さん-しゃ 〔三舍〕 (名) 古昔、支那の軍隊の三日路。即ち、九十里の稱。左傳僖公廿三年「晉楚治兵、遇於中原、其辟君三舍」

さんしゃ を さく 避三舍 〔前の左傳

より出づ」㊁へりくだる。憚りて避く。辟易す。㊂比較にならず。遠く及ばず。

さん-しゃ 三社 (名) 伊勢神宮・石清水八幡・賀茂神社の稱。日本記略九、寛和二年十一月二日「於二八省院一奉二三社幣使一」盛衰記四十一、三社詣「伊勢・石清水・賀茂三社へ奉幣使を被レ立」

さん-しゃ 參社 神社に參詣すること。みやまゐり。かみまうで。社參。

さん-じゃ 算者 (名) 算術の達人。算師。狂言算勘「是れは此のあたりにかくれもない算者でござる」

さん-じゃ 贊者 (名) 大禮の時、典儀に屬して儀式を施行する官人。

ざん-しゃ 讒者 (名) 讒言する人。讒人。太平記十三、聖廟「我れにつらかりし佞臣・讒者を、一一に蹴殺さんと存ずる也」同廿七、御所を圍む「讒者の眞僞に事を寄せて、國家を奪はんとの企てならば」史記屈原傳索隱述贊「忠而見レ放、讒者益章」

ざん-じゃ 讒邪 邪心ありて讒言をなすこと。又、其の人。漢書劉向傳「養二不斷之慮一者、來二讒邪之口一」

さん-しゃう 三章 (名) 〔漢の高祖の故事より出づ〕簡明なる規則。史記高祖本紀「沛公曰、吾當レ王二關中一與二父老一約法三章耳、殺レ人者死、傷レ人及盜、抵レ罪」

さん-しゃう 三障 (名) 佛語。正道・善心の障害となる三つのもの。即ち、皮煩惱障(貪・瞋・痴の如く六塵に對して起こるもの)と、肉煩惱障(內心の分別より起こるもの)と、心煩惱障(無明より起るもの)との稱。又、煩惱障と業障と報障との稱。雪女五枚羽子板上「お厄は我れ們拾ひ除け、四魔・三障の祟りはなし」

さん-しゃう 三省 (名) 八省の中の式部省・民部省・兵部省の稱。

さん-しゃう 三商 (名) 昔時、古銅古道具屋と古手屋と質屋との稱。舊令諸商株仲間書札「古銅古道具・古手屋・質屋を加へ、之を三商とす」

さん-しゃう 三生 (名) 佛語。前生と現生と後生との稱。

さん-しゃう 三殤 (名) 成年に達せずして夭したるもの區別。十六歳より十九歳までを長殤、十二歳より十五歳までを中殤、八歳より十一歳までを下殤と稱す。居家必用六「三殤。長殤十九歲至十六歲、其服九月及三月、中殤十五歲至十二歲、其服七月止三月、下殤十一歲至八歲、其服五月止三月」

さん-しゃう 讚賞 しゃうさん(賞讚)に同じ。北齊書元文遙「諸賢皆贊賞」

さん-じゃう 慘狀 (名) 悲慘なる狀況。又、慘酷なる狀況。

さん-じゃう 散狀 (名) ㊀公事ある時、其の事に從事する人人の姓名を列記したる折紙。㊁なげやりにすること。等閒にすること。放棄すること。庭訓往來八月「就二違背散狀一者、直被レ下二知于訴人一」㊂くわいじゃう(廻狀)に同じ。東鑑十八、建永二年八月十五日「供奉人散狀」同四十三、建長五年七月九日「隨兵事、今日被レ廻二散狀一書樣。右來八月放生會可レ有二御社參一各帶二布衣一可レ致二供奉一之狀、依レ仰所レ廻如レ件」著聞六「さる隨身の散狀やはあるべきとて」

さん-じゃう 三上 (名) 作文の思考に便宜ある三箇の場所。即ち、馬上・枕上・廁上の稱。歸田錄「余平生所レ作文章、多在二三上一、乃馬上・枕上・廁上也。蓋惟此、尤可二以屬一レ思爾」

さん-じゃう 山上 (名) やまのいただき。やまのうへ。易經下經「象曰、山上有レ水、蹇」史記趙奢傳「先據二此山上一者勝」

さんじゃう やま あり 山上有山 出の字の隱語。彦周詩話「古樂府云中略山上有レ山、言レ出也」

さん-じゃう 山城 (名) 山に據りて築きたる城。やましろ。(平城の對) 張九齡詩「山城本孤峻」

さん-じゃう 散情 うさはらしをなすこと。きばらし。散欝。家語「彈レ琴以散レ情」

さん-じゃう 參上 まうのぼること。まゐること。保元官軍方手分「弓箭を帶せん輩をば、一一に召し捕って參上すべき由仰せ下ださる」

さん-じゃう 贊襄 たすけ成すこと。君主を助けて其の治をなすこと。書經皐陶謨「思二日贊贊襄一哉」

さん-じゃう 三讓 三たび辭讓すること。

さんじゃう の そう 三讓奏 中古、新任の大臣が、例として三たび上つりて、其の官を辭讓せる表。杜史抄下、大臣奏「近代大臣無二三讓之表一臨時被獻之時、非二執柄一之外、無二別勅答一」

さん-じゃう-こう 山上講 (名) ぎやうじゃこう(行者講)に同じ。女殺油地獄中「おん油屋仲間の山上講、俗體ながら數度のお山」

さん-しゃうさう-くゎ 酸漿草科 (名) 【植】かたばみくわ(酢漿草科)の異名。

さん-じゃう-まゐり 山上參 (名) さんじゃうこう(山上講)に同じ。女殺油地獄中「山上參りの、行者講のと」

さん-しゃく 參酌 參照して斟酌すること。事狀をまじへ察して酌量すること。後漢書曹褒傳「叔孫通頗採二禮經一參二酌秦法一」

さん-じゃく 三尺 (名) ㊀支那にて法律の稱。上代の制、法律を長さ三尺の竹簡に記せるよりいふ。史記酷吏傳「君爲二天子一決平、不レ循二三尺法一中略周曰、三尺安出哉」㊁さんじゃくのつるぎ(三尺劍)の略。漢書高帝紀「吾以二布衣一提二三尺一取二天下一」㊂さんじゃくおび(三尺帶)の略。

さんじゃく の しうすい 三尺秋水 次條に同じ。

さんじゃく の つるぎ 三尺劍 三尺ほどの長さある劍。佩劍。三尺の秋水。曾我五人兄弟三「三尺の劍の光は秋の霜、腰間に横たへたり」史記高祖本紀「吾以二布衣一持二三尺劍一取二天下一、此非二天命一乎」

さんじゃく の どうじ 三尺童子 幼童の稱。身のたけ三尺許どのこども。胡銓文上二高宗一封事「夫三尺童子、至無知也」

さん-じゃく 山鵲 (名) 【動】鳥類中、燕雀類の一種。體は鵲に似たり。白き冠毛を被り、嘴赤く、尾は長くして白し。

さんじゃく-おび 三尺帶 (名) 帶の一種。木綿を長さ三尺許りに切りたるもの。今は縮緬などをも用ひ、長さも七八尺、又、一丈なるもあり。へこおび。

さんじゃく-だな 三尺店 (名) 〔開口三尺許りの店の義〕小さきみせ。小さき家。こみせ。

さんじゃく-づきん 三尺頭巾 (名) 三尺許りの木綿にてする頰かぶり。三尺帽子。

さんじゃく-てのごひ 三尺手拭 (名) 長さ三尺許りの手拭。淀鯉出世瀧德上「駕籠の衆の仲間から、三尺手拭、抱帶とて進上す」

さんじゃく-ばうし 三尺帽子 (名) さんじゃくづきん(三尺頭巾)に同じ。我衣「さんじゃくばうしとて、木綿にて、頰冠りにし、又、帶に用ゐる」

さんじゃく-はふ 三尺法 (名) 武家時代に於ける法度の箇條書の稱。禁制の法令。

さんじゃく-ぼう 三尺棒 (名) 長さ三尺ほどの棒。昔時、番太の常に手にせしもの。

さんじゃ-ぶね 三者船 (名) 〔目・耳・鼻の三つの役をなす船の義〕敵情及び地形を視察する軍船。

さん-しゃみ 三沙彌 (名) 佛語。年齡によりて區分したる沙彌の三種。即ち、驅烏沙彌(十歳より十五歳まで)・應法沙彌(十六歳より十九歳まで)・名字沙彌(二十歳以上)の稱。

さん-しゅ 蠶種 (名) 蠶のたね。孵化して蠶となるもの。こだね。天明集成絲綸錄四十六「此度蠶種仕出候本場、村村糺之上」

さん-じゅ 算數 (名) さんすう(算數)に同じ。淨土和讚「彌陀初會の聖衆は、算數の及ぶことぞなき」

さん-じゅ 山樹 (名) さんぼく(山木)に同じ。曹植詩「山樹鬱蒼蒼」

さん-じゅ 散手 (名) さんじゅはぢんらく(散手破陣樂)の略。

ざん-しゅ 殘酒 (名) 飲み殘りの酒。皮日休詩「安得二瑤池飲二殘酒一」

ざん-しゅ 斬首 首を斬ること。又、きりたる首。史記樊噲傳「攻レ城先登、斬首二十三級」

さん-しゅう 三宗 (名) 華嚴・三論・法相の三宗派の稱。

さん-じゅう 三從 (名) 女の從ふべき三つの道。即ち、家にありては父に從ひ、嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふことの稱。盛衰記四十七、髑尼御前「女人は五障・三從とて、罪深き御事にて侍る」儀禮喪服「婦人有二三從之義一無二專用之道一故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從レ子」

さん-じゅう-けい 三從兄 (名) またいとこの年長けたるもの。

さん-じゅう-けいてい 三從兄弟 (名) 祖父の兄弟の孫どうし。またいとこ。

さん-じゅう-てい 三從弟 (名) またいとこの年わかのもの。

さんじゅ-かい 三聚戒 (名) 佛語。さんじゅじゃうかい(三聚淨戒)の略。心地觀經「應レ受二菩薩三聚戒・饒益一切有情戒・修攝一切善法戒・修證一切律儀戒一」

さん-しゅく 參宿 (名) さん(參)に同じ。

さんじゅ-じゃうかい 三聚淨戒 (名) 佛語。攝律儀戒と攝善法戒と攝衆生戒との三種のいましめの稱。三聚戒。盛衰記十九、文覺發心「偕を請じ髮を削り、三聚淨戒を受け持ちて」

さんしゅ-せいぞうしゃ 蠶種製造者 (名) 他人に讓り渡す目的にて、蠶種を製造するもの。蠶種豫防法「蠶種製造者」

さん-しゅつ 產出 貨物の生產すること。產物の出づること。

さん-しゅつ 三出 【植】植物學上の用語。三片となりたること。

さん-じゅつ 算術 (名) 【數】數字を用ひて數の性質及び其の關係、即ち整數・分數・小數・記數法・命數法・四則・比例・開法並びにそれ等の應用を攻究する科學。漢書律暦志「其法在二算術一」

さん-じゅつ 纂述 あつめて著述すること。宋史張昭傳「尤好二纂述一」

さんじゅつ-きふすう 算術級數 (名) 【數】とうさきふすう(等差級數)に同じ。

さんじゅつ-しゃ 算術者 (名) 算術に達したる人。算者。東鑑十六、正治二年十二月三日「無雙算術者也」

さんじゅつ-ちゅうかう 算術中項 (名) 【數】數多の數が等差級數をなせるとき、初項と末項との間にある總べての數の稱。等差中項。

さんしゅつ-ぶつ 產出物 (名) ㊀產出せる貨物。㊁【法】自然の化育、又は人工を加ふるによりて產出する有形物。即ち、果實・牛乳・鑛物の類。民法第八十八條「物の用方に從ひ收取する產出物」

さんしゅ-にち 三首日 (名) 月の一日と十一日と二十一日との稱。日次紀事正月「凡每月朔日・十一日・廿一日、三首日、神明二十一社詣」

ざんじ-ゆにふぐわんしょ 暫時輸入願書 (名) 【商】かりゆにふぐわんしょ(假輸入願書)に同じ。

さんしゅ-の-じんぎ 三種神器 (名) 天孫降臨の際、天照大神より授けられ、皇位の標識として歷朝相傳し給ふ三つの御寶物。即ち、八咫(ヤタ)鏡・草薙(クサナギ)劍・八坂瓊曲玉(ヤサカニノマガタマ)の稱。三種の神寶。平家十一、請文「三種の神器の御事を能き樣に申して、都へ返し入れ奉らせ給へ」神皇正統記「三種の神器の世に傳ふることは、日・月・星の天にあるに同じ」

さんしゅ-の-しんぽう 三種神寶 (名) 前條に同じ。吉野都女楠五「三種の神寶內裡に殘り給ひしを、盜み出だし奉り」

さんじゅ-はぢんらく 散手破陣樂 (名) 雅樂の曲の一。大食調の新樂にて、中曲。一人にて舞ふ。散手。和名四「散手破陣樂俗云散手」拾芥抄上末「大食調、散手破陣(サンジュハヂン)樂」

(さんじゅはぢんらく)

さん-しゅゆ 山茱萸 (名) 【植】山茱萸科、山茱萸屬の落葉木本。幹の高さ丈餘。葉は對生、卵形、銳尖頭、側脈顯著にして、殆ど相平行す。花は早春、葉に先だちて開き、小形黃色にして、數箇づつ集生す。果實は赤色、長橢圓形、味ひ甘酸なり。我が國、各地の庭園に栽培せられ、觀賞用に供せらる。果實を藥用に供す。

(さんしゅゆ)

さんしゅゆ-くゎ 山茱萸科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。灌木又は喬木。葉は對生又は輪生、全緣、單葉なるを常とす。花は聚繖花序又は頭狀に排列し、或ひは單生なり。萼の筒部は子房に合著す。花冠は離瓣、四瓣又は五瓣より成り、時に之を缺く。雄蕊は其の數、花瓣の數と同一又は多數なり。子房は下位、一室乃至二室、各室一胚珠を藏す。花柱は一箇なり。果實は核果、種子は胚乳を有す。本科に屬するものは殊に北半球に多く、有用なる木材を與ふるものあり。

さん-しゅん 三春 (名) ㊀春季の三箇月、即ち、初春・仲春・晚春の稱。太平記六、民部卿三位局御夢想「難レ託二書於三春之暮雁一」詩經疏「一年有二四時一、時皆三月、三秋謂二九月一也、設言三春・三夏、其義亦同」㊁三つの春秋を經過すること。即ち、三箇年の稱。三秋。

さん-じゅん 三旬 (名) 上旬と中旬と下旬との稱。又、三十日間の稱。三浣。春秋繁露「三旬成レ月、三月成レ時」和漢名數節序「三旬(ジュン)十日曰レ旬、又曰二三浣一」

ざん-しゅん 殘春 (名) 夏に入るに纔かの日を殘す春。名殘りの春。春の末。朗詠「花亭我醉送二殘春一」

さん-しょ 山椒 (名) 【植】さんせう

(山椒)の訛り。かた言

さんしょ〔山墅〕(名) 山閒にある別莊。山莊。楊萬里文九日自序「余山墅、遠㆓城邑㆒、復不㆑近㆓廛市㆒」

さんじょ〔產所〕(名) 產をする場所。うぶや。產室。若風俗七「今夜の產所へ見舞ひ給はずや」天網島上「茶屋へ來て產所の夜伽する事は、つひにないづ」

さんじょ〔贊助〕 その事に同意してたすくること。力をそふること。李淸臣文審議呈后册文「贊助倍蓰」

さんじょ〔芟鋤〕 刈り除くこと。すきとること。芟除。曾鞏詩「何穢不㆑欲親芟鋤」

ざんしょ〔殘暑〕(名) 土用あけて後の暑氣。秋に入りてなほ殘る暑さ。殘熱。白居易詩「殘暑蟬催盡、新秋雁帶來」

ざんしょ〔慚沮〕 はぢてはばむこと。謝靈運詩「嘲謔無㆓慚沮㆒」

さんしょう〔讚稱〕 ほめたたふること。ほめそやすこと。ほむること。稱讚。

さんじょう〔三乘〕 ㊀【數】相等しき數を三度かけ合はすること。㊁佛語。聲聞乘と、緣覺乘と、菩薩乘との稱。聖德太子繪傳記四「願はくは、五乘・三乘・七方便、諸天・諸神、加被を垂れ、我が大願を濟し給へ」㊂佛語。小乘の三藏の稱。

さんじょう〔驂乘〕 貴人に陪從して共に其の車にのること。又、其の人。陪乘。左傳文公十八年「納㆓閻職之妻㆒、而使㆓職驂乘㆒」同宣公元年「使㆓其驂乘謂㆒之」

ざんじょう〔殘剩〕 差引したる餘りの數。あまり。のこり。剩餘。殘餘。

さんじょう-こん〔三乘根〕(名)【數】或る數を三乘したる積に對して、其の數の稱。例へば4は64の三乘根なり。

さんじょう-ひ〔三乘比〕(名)【數】一つの比の前項の三乘冪と後項の三乘冪とを、夫れ夫れ前項及び後項とする比。又、相等しき三つの比の相乘比。

さんじょう-ふぢやうしやう〔三乘不定性〕(名) 佛語。五性の一。聲聞・緣覺・菩薩の三乘中の一性乃至三性を有し、因緣に隨ひて其の性を成就するもの。不定種性。不定乘性。不定性。

さんしょく〔三職〕(名) ㊀室町時代に管領職を勤めし斯波・細川・畠山の三家の稱。㊁慶應三年十二月九日に設置せられし總裁・議定・參與の三つの職の稱。明治元年閏四月の官制改革によりて廢せられたり。明治元年閏四月二十一日政體書前文「皇政維新纔に三職を置き續て八局を設け」明治職官沿革表一、職官部上、慶應三年十二月九日「置㆓三職㆒」㊂明治四年八月十日に置かれたる太政大臣と左右大臣と參議との總稱。明治職官沿革表「四年八月十日太政大臣左右大臣參議とを以て三職と稱す」

さんしょく〔山色〕(名) 山のいろ。山の景色。杜牧詩「微雨昏㆓山色㆒」

さんしょく〔蠶織〕(名) 養蠶と機織と。女子の手わざ。詩經大雅「婦無㆓公事㆒、休㆓其蠶織㆒」

さんしょく〔蠶食〕 蠶の桑を食ふ如くに、片端よりだんだんに土地などを侵略すること。戰國策魏「夫秦貪戾之國、而無㆑親、蠶㆓食魏㆒、盡㆓晉國㆒」史記秦始皇本紀「自㆓繆公㆒以來、稍蠶㆓食諸侯㆒、竟成㆓始皇㆒」

さんしょく〔產殖〕 產出して增殖すること。うまれふゆること。生殖。

さんじょく〔產褥 產蓐〕(名) 出產の時、產婦の用ふるしとね。又、產褥熱の略。避暑錄「婦人疾、莫㆑大㆓於產蓐㆒」

ざんしょく〔慙色〕(名) はづる顏色。魏志武帝紀「有㆓慙色㆒」

ざんしょく〔殘燭〕(名) 夜明けまで殘りたる燭火。消え殘りたるともしび。殘燈。朗詠「秋夜長、夜長無㆑眠天不㆑明、耿耿殘燭(燈イ)背㆑壁影、蕭蕭暗雨打㆑窻聲」僧無可詩「夜雨吟㆓殘燭㆒」

ざんしょく〔殘蝕〕 そこなひくひむこと。侵蝕。

さんしょく-すみれ〔三色菫〕(名)【植】さんしきすみれ(三色菫)に同じ。

さんじょく-ねつ〔產褥熱〕(名) 出產の時又は出產の後、消毒不十分なる爲め、毒物の傳染によりて起る熱病。

さんしょく-ばん〔三色版〕(名) 赤・靑・黃の三つの原色を適宜に配合して種種の色をあらはし、繪畫などを刷りだすもの。

さんしょく-まつ〔三色松〕(名)【植】こうきんしょうの異名。

さんしょ-くゎうじん〔三所荒神〕(名) さんぼうくゎうじん(三寶荒神)を見よ。

さんしょ-ごんげん〔三所權現〕(名) 紀州熊野の本宮・新宮・那智の三權現の稱。傾城反魂香中「南無日本第一大靈驗、三所權現と伏し拜み」

さんしょ-ざふしき〔散所雜色〕(名) 官廳に屬せずして、攝關家などに使はるる雜色をいふなるべし。勘記永仁三年二月二日「散所雜色不㆑足、被㆑召㆓御舍人如木㆒」

さんしょ-さま (名) こども(子供)をいふ。嬉遊笑覽

さんしょ-ずゐじん〔散所隨身〕(名) 隨身の本府に候せずして、他に附屬するもの。銘所談小右記長和二年正月四日「將監保信云、中將朝臣雅通消息云、白馬供近衞、稱㆓散所隨身㆒、不㆑勤㆓其事㆒前例不㆑然之事也」

さんしょ-の-うを (名)【動】さんせううを(山椒魚)の異名。

さんじょ-ゐん〔贊助員〕(名) 贊助せる人人。贊助する會員。

さんし-らい〔三紙禮〕(名) らいし(禮紙)を見よ。

さんじ-ゐん〔參事院〕(名) 明治十四年十月二十一日太政官に設け、太政官に屬し、內閣の命によりて法律・規則の草定・審查に參預する合議制の官廳。議長・副議長・議官・議官補・員外議官補・書記生の職員を置く。同十八年十二月二十二日の官制改革によりて廢せられたり。明治十四年十月參事院章程「參事院」

さんしん〔三辰〕(名) 日と月と北斗星との稱。左傳桓公二年「三辰旂旗。注三辰、日月星也」

さんしん〔三身〕(名) 佛語。法身と應身と報身との稱。盛衰記八、法皇三井灌頂「六部轉讀の法水、三身佛性の玉を磨き」同十八、文覺勸進高雄「速至㆓一佛菩提之臺㆒、必翫㆓三身滿德之月㆒」

さんしん〔三親〕(名) 三つの極めて親しきもの。卽ち、父子・夫婦・兄弟の稱。小學紺珠「三親、夫婦・父子・兄弟」

さんしん〔三津〕(名) さんがのつ(三箇津)に同じ。

さんしん〔三神〕(名) ㊀三柱のかみ。㊁萬物造化の三柱の神。卽ち、天御中主神・高皇產靈神・神皇產靈神の稱。又、五穀守護の三柱の神。ごこく(五穀)の條、ごこくのかみ(五穀神)を見よ。㊂わかのさんしん(和歌三神)の略。

さんしん〔三眞〕(名) 書簡にて、文言に敬意を盡くすことと、文字をやつさず眞に正しく書くことと、宛所をやつさず眞に書くこととの稱。貞丈雜記

さんじん〔散人〕(名) ㊀世の役にたたぬ人。莊子人閒世「幾死之散人、又惡知㆓散木㆒」㊁世事を外にする人の自稱。仕官せずして、民閒にある人の自稱。槍權三下「此の度我れ等御暇下だされ、世の散人とはなったれども」陸龜蒙文江湖散人傳「散人者散誕之人也中略散人不㆑知㆑恥、乃從而稱㆑之」㊂雅號などの下に添へ用ふる語。

さんじん〔山人〕(名) ㊀山中に住居する人。世事を棄てて山中に隱遁せる人。やまびと。左傳昭公四年「自㆓命夫命婦㆒、至㆓于老疾㆒、無㆑不㆑受㆑氷、山人取㆑之」唐書李泌「入議㆓國事㆒、出陪㆓輿輦㆒、衆指曰、著㆑黃者聖人、著㆑白者山人」㊁雅號などの下に添へて用ふる語。

さんじん〔山神〕(名) やまのかみ。川中島合戰四「山神の祟り、天狗の障碍」李端詩「載㆑酒覓㆓山神㆒」

ざんしん〔讒臣〕(名) 人を讒言する臣下。史記晉世家「吾聞㆑之也、姦臣在㆑朝國之殘也、讒臣在㆑中主之蠹也」

ざんしん〔讒心〕(名) 讒を搆ふる心。天神記三「時平一人の讒心より、數多の人を損ふこと、恨みても餘り有り」

ざんしん〔殘心〕 心を殘すこと。念の殘ること。こころのこり。未練。殘念。

ざんしん〔斬新〕(副) 是れまでと變はりて極めて新らしきこと。きはだちて新奇なること。杜甫詩「斬新花蘂未㆑應㆑飛」

ざんじん〔讒人〕(名) 讒言する人。讒者。詩經小雅「讒人罔㆑極、交亂㆓四國㆒」左傳昭公十六年「若屬有㆓讒人㆒交㆓鬭其閒㆒」

さんしんざん〔三神山〕(名) 絕海中にありて仙人の住むといふ蓬萊・方丈・瀛洲の三つの山の稱。史記封禪書「此三神山、其傳在㆓渤海中㆒」漢書郊祀志「蓬萊・方丈・瀛洲、三神山在㆑渤、金銀爲㆓宮闕㆒」

さんしんぶつ〔三身佛〕(名) 佛語。法身佛と應身佛と報身佛との稱。

さんす (自動變) 昔時、遊里の語。なさる。あそばす。長町女腹切中「爲ん方なさに、恐い事などさんせぬか、有りやう云うて落ちつかせて下ださんせ」曾根崎心中「大阪を堰かれさんしても」博多小女郞波枕中「ゆるりとして居さんす所であるまい」

さんす〔參〕(自動變) あづかる。くははる。たづさはる。關係す。

さんす〔產〕(自動變) ㊀うまれいづ。うまる。誕生す。生出す。㊁いづ。產出す。生ず。

さんす〔贊〕(自動變) ㊀力を添ふ。たすく。書經大禹謨「益贊㆓于禹㆒曰」傳贊、佐也」㊁同意す。贊成す。㊂贊の辭を記す。

さんす〔產〕(他動變) ㊀うむ。分娩す。出產す。拾遺雜賀「ある人產して侍る七夜に」吳越春秋「剖㆑脅而產㆓高密㆒」㊁製りだす。產出す。いだす。でかす。㊂そだつ。化育す。禮記鄕飮酒「春之爲㆑言蠢也、產㆓萬物㆒者也」

さんす〔贊 讚〕(他動變) ほむ。稱讚す。

さんす〔算〕(他動變) かぞふ。はかる。計算す。論語子路「噫斗筲之人、何足㆑算也」

さんす〔篡〕(他動變) うばひとる。うばふ。篡奪す。

さんず〔參〕(自動變) まゐる。參上す。枕八「さんぜんとするを、けふは御物いみにてなん」保元官軍方手分「軍兵雲霞の如く召し倶して、高松殿に參じたり」

さんず〔散〕(自動變) ㊀ちる。ちらばる。太平記八、持明院殿行㆓幸六波羅㆒「軍散じて翌日に」詩經大雅「旱既大甚、散無㆓友紀㆒」㊁なくなる。うす。

さんず〔散〕(他動變) ㊀ちらす。易經說卦「風以散㆑之」書經武成「散㆓鹿臺之財㆒」史記主父偃「遍召㆓昆弟賓客㆒、散㆓五百金㆒予㆑之」㊁はらす。太平記二、阿新殿事「鬱憤を散ぜんと思ふ故也」同廿四、依山門嗷訴公卿僉議「加様の不審をも、此の次いでに散じ度くこそ候へ」

ざんす (自動變) 遊里の語。ございます。ござんす。萬句合「髮の毛が通ればねぶちゃ御ざんせん」

ざんす〔讒〕(他動變) しこづ。讒言す。枕二、にくきもの「いささかも此の御ことにたがふものをば讒し、人をば人とも思ひたらず」

ざんす〔竄〕(他動變) 放つ。流す。流罪に處す。書經舜典「竄㆓三苗于三危㆒」

さんすう〔算數〕(名) ㊀かず。數。㊁さんよう。勘定。計算。後漢書律曆志「算數之事、生矣」㊂算術。數學。算道。

さんすくみ〔三竦〕(名) ㊀蛙は蛇を畏れ、蛇は蛞蝓(ナメクジ)を畏れ、蛞蝓は蛙を畏れて、相すくむこと。㊁三つの者が互ひに掣制して、自由の行動をなし得ざること。

さんすくりっと (英 Sanskrit)(名) ぼんご(梵語)に同じ。

さんすけ〔三介〕(名) 常陸介・上野介・上總介の稱。此の三國は親王の任國なれば、常に介を代理として國政を執らしめたるよりいふ。

さんすけ〔三助〕(名) 湯屋に雇はれて、人の垢を洗ひ流す下男。浮世風呂上「おいねえ三助だのう」

さんすゐ〔山水〕(名) ㊀山と水と。㊁山と水とを備ふる景色。南史王弘之「始寧沃川、有㆓佳山水㆒」同謝靈運「郡有㆓名山水㆒」㊂山と水との景色の畫。畫山水。唐書李思訓「思訓善㆑畫、世所㆑謂李將軍山水者」㊃山中にある水。やまみづ。戰國策楚「明日大雨、山水大出」㊄には。庭園。嬉遊笑覽「無名祕抄「山水を作るに、松を植うべき所には岩を立て、池を掘り、水をまかすべき地には山を築き、眺望をなす如く」㊅物さびたるさまをいふ、遊里の語。色道大鏡言辭「山水。物のさびたる事にいふ。少分なる事にもいふ。山水を畫きたるは、さびしき體なれば斯く云へるか」曾我扇八景中「夏・冬なしに涼しさうな、さんすゐな住み處と叩き合ふを」

さんすゐ の へき 山水癖 山川の勝地に遊ぶを好む癖。

さんすゐ〔爨炊〕 飯をたくこと。めしたき。炊事。陸游詩「客主同㆓爨炊㆒」

さんずゐ〔三水 散水〕(名) 漢字の偏の名。海・河・江・湖などの如く左方に氵の字あるもの。氵は篆書巛の略なる故に、字書にては水の部首に屬す。みづへん。(氵を二水といふ對)國姓爺三「軍法の法の字は、三水に去ると書く」

さんすゐそえん〔酸水素焰〕(名)【化】酸素と水素とを一處に噴出せしめて水素を燃燒するとき發する焰。殆ど無色なれども、其の熱極めて高く、よく白金を熔かす。又之を石灰に吹きつくれば、極めて强き白光を放つにより、從前は幻燈などに用ひられたり。

さんすゐそ-すゐくゎん〔酸水素吹管〕(名)【化】酸水素焰を生ぜしむるに用ふる裝置。一處に口を開ける二管より成り、其の一方より酸素を、他方より水素を吹き出ださしむ。

さんすゐ-ていゑん〔山水庭園〕(名) 山水の景色にかたどりて造りたる庭園。

さんすゐ-をとこ〔山水男〕(名) さびしきさまなる男。陰氣なる男。不景氣なる男。傾城反魂香上「身こそ墨繪の山水男、紙表具の體なりとも、朽ちて朽ちせぬ金砂子」

さんずん〔三寸〕(名) ㊀たけの短きこと。㊁脛骨跗上三寸許りの所。內と外とによりて內三寸・外三寸といふ。俚言集覽

さんずん の した 三寸舌 口さき。口。辯舌。盛衰記廿、佐殿大場勢汰「動㆓三寸之舌㆒、深蕩㆓二人之心㆒」史記張良「今以㆓三寸舌㆒、爲㆓帝者師㆒」

さんずん-なは〔三寸繩〕(名) 罪人を縛る繩。三寸を常法としたるよりいふ。

雪女五枚羽子板中「三寸繩に括り上げ」

さんずん-ふりつ 〔三寸不律〕（名）〔不律は筆の異名〕三寸の長さの筆。

さんずん-もやう 〔三寸模樣〕（名） 衣服の裾模樣が、後身(ウシロミ)の所にて高さ三寸許りなるもの。元祿頃に流行せり。我衣「寶曆五年頃より中略女中は五寸模樣といふはやる中略其の後三寸もやうはやる」

さん-せ 〔三施〕（名） 佛語。三種の布施。即ち、財施・法施・无畏施の稱。

さん-ぜ 〔三世〕（名） ㊀三つの世。即ち、前世・現世・來世の稱。三界。三際。平家二、教訓「三世の諸佛の解脫同相の法衣をぬぎ捨て、忽ちに甲冑を鎧ひ」觀無量壽經「三世諸佛、定業正因」㊁三世の緣ある者。即ち、主從の稱。俚言集覽 ㊂父・子・孫の三代。

さんぜ いんぐゎ 〔三世因果〕 三世に亙りて起こる因・緣・果。釋迦如來誕生會四「有りもせぬ三世因果を立て、地獄・極樂なんどとて」

さんぜ じふぱう 〔三世十方〕 三世と十方と。どこにても。殘るくまなく。大織冠二「一念の佛性、三世十方に通達し」

さんぜ の えん 三世緣 三世までも繫がる緣。即ち、主從の間の緣。川柳「仕合せはさんぜのえんの二世をする」

さん-せい 〔三正〕（名） ㊀天・地・人の正しき稱。謝瞻詩「神武睦三正」注「天地人之正也」㊁子・丑・寅の稱。㊂三綱の道正しきこと。書經甘誓「有扈氏威侮五行、怠棄三正」 禮記哀公問「夫婦有別、父子親、君臣嚴、三者正、則庶物從之」

さん-せい 〔三姓〕（名） 古昔、祭主となるべき三つの族姓。即ち、大中臣・卜部・齋部の稱。

さん-せい 〔三牲〕（名） 三種の犧牲。即ち、牛・羊・家の稱。太平記十二、驪姬「三牲の備へを調へて、齊姜の死して埋もれし曲沃の墳墓をぞ祭ける」 禮記祭統「三牲之俎、八簋之實、美斯備矣」

さんせい の やしなひ 三牲養 三牲を用ひて親を養ふ料とすること。孝經紀孝行「雖日用三牲之養、猶爲不孝也」

さん-せい 〔三聖〕（名） ㊀世界の三人の聖人。即ち、釋迦・孔子・耶蘇の稱。㊁三人の歌聖。即ち、柿本人丸・山部赤人・衣通姬の稱。㊂支那の三人の聖人。即ち、老子・孔子・顏子の稱。齊東野語「理宗朝有待詔馬遠、畫三聖圖」

さん-せい 〔算生〕（名） 古昔、大學寮にて算術を習ひし生徒の稱。職員令「大學寮中略算生卅人掌習算術」

さん-せい 〔山西〕（名） 山のにし。

さん-せい 〔山勢〕（名） 山の姿勢。山の樣子。山形。太平記七、千劒破城軍「大軍の近づく處には、山勢是れが爲めに動き」 庾信文集積山佛龕銘「木聲幽咽、山勢崆峒」

さん-せい 〔山精〕（名） 山のぬし。山の靈。山の神。やまびこ。抱朴子「山精一日岐、一日超空、一日揮、一日飛龍」

さん-せい 〔參星〕（名） さん(參)に同じ。

さん-せい 〔酸性〕（名） 酸味ある性質。酸類の性質。

さん-せい 〔三省〕 三たび我が身をかへりみること。いく度も反省すること。論語學而「吾日三省吾身」

さん-せい 〔刪正〕 刪(ケヅ)り正すこと。文字・章句などを刪除・訂正すること。改刪。

さん-せい 〔參政〕 ㊀政事に參與すること。又、その人。宋史魯宗道「日爲魚頭參政」㊁古昔、執政の次に位して、政事に參與せし職。㊂明治元年十月二十八日各藩に置かれたる職員。藩主の任ずる所にして、政事に參與し、一藩の庶務を總べて與り聞くことを掌るもの。同二年七月廢せられたり。明治元年十月藩治職制「參政」 明治職官沿革表一、職官部上明治九年「參政」

さん-せい 〔贊成〕 ㊀たすけなすこと。助成。荷擔。贊助。易經疏「贊成其辭」㊁同意すること。

さん-せい 〔山棲〕 山に棲むこと。何氏語林「鳳凰不憎山棲、蛟龍不羞泥蟠」

さん-せい 〔慘悽〕 いたましくかなしきさまにいふ語。悽慘。史記張釋之「上自倚瑟而歌、意慘悽悲懷」

ざん-せい 〔殘生〕（名） おひさきの短きいのち。のこりの生命。殘年。餘命。餘生。殘喘。餘喘。

ざん-せい 〔殘星〕（名） 夜明けの空に殘りて光る星。ありあけのほし。太平記一、後醍醐天皇御治世「朝陽不犯ども、殘星光を奪はるる習ひなれば」 趙嘏詩「殘星幾點雁橫塞」

ざん-ぜい 〔殘稅〕（名） 未進(ミシン)の稅。納め殘りの稅。未納稅。

さんぜい-いっしん 〔三世一身〕（名） 元正天皇の養老七年、開墾奬勵のために、墾田につきて定めたる方法。即ち、新たに溝池を穿ちて山野を開墾したる者には其の地を給して三世に傳へしめ、舊溝池を逐ひて開墾したる者には終身其の地を給せしめしこと。續紀十五、天平十五年五月乙丑「如聞、墾田依養老七年格、限滿之後、依例收授、由是農夫怠倦、開地後荒。自今以後、任爲私財、無論三世一身、悉咸永年莫取」

さんせい-えん 〔酸性鹽〕（名）【化】多鹽基酸の水素原子の一部を金屬にて置換したる鹽類。

さんせい-くゎん 〔參政官〕（名） 各省の職員。大臣を佐け、帝國議會との交涉事項を掌理する勅任官。各省官制通則第十四條「參政官」 同第十七條「各省參政官は一人勅任とす」

さんせい-けん 〔參政權〕（名）【法】公權の一。臣民が其の國の政事に參與する權利。即ち、帝國議會議員・市町村會議員などの選擧權・被選擧權の類。

さんせい-さんくゎぶつ 〔酸性酸化物〕（名）【化】水に溶けて酸を造り、又は鹽基を中和して鹽を生ずる酸化物の總稱。無水亞硫酸・五酸化燐の如きもの。

さんせい-しゅせきさんかりうむ （英 Acid potassium tartarate）〔酸性酒石酸――〕（名）【化】葡萄酒釀造の際、器底に沈積する酒石酸の主成分をなし、水に可溶なれどもあるこーる・に溶け難し。純粹なるは無色の結晶にして酒石英と稱し、$C_4H_5O_6K$ なる組成を有す。

さんせい-せん 〔酸性泉〕（名） 遊離酸類を含む溫泉。

さんせい-せんれう 〔酸性染料〕（名）【化】れーき・を生ずる染料。即ち、金屬の水酸化物を媒染劑として布帛を染色するもの。

さんせい-はんおう 〔酸性反應〕（名）【化】青色りとます・を赤色に變ぜしむること。

さんせい-りんさんあんもにうむなとりうむ （英 Natrium ammonium hydrogen phosphate）〔酸性燐酸――〕（名）【化】$HNaNH_4PO_4 \cdot 4H_2O$ 鹽化あむもにうむ・と燐酸なとりうむ・とを少許の水に溶かし、化合せしめて得らるる無色の結晶。白金線の端につけて强熱すれば、硝子樣の小球を得。金屬の酸化物を熔かして特有の色を呈するにより、分析術に用ひらる。小天地鹽。

さんせい-わう 〔三世王〕（名） くわうそん(皇曾孫)に同じ。

さん-せう 〔三焦〕（名） 漢方にて六腑の一。上・中・下に分かれ、上焦は心臟の下・胃の上口に、中焦は胃の中に、下焦は膀胱の上口にありて、水分の排泄を掌るといふ。史記扁鵲倉公「別下於三焦膀胱」 黃庭經註「心・肝・肺之上、係管之中、爲三焦」

さん-せう 〔山椒〕（名）【植】芸香(ヘンルーダ)科、山椒屬の落葉灌木。幹の高さ丈餘、よく分枝し、特殊の香氣を有し、刺多し。葉は羽狀複葉、各小葉は卵狀披針形、鈍鋸齒を有す。春季、葉腋に綠黃色の小花を集生し、單性、雌雄異株なり。我が國、各地の山野に生じ、葉・果實及び莖の皮部を香辛料として食し、又、材を雜用に供す。はじかみ。秦椒。

さんせう の こつぶ 三椒小粒 次條に同じ。

(諺)山椒は小粒でも辛い 短身にても力量又は才能あるに譬へていふ。

(諺)山椒は小粒でもひりりと辛い 前條に同じ。

(諺)山椒は小さくても辛い 前條に同じ。

さん-せう 〔三笑〕 支那晉の世に惠遠法師、來訪の客、陶淵明・陸士靜を送り、覺えず虎溪を過ぎて大笑せし故事。廬山記「惠遠居廬山東林寺、送客不過溪、一日與陶淵明道士陸士靜共話、不覺踰之、虎輒驟鳴、三人大笑而別、後建三笑亭」

さん-せう 〔參照〕 他のものと照らして合はすること。彼れ此れひきあはせ見ること。てらしあはせ。參考。

ざん-せう 〔殘照〕（名） 入日の餘光。夕日の影。ゆふひ。いりひ。斜照。夕照。孟浩然詩「竹開殘照入」

ざん-せう 〔巉峭〕（副） 山又は岩などのけはしく峙つさまにいふ語。唐書西域「有鐵門山、左右巉峭」 北夢瑣言「橫石巉峭、常爲舟楫之患」

ざん-せう 〔嶄峭〕（副） 山などの高く聳えて、けはしきさまにいふ語。

さんせう-いばら 山椒薔薇 （名）【植】㊀さんせうばら(山椒薔薇)の異名。㊁なにはいばら(金櫻子)の異名。

さんせう-うを 山椒魚 （名）【動】兩棲類中、有尾類の一種。體の長さ四五尺に達し、稍とかげに似たり。四肢を有し、山間の溪水に棲む。幼き時は頸側に外鰓を具ふれども、老成するに隨ひて消失し、肺にて呼吸す。此の動物は、兩棲類中最も大なるものにて、殊に本邦產は形大きく、外人の珍重するところなり。伊賀・伊勢其の他中國地方に產す。箱根山椒魚と名附くるものあれども、本種とは別物にて、分類上の位置も亦異なる。鯢魚。

さんせう-じゃうゆ 〔山椒醬油〕（名） 山椒の果皮又は嫩葉の粉にしたるを入れて味をつけたる醬油。國姓爺後日合戰五「此のやうな蛇(ヂヤ)は國姓爺が鰻を割くより易い事、山椒醬油蒲燒で、軍兵どもの精藥」

さんせう-はも 山椒鱧 （名） 料理の一種。鱧を二寸許りに切り、山椒味噌を附けたるもの。貞丈雜記

さんせう-ばら 山椒薔薇 （名）【植】㊀薔薇(バラ)科、薔薇屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺、よく分枝し、刺多し。葉は羽狀複葉、各小葉は橢圓形、微鋸齒を有す。初夏、淡紅色の重瓣花を枝梢上に開き、多く一方に缺刻あり。我が國、各地の山地に自生し、多くは觀賞用として栽培せらる。㊁なにはいばら(金櫻子)の異名。

さんせう-びゃう 〔山椒鋲〕（名） 鋲の一種。其の頭が山椒の種の如く丸きもの。昔時、具足などに用ふ。

さんせう-みそ 山椒味噌 （名） 山椒の嫩葉又は果皮をすり込みたる味噌。甲陽軍鑑廿「鯛の魚を山桝味噌にてあへ物にし」 吉野都女楠四「ぬらりころりは鰻の蒲燒、山椒味噌」

さんせう-みほん 參照見本 （名）【商】賣主が買主に交付して、賣り渡したる商品と對照せしむる見本。

さんせう-むし 山椒蟲 （名）【動】さんせううを(山椒魚)の異名。

さんせう-も 槐葉蘋 （名）【植】槐葉蘋科、槐葉蘋屬の一年生草本。水上に浮游す。莖は細く、長さ二三寸ありて、根を有せず。葉は二種あり、一は尋常葉にして綠色橢圓形、二列に莖に排列し、羽狀を呈し、他は根狀にして水中に下垂す。秋季、此の根狀葉間に囊狀物を出だし、中に胞子囊を生ず。我が國、各地の水田・池沼等に自生す。

さんせうも-くゎ 槐葉蘋科 （名）【植】隱花植物、羊齒類の一科。小なる浮游植物なり。多少伸長し、時に分岐せる體を有し、二列の葉を生ず。胞子器は薄き膜を有し、一梗に二又は以上の胞子器を有し、中に大胞子囊又は小胞子囊を藏す。大胞子囊よりは一箇の大胞子、小胞子囊よりは多數の小胞子を生ず。大胞子は發芽して雌性の小植物、小胞子は又雄性の小植物となり、各小植物上に雌器又は雄器を生じ、玆に生殖を遂げて新植物體を成す。本科に屬するものは、廣く世界各地に分布し、有用なるもの無し。くわいえふひんくわ。

さん-せき 三關 （名） さんくわん(三關)に同じ。

さん-せき 〔三蹟〕（名） 能書の三人の筆蹟。即ち、小野道風・藤原佐理・藤原行成の稱。或ひは小野道風を除きて兼明親王を加へてもいふ。

さん-せき 〔三夕〕（名） さんせきのわか(三夕和歌)の略。

さんせき の わか 三夕和歌 秋の夕暮をよめる三首の著名なる歌。即ち、寂蓮の、さびしさは其の色としもなかりけり、槇立つ山の秋の夕暮と、西行の、心なき身にも哀れは知られけり、鴫立つ澤の秋の夕暮と、定家の、見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮との稱。

さん-せき 〔三席〕（名） 詩・歌・管絃の三種の會合の席。名目抄「三席、詩・歌・樂」

さん-せき 〔霰石〕（名）【鑛】あられいし(霰石)の異名。

さん-せき 〔鑽石〕（名）【鑛】こんがうせき(金剛石)に同じ。

さん-せき 〔山脊〕（名）【地】山巓の最高點を連結したる不規則なる線。爾雅「山脊岡」

さん-せきりう 〔山石榴〕（名）【植】つつじ(躑躅)の異名。

さんぜ-さう 〔三世相〕（名） 佛の因緣說に五行生剋の理と卜筮の法とを交へて、人の生年月・人相などより、其の過去・現世・未來、三世の因果・善惡・吉凶等を說くこと。生玉心中中「此の前、さる人に三世相見て貰ひしに、前生で佛前の茶の湯の茶碗打ち割りし報いあり」

さん-せちゑ 〔三節會〕（名） 古昔、禁中にて行はれし年頭の三つの大禮。即ち、元日の節會、七日の白馬(アヲウマ)の節會、十六日の踏歌の節會の稱。

さん-せつ 〔散雪〕（名） 鷹の翼の名所。たか(鷹)を見よ。

さん-せつ 〔山雪〕（名） 山に積もれる

雪。山のゆき。韋應物詩「野寺望山雪、空齋對竹林」

さん-せつ 〔刪節〕 刪除・節略すること。伊洛淵源錄附錄「其他浮辭、多合刪節」

さん-ぜつ 〔三絶〕 (名) 三つとも卓絶すること。唐書文藝「宋之問父令文、富文辭、且工書、有力絶人、世稱三絶」

さん-ぜつ 〔慘絶〕 非常に慘酷なること。極めて悲慘なること。

ざん-せつ 〔殘雪〕 (名) 消え殘りのゆき。春に入りて猶とけぬ雪。のこんのゆき。朗詠「有色易分殘雪底」 杜審言詩「梅花落處疑殘雪」

ざん-せつ 〔讒説〕 ざんげん(讒言)に同じ。書經舜典「朕堲讒説殄行」

ざん-ぜつ 〔嶄絶〕 (副) 山などの獨り高く聳えて峻しききさまにいふ語。山などの高くきりたつさまにいふ語。丘遲詩「嶄絶峰殊狀」

さん-せん 〔散錢〕 (名) 神佛に奉る錢。賽錢。賀古教信七墓廻「寺寺の奉加・さん錢は何のため」

さん-せん 〔山川〕 (名) やまとかはと。山河。易經上經「地險、山川丘陵也」 書經舜典「望于山川」 詩經小雅「山川悠遠、維其勞矣」

さんせん ばんり 〔山川萬里〕 山川を隔てて遠きにいふ語。國姓爺「誠、世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ」

さん-せん 〔山泉〕 (名) 山より湧き出づるいづみ。山閒の泉。韓愈文歐陽生哀辭「閩越地肥衍、有山泉禽魚之樂」

さん-せん 〔山蟬〕 (名) 山中に鳴き居るせみ。朗詠「遲遲兮春日、玉甃暖兮溫泉溢、嫋嫋兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅」 沈佺期詩「山蟬處處吟」

さん-せん 〔山戰〕 (名) 山中に於ける戰爭。

さん-せん 〔三遷〕 (名) さんせんのをしへ(三遷敎)の略。

さんせん の をしへ 三遷敎 支那の孟子の母が孟子を敎育するに苦心して、三たび住居を移ししこと。母が其の子に對して用意周到なる敎育を施すにいふ語。列女傳「孟軻之母、其舍近墓。孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋。孟母曰、此非所以居子也、乃去舍市。其嬉戲爲賈衒。孟母曰、此非所以居子也、乃徙舍學宮之旁。其嬉戲乃設俎豆、揖讓進退。孟母曰、此眞可以居子。遂居之」 趙岐文孟子題詞「孟子生有淑質、幼被慈母三遷之教」

さん-ぜん 〔山前〕 (名) 山のまへ。(山後の對) 盧綸詩「山前望白波」

さん-ぜん 〔產前〕 (名) 出產の以前。即ち、ほどなく分娩する頃。若風俗四「產前・產後の名人、銀鍋に早め藥を仕かけ置きぬ」

さん-ぜん 〔參禪〕 禪學を學ぶこと。太平記廿六、妙吉侍者「日夜の參禪・學道の御爲めに候へば」 皮日休詩「林閒孤鶴欲參禪」

さん-ぜん 〔慘然〕 (副) あはれなるさま、又うれひいたむさまにいふ語。邢經詩「佇立無人語、巡簷思慘然」

さん-ぜん 〔燦然・粲然〕 (副) 一 きらびやかなるさま、はでやかなるさま、又あきらかなるさまにいふ語。太平記廿四、依山門嗷訴公卿僉議「正法・邪法興廢、粲然可觀之」 漢書五行志「天人之道、粲然著矣」 二 白き齒をあらはして笑ふさまにいふ語。穀梁傳昭公四年「軍人皆粲然而笑」

さん-ぜん 〔潸然〕 (副) 涙を流して泣き哀しむさまにいふ語。さめざめ。

ざん-せん 〔殘蟬〕 (名) 秋ふかくなりたる頃のせみ。白居易詩「林泉有殘蟬」

ざん-ぜん 〔殘喘〕 (名) ざんせい(殘生)に同じ。郝經詩「老吟寄殘喘」

ざん-ぜん 〔嶄然〕 (副) 一段高くぬけ出でたるさまにいふ語。韓愈文柳子厚墓誌銘「嶄然見頭角」

さん-せんじん 〔三戰神〕 (名) 佛語。戰(イクサ)の三つの守り神。即ち摩利支天・大黑天・毘沙門天の稱。

さんぜん-せかい 〔三千世界〕 (名) 佛語。次條の略。盛衰記廿八、經正竹生島詣「都良香中略湖水遙かに見渡して、三千世界眼前盡と詠じ給ひたりければ」

さんぜん-だいせん-せかい 〔三千大千世界〕 (名) 一 佛語。大千世界を三千倍したるもの。釋氏要覽「以三積千、故名三千大千世界」 二 ひろき世界。宇津保菊宴「あこ君の御舞、君の御さうは、三千大千世界にかたきはあらじかし」

さんぜん-の-ちようあい 〔三千寵愛〕 (句) 多くの侍女にかくる寵愛。傾城酒呑童子「比翼連理の御語ひ、三千の寵愛只一人」 白居易詩長恨歌「後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」

さんせん-べん 〔三尖瓣〕 (名) 【醫】心臟の右室内にあるもの。右房との間の瓣をなし、血液の逆流を防ぐ。

さん-そ 〔酸楚〕 (名) 〔そ(楚)は、いたみ悲しむ義〕 かなしくつらきこと。いたみ苦しむこと。辛楚。苦楚。李白詩「客心自酸楚、況對木瓜山」

さん-そ 〔蠶蛆〕 (名) 【動】かひこのうじ(蠶蛆)の異名。

さん-そ 〔酸素〕 (名) 【化】無色・無臭・無味の氣體。强壓と寒冷とに逢へば液體となり、又固體ともなる。他物を燃燒せしむる性强く、火の氣の殘れるまつちを再燃し、空氣中にて燃え難きものをも燃燒す。殆ど總べての元素と化合物を造る。地球上に最も多量に存在する元素にして、空氣の容積の約五分の一を占め、水の重量の九分の八をなす。

ざん-そ 〔殘礎〕 (名) 建物のあとに殘りあるいしずゑ。

ざん-そ 〔讒訴〕 一 人を惡しざまに長上に訴へ告ぐること。讒言。 二 かげぐちをすること。かげごと。そしり。劉向文封事「勉强以從王事、則反見懀讒訴」

さん-そう 〔山僧〕 (名) 山寺の住僧。又、僧侶の稱。山衲。庾信詩「野老時相訪、山僧或見尋」 李白詩「閑與山僧別、低頭禮白雲」

さん-そう 〔山窗〕 (名) 山居のまど。山ごもりせる家のまど。權德輿詩「寂寞山窗掩白雲」

さん-そう 〔山藪〕 (名) 山とさはと。山澤。左傳宣公十五年「山藪藏疾」

さん-そう 〔攢叢〕 一 あつまりむらがること。又、よせあつむること。 二 はやし。江淹文拼櫚賦「攢叢石徑、森蓯山道」 又くさむら。李白詩「巘崿上攢叢」

ざん-そう 〔讒奏〕 人をあしざまに奏上すること。盛衰記五、山門奏狀「西光法師が無實の讒奏に依って」

ざん-そう 〔竄走〕 にげはしること。のがれはしること。奔竄。

さんそう-ろう 〔三層樓〕 (名) 三階の樓。三階家。梁書陶弘景「永元初、更築三層樓」

さん-そく 〔山足〕 (名) 山のすそ。ふもと。山脚。山麓。詩經大雅「瞻彼旱麓」注「麓山足也」 南史謝朏「吾得歸骨山足」

さん-そく 〔三足〕 (名) 三本のあし。三脚。搜神記「定襄有牝馬、生駒三足」

さんそく の からす 三足烏 太陽の中に住むといふ三本足の烏。轉じて、たいやう(太陽)の異稱。史記司馬相如「亦幸有三足烏爲之使」

さん-そく 〔慘惻〕 いたましきこと。むごたらしきこと。

さん-ぞく 〔三族〕 (名) 父と子と孫との稱。又、父母と兄弟と妻子との稱。或ひは父の族と母の族と妻の族とし、或ひは父の昆弟と己れの昆弟と子の昆弟とし、諸説一定せず。持統紀「免三族課役、以褒其功」 周禮小宗伯「掌三族之別、以辨親疏」 儀禮士昏禮「唯是三族之不虞、使某也請吉日」

さんぞく の つみ 三族罪 一人罪あれば、其の三族を連坐する刑。太平記二、三人僧徒關東下向「傳奏を召し出だして、三族の罪に行はれけり」 史記秦紀「文公中略二十年、法初有三族之罪」

さん-ぞく 〔山賊〕 (名) 山中に籠もり居て、おひはぎなどする盜賊。やまだち。盛衰記廿、佐殿大場勢汰「山賊・海賊して死にたらば」 南史謝靈運「嘗自始寧南山、伐木開徑直至臨海、從者數百人、臨海太守王琇、驚駭謂爲山賊、徐知是靈運、乃安」

ざん-ぞく 〔殘族〕 (名) 殘りたるやから。生き殘りたる一族。遺族。遺類。殘類。

ざん-ぞく 〔殘賊〕 一 そこなひ、やぶること。害をなすこと。仁義を傷害すること。又、其の人。殘害。太平記十八、比叡山開闢「是れ當家の蠹毒、釋門の殘賊なるべし」 詩經小雅「廢爲殘賊、莫知其尤」 孟子梁惠王下「殘賊之人、謂之一夫」 史記秦始皇本紀「今陛下擧義兵、誅殘賊、平定天下」 二 のこりの賊。うちもらされし賊。餘賊。

ざん-ぞく 〔讒賊〕 しこづりそこなふこと。又、其の人。劉向文封事「執狐疑之心者、來讒賊之口」

さん-そつ 〔散卒〕 (名) 逃げ散りたる士卒。敗殘の兵。勇氣はげしからぬ士卒。戰國策魏「越王勾踐以散卒三千、禽夫差於干遂」

さん-そん 〔山村〕 (名) 山にある村。山閒の村邑。杜甫詩「歸雲擁雲失山村」

さん-そん 〔三尊〕 (名) 一 三つのたふとぶべきもの。即ち、君・父・師の稱。 二 佛語。彌陀・觀音・勢至の三菩薩。又、釋迦・文珠・普賢の三菩薩の稱。普達生經「供養三尊」 三 佛語。藥師と日光と月光との稱。

さんぞん らいがう 〔三尊來迎〕 彌陀・觀音・勢至の三尊が出現して、淨土へ迎へ導くこと。盛衰記八、法皇三井灌頂「夕日西に傾けば、九品上生の蓮臺に、三尊來迎の御心を運び給へり」

ざん-そん 〔殘樽〕 (名) 樽の中に殘れる酒。又、酒の殘れる樽。杜甫詩「殘樽席更移」

ざん-そん 〔殘存〕 のこりてあること。のこりとどまること。

さん-そんいう 〔三損友〕 (名) 交はりて損を招く三種の友人。即ち、便辟なる人・善柔なる人・便佞なる人の稱。論語季氏「損者三友中略友便辟、友善柔、友便佞、損矣」

さん-た 〔三太〕 (名) 一 でっち(丁稚)、又こぞう(小僧)などの稱。 二 犬などの前足をあげて立つこと。一代男六「犬にさんたさせて遊ばるるこそ、すこしは心憎けれ」 梅狩劔本地「目より高く指し上ぐれば、馬はさんたをする如く、諸任は仰向けに轉びを打って跳ね反し、眞っ逆樣にぞ落ちたりけり」 俳諧慕景集「さんたかや今朝たち初むる戌の年」

さん-た 〔三多〕 (名) 作文は看ること多きと、作ること多きと、商量すること多きとによりて上達すといふこと。後山詩話「歐陽永叔謂、爲文有三多、看多・做多・商量多也」

さん-たい 〔三台〕 (名) 一 さんたいせい(三台星)の略。 二 太政大臣と左大臣と右大臣との稱。三台星にかたどりていふ。三公。盛衰記十一、大臣所勞「重盛苟くも九卿に列し、三台に昇る」 後漢書郎顗傳注「三公在天爲三台」 宋書顏延之「此一台座、豈可使刑餘居之」

さんたい くわいもん 〔三台槐門〕 さんたい(三台)に同じ。盛衰記廿一、家形落「三台槐門・九棘鴛鸞の栖、門前繁昌、堂上榮華の砌なりき」

さんたい の くらゐ 三台位 三台星にかたどりたる三公の位。

さん-たい 〔三體〕 (名) 一 三つの體形。 二 書法の三種の體。即ち、眞・行・草の稱。插花にもいふ。

さん-たい 〔三諦〕 (名) 佛語。空諦・假諦・中諦の稱。空諦とは諸法皆空なりと觀じ、假諦とは諸法皆有なりと觀じ、中諦とは有にあらず空にあらずと觀ずること。又、空・色・心にもいふ。南史梁昭明太子「乃於宮內別立慧義殿、專爲法集之所、招引名僧、自立三諦法義」

さんたい そくぜ 〔三諦即是〕 さんたい(三諦)に同じ。太平記一、儲王「三諦即是の月の光を、玉泉の流れに浸せり」 法華經玄義「諦者審諦也、謂諦審一切法、即空・即假・即中、即空是眞諦、即假是俗諦、即中即中諦、此三隔歷、即是次第三諦、無礙、即是圓融三諦」

さん-たい (副) たびたび(度度)をいふ、伊勢・駿河・相模の方言。物類稱呼

さん-だい 〔三代〕 (名) 支那の上代の三王朝。即ち、夏・殷・周の稱。論語衞靈公「斯民也、三代之所以直道而行也」 註「三代、夏・殷・周」

さんだい さうおん 〔三代相恩〕 次條に同じ。生寫朝顏話宿屋の段「あなた樣の祖父秋月兵部さまに三代相恩」

さんだい しようおん 〔三代承恩〕 父祖以來、主君の恩澤を承くること。三代重恩。

さんだい ぢゆうおん 〔三代重恩〕 前條に同じ。

さん-だい 〔參內〕 內裏へまゐること。朝廷に出仕すること。參朝。盛衰記廿三、朝敵追討例「大將軍先づ參內して、節刀を賜はる」

さんだい-えん 〔三臺鹽〕 (名) 雅樂の曲の一。平調なり。支那唐の則天武后の作なりと。

(さんだいえん)

さんだい-かくしき 〔三代格式〕 (名) さんだいきやくしき(三代格式)に同じ。

さんだい-がさ 參內傘 (名) 一 柄の長きさし傘。昔時、公卿などが參內の節、從者にさしかざさしめたるもの。 二 【植】つるぼ(綿棗兒)の異名。

さんだい-きやくしき 〔三代格式〕 (名) 古昔の三代の格式。即ち、弘仁格式・貞觀格式・延喜格式の稱。さんだいかくしき。

さん-だいけう 〔三大橋〕 (名) 昔時、山城國の宇治橋と淀の大橋又は山崎の橋と近江國の勢多橋との稱。伊呂波字類抄佐、橋梁「三大橋」 京羽二重四「三大橋」

さんだい-しふ 〔三代集〕 (名) 三つの時代の勅選の歌集。即ち、古今集・後撰集・拾遺集の稱。

さん-たいしゆ 〔三太守〕 (名) 古昔、親王を以て任じたる三つの國守。即ち、上總守・上野守・常陸守の稱。

さんたい-せい 〔三台星〕 (名) 支那に

て、紫微星の左右に在りて、之を守る三箇の星。即ち、上台・中台・下台の稱。

さんだい-せつ〔三大節〕(名) 三つの大祭日。即ち、四方拜・紀元節・天長節の稱。

さんたい-の-ざ 三台座 (名) 兜の名所。眉庇(マビサシ)を鉢の腰に取り附くるために打ちたる三所の鋲。三公の鋲。

さんだい-ばなし 三題話 (名) 三箇の題を聽衆より求め、卽座にこれを合はせて作りたる一の落語。文化の頃三笑亭可樂の創めたるもの。只誠埃錄二百「可樂は捷才頓智の人中略席に臨みて三題話を作る。最も賞するに絕えたり。三題ばなし、聽衆に對ひて三つの題をもとむ。聽衆一人より一題を出だして、合はせて三題となる。たとへば一人、鼈といふ、一人、火の消えたる炬燵といふ。一人、唐山の遊女といふ。これを合はせて三題とす。三題を得て、一回の落話に作るを號して三題ばなしといへり。衆口爭うて難題をあたふ。可樂自若として須臾に頓作し、聽を驚かす事常也」

さんだい-ふ〔三太夫〕(名) 華族の家令・家扶・家從などの稱。又、富豪の家の家事・會計などを取り扱ふ人の稱。

さんだい-ぶつ〔三大佛〕(名) 大和國東大寺と河內國大平寺と近江國關寺との三所にある大佛の稱。節用十、數量「三大佛 サンダイブツ 和州東大寺 河州太平寺 江州關寺」

さん-だい-もん〔三大門〕(名) 古昔、平安城の外廓にありし三つの大門。即ち、羅生門・朱雀門・應天門の稱。

さん-だい-ゑ〔三大會〕(名) 古昔、行はれし三つの大なる法會。即ち、大極殿の御齋會・興福寺の維摩會・藥師寺の最勝會の稱。

さん-たう〔山桃〕(名) 山中にある桃。朗詠「山桃復野桃、日曝紅錦之幅」

さん-たう〔三島〕(名) さんしんざん(三神山)に同じ。神仙傳「海上有三神山、曰蓬萊、曰方丈、曰瀛洲、謂之三島」

さん-たう〔山刀〕(名) やまがたな(山刀)に同じ。

さん-たう〔三到〕(名) 讀書に必要なる三つの事。卽ち、心と眼と口との十分に並びはたらくこと。朱熹文訓學齋規「余謂讀書有三到、謂心到・眼到・口到」中略心到最急、心既到矣、眼口豈不到乎」

さん-たう〔算當〕(名) 一算へ當つること。計算すること。算用。勘定。二見つもり。見當。

さん-だう〔山道〕(名) 山間の道路。やまみち。やまぢ。山路。漢書西域「山道不通」

さん-だう〔三道〕(名) 一さんから(三行)に同じ。禮記祭統「是故孝子之事親也有三道焉。生則養、沒則喪、喪畢則祭」二兵家にて正兵・奇兵・伏兵の稱。

さん-だう〔棧道〕(名) 懸崖などに設けたる道。戰國策魏「壞城郭、且爲棧道而葬」魏志曹眞「會大霖雨、棧道斷絕」

さん-だう〔算道〕(名) 算術。算法。數學。

さんだう-の-いへ 算道家 古昔、朝廷に仕へて、算道を其の業とする家。卽ち、三善家・小槻家の稱。

さん-だう〔參堂〕(名) 一堂宇に參詣すること。太平記廿四天龍寺供養「尊氏卿・直義朝臣、既に參堂有りしかば」二人の家を訪ふことの敬語。參館。

ざん-たう〔殘盜〕(名) のこりの盜賊。捕縛にもれたる盜人。殘賊。餘盜。餘賊。唐書回紇「除殘盜」

ざん-たう〔殘黨〕(名) 殘れる黨類。討ち漏らされたるやから。殘類。餘黨。餘類。東鑑六、文治二年六月廿八日「搦取殘黨五人」太平記九、六波羅攻「一陣破れて殘黨全からざれば」唐書德宗「殘黨畏誅」

ざん-たう〔塹刀〕(名) 彫刻用の小刀。

さんたう-ちがひ 算當違 (名) 算當のあやまり。勘定ちがひ。誤算。

さん-だか 產高 (名) 產出のたか。產額。

ざん-だか 殘高 (名) 【數】元高と步合高との差。之を求むる公式は次の如し。殘高＝元高×(1－步合)

さん-たく〔山澤〕(名) やまとさはと。禮記曲禮「問國君之富、數地以對、山澤之所出」孟子滕文公上「益烈山澤而焚之」

ざん-たく〔竄謫〕 罪によりて遠地に流さるること。廣集文傷寂能序「子厚精思于竄謫之久」

さん-だし 三出 (名) 帳合米にて、問屋が三分の附合せをなすこと。

さん-だつ〔簒奪〕 帝王の位、又は其の大權をうばふこと。

さん-だつ〔慘怛〕 いたみかなしむさま、又、思ひなやむさまにいふ語。史記屈原賈生「疾痛慘怛」

さん-たつ-そん〔三達尊〕(名) 朝廷にては爵を尊び、鄉黨にては齒(ヨハヒ)を尊び、世を輔け民を長ずるには德を尊ぶこと。孟子公孫丑下「天下有達尊三、德一、齒一、爵一、朝廷無如爵、鄉黨無如齒、輔世長民無如德」

さん-たつ-とく〔三達德〕(名) 天下一般に通ずべき三つの德。卽ち、智・仁・勇の稱。三德。中庸「知仁勇三者、天下之達德也」

さん-だはら 棧俵 (名) 米俵の兩端の蓋として用ふる藁製の圓くひらたきもの。さんだはらぼふし。さんだらぼっち。松風村雨束帶鑑三「漏らさぬ底の心まで、とんとあけたる棧俵、これ公家樣の御膳米」

さん-たふ〔三答〕(名) さんたふじやう(三答狀)の略。道照愚草「一、訴論人の事中略三問狀三箇度の訴狀也。此の答へを三答と云ふ、三箇度の陳狀共云ふ」

さん-たふ〔三塔〕(名) 山城國比叡山の東塔・西塔・橫川の三つの塔の稱。平家一、御輿振「老僧の中に、三塔一の僉議者と聞こえし、攝津竪者豪運」

さんたふ じゅんれい〔三塔順禮〕 三塔を順拜すること。徒然草「人あまたともなひて三塔順禮の事侍りしに、橫川の常行堂のうち、龍華院と書きけるふるき額あり」

さんたふ の せんぎ 三塔僉議 比叡山の大衆會合して僉議すること。盛衰記四、額打論「三塔の僉議と申す事は、大講堂の庭に、三千人の衆徒會合して、破れたる袈裟にて頭を裹み、入堂杖とて三尺許りなる杖を面面に突き、道芝の露打ち拂ひ、小石一づつ持ち、其の石に尻懸け居並べるに、弟子にも同宿にも聞き知られぬ樣にもてなし、鼻を押へ、聲を替へて、滿山の大衆立ち廻はられよやと申して、訴訟の趣きを僉議仕るに、可然をば尤尤と同ず、不可然をば此の條無謂と申し、假令勅定なればとて、ひた頭・直面にては爭か僉議仕るべきと申し上げければ」

さんたふ-じゃう〔三答狀〕(名) 三問狀に對して、論人の提出する陳狀。三答。沙汰未練書「一、三答狀、三箇度の陳狀也」

さんだ-やき 三田燒 (名) 攝津國有馬郡三田地方より產する磁器。青磁を良品とす。本朝陶器攷證「攝州三田燒」

さんだらう〔三太郎〕(名) ばか(馬鹿)といふ隱語。膝栗毛四上「とんだやつらだ、すでにいい三太郎にしようとしやあがった」

さんだら-ぼっち 棧俵法師 (名) 次條に同じ。

さんだら-ぼふし 棧俵法師 (名) さんだはら(棧俵)に同じ。

さん-たん〔三端〕(名) 文士の筆端と、武士の鋒端と、辯士の舌端との稱。韓詩外傳「君子宜避三端、文士筆端、武士鋒端、辯士舌端」

さん-たん〔山端〕(名) 山のはし。やまのは。山嘴。

さん-たん〔山丹〕(名) 【植】ひめゆり(山丹)の異名。

さん-たん〔三嘆〕 一幾度も嘆息すること。二幾度も讚嘆すること。あまたたび感心すること。太平記十三、北山殿謀叛「鄭聲雅を亂る故に、一唱三歎の曲に非ず」禮記樂記「一倡而三歎、有遺音者矣」

さん-たん〔讚嘆〕 感じほむること。感歎して稱讚すること。ほめそやすこと。歎賞。源御法「薪こるほどのさんたんの聲も」盛衰記卅三、篠原「安養世界の玉の橋には、如來讚歎の曲を奏す」

さん-たん〔慘怛〕 さんだつ(慘怛)に同じ。

さん-たん〔慘澹〕 一なげかはしくいたましきさまにいふ語。杜甫詩「踴躍常人情、慘澹苦士志」二さまざまに心をなやますさま、又、甚だしく思考を費やすさまにいふ語。杜甫詩「意匠慘澹經營中」三物すごきさま、又、うすぐらきさまにいふ語。白居易詩「雲容陰慘澹」

さん-だん〔霰彈〕(名) 多數の細かき彈丸を裝塡し、近距離の敵に向かひて發射する一種の彈丸。發射するときは霰の如く飛散す。

さん-だん〔算段〕 手段を講究すること。くめん。くふう。才覺。計畫。膝栗毛五下「府中までいけば、ちったあさんだんする當てもあるから、先づ一文なしで出かけよう」浮世風呂下三「寄るも障はるも、錢を遣ふ算段ばかりで」

さんだん-がさ 三段笠 (名) 武具・馬標又は指物の名。さんがいがさ(三蓋笠)。

さんたん-くわ〔山丹花〕(名) 【植】茜草科、賣子木屬の常綠灌木。幹の高さ三四尺、枝・葉共に對生す。葉は無柄又は稍無柄にして、倒卵形又は倒卵狀長橢圓形、鈍頭又は稍銳頭、基部は楔形をなし、全緣、革質、長さ一寸五分乃至四寸あり。夏季、枝梢に數多の朱紅色又は紅色の鮮美なる花を簇生し、無柄の繖房花序をなして密集す。又、赤・黃のものもあり。果實は小くして圓く、平滑にして、頂に微細なる萼片を具ふ。我が國、臺灣に產し、琉球にても栽培せらる。

さんだん-けうじゅ〔三段教授〕(名) 教授法の三段の區別。卽ち、直觀・總括・應用の稱。

さんだん-すゐり〔三段推理〕(名) 【論】さんだんろんぱふ(三段論法)に同じ。

さんだん-の-かかり 三段係 (名) 【文法】係りの一種。こその係辭を用ふるもの。

さんだん-の-むすび 三段結 (名) 【文法】結びの一種。三段の係りを受け、活用言の第五變化にて結ぶもの。

さんだん-はう〔霰彈砲〕(名) 霰彈をこめてうつ銃砲。

さんだん-ほふ〔三壇法〕(名) 佛語。密教にて、中央に藥師又は不動尊、左に如意輪觀音、右に十二天の三壇を設けて修法すること。類聚名物考佛教七「三壇法。是れにもさまざまの次第有り。まづうちまかせば中央は藥師、左は如意輪、右は十二天なり。禁裏にても江戶の殿にてもその定め也」

さんだん-ろんぱふ〔三段論法〕(名) 【論】大前提・小前提・斷案の三段に排列して推論する論理の方式。例へば、人は死す、孔子は人なり、故に孔子は死す、の如し。三段推理。

さん-ち〔三知〕(名) 人の天分によりて、道を知るに三階級あること。卽ち、生まれながらにして知るものと、學びて後に知るものと、困しみて後に知るものとの稱。中庸「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之一也」

さん-ち〔三智〕(名) 佛語。佛の智の三區分。卽ち、眞如を解する眞智と、無明を覺破する內智と、世事に通ずる外智との稱。

さん-ち〔三遲〕(名) 宴席にて、酒十巡に及ぶまで遲參したる者に、罰杯を科すること。一遲・二遲・三遲の稱あり。後には酒の異名。又、酒宴の稱。西宮記廿、後到「五巡後到著者可行三杯、七巡後到者可行五杯、十巡以上到者可行七杯、一遲不得通風、二遲酒掬架匂、三遲非祿事、措手籌」朗詠「先三遲而吹其花」

さん-ち〔山池〕(名) 庭園のいけ。又、山中のいけ。萬三「山部宿禰赤人、詠故太政大臣藤原家之山池歌」齊書到撝「宅宇山池、京師第一」

さん-ち〔山地〕(名) 山多き土地。

さん-ち〔散地〕(名) 一閒散なる地位。權勢なき位置。唐書郭子儀「乃置散地、非所宜」白居易詩「散地閑居少禍胎」二士卒の散亂し易き場所。孫子「用兵有散地、吾將一其志」史記黥布「兵法、諸侯戰其地、爲散地」注正義曰、魏武帝注孫子曰、卒戀土地道近而易敗散」

さん-ち〔產地〕(名) 其の物品の產出せる土地。又、其の人の出生の地。

さんち 珊 (名) さんちめーとる・の略。(主に大砲の口徑を數ふるにいふ)

さん-ち〔參知〕 あづかり知ること。たづさはること。

さんちーむ (佛 Centime) (名) 佛蘭西國の銅錢の名。ふらん・の百分の一。

さんちぐらむ 瓸 (佛 Centigramme) (名) 瓦(グラム)の百分の一。せんちぐらむ。

さんちめーとる 糎 (佛 Centimetre) (名) 米突(メートル)の百分の一。せんちめーとる。

さん-ちゃ〔散茶〕(名) 一碾(ヒ)きて粉にしたる茶。ひき茶。二煮ばなの茶。ちらし。嬉遊笑覽 三さんちゃぢょらう(散茶女郎)の略。江戶土產咄「近頃より散茶と云ひて、大夫格子より下つ方なる女中あり。大盡なるは揚屋にて參會し、夫れより及ばざるは散茶の二階ざしきにて樂しむ」

さん-ちゃ〔山茶〕(名) 【植】一さざんくわ(茶梅)の異名。二つばき(山茶)の異名。

さん-ちゃう〔山頂〕(名) 山の最も高きところ。山のいただき。山巓。武元衡詩「征途川山頂」

さん-ちゃう〔三挺〕(名) さんちゃうのほし(三挺星)の略。

さんちゃう の ほし 三挺星 さん(參)をいふ、東國の方言。物類稱呼

さん-ぢゃう〔散杖〕(名) 佛具の一。眞言宗にて、加持の時、水を灑ぐに用ふる

杖狀のもの。梅・柳の枝などを以てす。西宮記三、御齋會「眞言僧綱進跪立、加持香水灑水机立二顯密開上置之一數杖香水」宇治拾遺十三「火焰にはかにおこりて庵につく。聖、眠りながら、散杖をとりて、香水にさしひたして四方にそゝぐ」

さんちゃらてん 〔山頂天〕(名) 三十三天の一。たうりてん(忉利天)を見よ。

さんちゃらは 〔三長派〕(名) さんてうは(三鳥派)に同じ。挫日蓮「享保四己亥年日徒の惡僧邪道を敎へ、三長派と號す。程もなく、彼の徒黨生田五郎兵衞等のこらず斬罪・はりつけ等に行はれ、悉く滅亡せり」

さんちゃく 〔參著〕 ㊀まゐりつくこと。先方へ行きつくこと。到著。保元左大臣上「重綱・業宣、白河殿に參著して」㊁【商】さんちゃくばらひ(參著拂)の略。

ざんぢゃく 〔纔著〕 さいぢゃく(纔着)の誤讀。

さんちゃくばらひ 參著拂 (英 Payable at sight) (名)【經】いちらんばらひ(一覽拂)に同じ。

さんちゃくばらひかはせてがた 參著拂爲替手形 (名)【經】いちらんばらひかはせてがた(一覽拂爲替手形)に同じ。

さんちゃくばらひてがた 參著拂手形 (名)【經】いちらんばらひてがた(一覽拂手形)に同じ。

さんちゃくばらひやくそくてがた 參著拂約束手形 (名)【經】いちらんばらひやくそくてがた(一覽拂約束手形)に同じ。

さんちゃくわ 〔山茶科〕(名)【植】つばきくわ(山茶科)の異名。

さんちゃぢょらう 〔散茶女郎〕(名) 昔時、吉原の娼妓の一。うめちゃぢょらうより一等上級なるもの。異本洞房語園「岡より吉原へ來たりし遊女は、いまだはりもなくて、客をふるなどといふ事はなし。されば、いきはりもなくふらずといふ意にて、散茶女郎といひけり。是れは吉原遊女共が時の戲れに、散茶女郎といひしが、いひ止まずして、今に散茶といひもて來たりしなり」

さんちゃづくり 散茶作 (名) 元祿頃以後、改作したる吉原の遊女屋の造り方。風呂屋の家作りを用ひ、局廓を廣く構へ大格子を附け、庭も廣く取りたるもの。洞房語園「其の頃よりさんちゃづくりになりたるか、當時の遊女屋の造り、どれもさんちゃづくりなり」

さんちゅう 〔山中〕(名) 山の中。山間。山內。戰國策韓「韓傉且伏二於山中一矣」史記張良「皆以爲上慢二侮人一、故逃二匿山中一」

さんぢゅう 參頭 (名) 行者のかしらだちたるもの。庭訓往來十月「行者・參頭」古註「參頭、行者頭」

さんぢゅう 〔三重〕 ㊀三つのかさなり。みかさね。みへ。三層。㊁淨瑠璃の節。三段に句切りして結末をつくるもの。て・て・てんといふによりていふ。うかれ三重・六部三重・おくり三重・はやめ三重等あり。㊂芝居の道具建にいふ語。

さんぢゅうだい 〔三重臺〕(名) 臺の三つかさねになりたるもの。賀古敎信七墓廻四「石塔の蓋(フタ)は碎けて、苔蒸せる三重臺に攀ぢ上ぼり」

さんぢゅうちがひだな 三重違棚 (名) 三重になりたる違棚。床の間・書院などの脇に設く。

さんぢゅうわ 三重輪 (名) 紋所の名。

ざんちゅつ 〔竄黜〕 役をおとしりぞけて、遠地に流すこと。宋史蔡幼學「次第彈緻、竄黜尤衆」

さんぢょ 〔三女〕(名) ㊀三人の女の子。㊁三番目の女子。

さんぢょ 〔山女〕(名)【植】あけび(通草)に同じ。

さんぢょ 〔刪除〕 けづりのぞくこと。けづりさること。削除。刪削。

さんぢょ 〔芟除〕 さんじょ(芟鋤)に同じ。

さんぢん 〔三陣〕(名) 陣立てにて、二陣の次にある一隊。盛衰記廿七、黒俣川合戰附矢矧川軍「二陣景家、三陣忠清、三陣盛俊、四陣長綱」太平記八、千種殿京合戰「二陣打ち負くれば、三陣入り替はって、人馬に息を繼がせ」

さんぢん 〔山陣〕(名) 山に陣を張ること。又、其の陣。

さんぢん 〔參陣〕 陣所に參著すること。當代記「大坂表へ可レ令二參陣一由、有二明命一」武家名目抄

さんぢんのべん 參陣辨 中宮・親王・將軍などの宣下ある時、禁中にて行はるる陣の儀式を掌る辨官。

さんづ 〔三途〕 三塗 (名) 佛語。㊀火途と血途と刀途と。即ち、地獄道・餓鬼道・畜生道の稱。三惡趣。三惡道。平家五、勸進帳「痛哉、再歸二三途火坑一、長廻二四生苦輪一」无量壽經「若在二三塗勤苦之處一」㊁三途の川の渡場。冥土の途中。日本振袖始三「三途の空瀨(セツ)を一つ野に、遺す紀念や殘りても、甲斐なき夫婦が立ち歸る」

さんづのかは 三途川 さんづがは(三途川)に同じ。曾根崎心中「三途の川は、せく人もせかるる人もあるまいと」

さんづのせと 三途瀨戶 三惡道に入るべき瀨戶際。卯月潤色上「のがれし賽の河原町、三途の瀨戶の淡路町」

さんづのせぶみ 三途瀨蹈 ㊀三途川のせぶみをすること。㊁あやふきところの探險。

さんづのやみ 三途暗 佛語。冥土。又、冥土に赴くこと。死期の來たること。

さんづ 〔三頭〕 三途 三圖 (名) 馬の臀(シリ)にて、百會(クヒヤ)の後。平家四、橋合戰「足利大おんじやうをあげて、弱き馬をばしもてにたてよ中略水しとまば、さんづのうへに乘りかかれ」太平記十九、青野原軍「馬の三圖・平頸、二太刀切られ」

さんついたち 三朔日 (名) 江戶時代に、正月元日と六月朔日と八月朔日との三つの式日の稱。

さんつう 〔酸痛〕 ㊀うづきいたむこと。疼痛。㊁かなしみいたむこと。謝靈運文「發二酸痛於仁詔一」

さんづがは 三途川 (名) 佛語。極善・極惡にあらざる人の、死して冥土に赴く途中にありといふ川。三つの瀨ありて、生前の造業の如何によりて渡るに別あり。さうづか。みつせがは。さんづのかは。保元義朝幼少弟悉被レ失「死出の山、三途の河をば、誰れか介錯申すべき」

さんてい 〔棧梯〕(名) がけなどにかけわたしたる梯子。盛衰記廿六、木曾謀叛「況や棧梯引き落として、たて籠もらば」

さんてい 〔山亭〕(名) さんさい(山齋)に同じ。王勃詩「山亭涼夜永」

さんてい 〔算定〕 計算して確定すること。みつもること。

さんてい 〔刪定〕 あしき箇所をけづりてよきに定むること。刪除して確定すること。漢書刑法志「若開二後嗣一、不レ若レ刪二定律令一」

ざんてい 〔殘丁〕(名) 殘疾ある壯丁。調を輸するのみにて、庸・雜徭を免ず。東大寺正倉院文書廿六、陸奧國戶籍「意彌子黒麻呂年

廿六、殘丁、和銅元年死」

ざんていでうやく 〔暫定條約〕(名) かりでうやく(假條約)に同じ。

さんていふうたい 〔算定風袋〕(英 Computed tare)(名)【商】風袋の一。貨物賣買の際、其の當事者が契約により、風袋の重量を見積もりて、其の貨物の總重量より差し引くもの。計算風袋。見積風袋。

さんていらたいしゃう 〔珊底羅大將〕(名) 十二神將の一。右に劍、左に鏡を持ち、羊に駕す。

さんてう 〔山鳥〕(名) 山中に棲む鳥。朗詠「谷靜纔聞二山鳥語一」沈佺期詩「山鳥初來猶怯レ囀」

さんてう 〔三鳥〕(名) ㊀料理にて鶴・雉子・雁の稱。㊁古今傳授中の三種の鳥。即ち、喚子鳥・百千鳥・稻負鳥の稱。一に喚子鳥・都鳥・稻負鳥ともいふ。

さんてう 〔三朝〕(名) ㊀正月元日の朝の稱。歲の朝・月の朝・日の朝なるよりいふ。漢書孔光「歲之朝曰二三朝一」㊁其の月の三日。朗詠「春之暮月、月之三朝、天醉二于花一、桃李盛也」㊂三代の朝廷。

さんてう 〔參朝〕 朝廷へ參上すること。參內。國姓爺二「后御迎ひの爲め參朝とこそ奏しけれ」舊唐書太宗紀「參朝之日、宜レ在二本品見任之上一」

さんてうは 〔三鳥派〕 三超派 (名) 日蓮宗の一派。三鳥院日秀を派祖とするもの。江戶時代、邪宗として之を禁斷せり。三長派。御定書百箇條「三鳥派、不受不施類之法を勸め候もの、改宗之事、一三鳥派、不受不施御仕置可レ致由申し候へ共」

さんでうはなかく 三條花角 (名) 紋所の名。

ざんてき 〔殘敵〕(名) のこりの敵兵。うちもらされたる敵兵。

ざんてき 〔殘滴〕(名) のこりのしづく。殘瀝。虞世南詩「殘滴尙懸レ枝」

さんてつまごら (名) よっぱらひをいふ、肥前國の方言。物類稱呼

さんでふき 〔三疊紀〕(名)【地】地質年代の一。中生代の初期にして、砂岩・泥板岩・石灰岩等より成り、哺乳類の始めて出現せし時代。

さんてん 〔山巓〕(名) 山のいただき。山頂。詩經小雅「漸漸之石、維其卒矣」箋「卒者崔巍也、謂二山巓之末一也」

さんてん 〔三天〕(名) 佛語。摩利支天と大黑天と辨財天との稱。

さんてん 〔散點〕 あちこちに散在すること。秦觀詩「沙鷗散點多」

さんでん 〔散田〕(名) 荒廢の地、又は川邊等に耕作したる常稅外の田。

さんでん 〔山田〕(名) 山間の田地。史記楚元王「屛二居山田一」

さんでん 〔三傳〕(名) 春秋の傳の三種。即ち、左氏傳・公羊傳・穀梁傳の稱。文中子「三傳作、春秋散」

さんでん 〔三殿〕(名) さんきやう(三卿)に同じ。

さんでん 〔參殿〕 ㊀御殿に參上すること。㊁人の家を訪ふことの敬語。參館。參堂。

ざんてん 〔慙靦〕 慙愧の色、面に表はるること。慙愧。韓愈文代二張籍一與二李浙東一書「慙靦再拜」

ざんてん 〔讒諂〕 讒言することと諂諛すること。又、人を讒して主君におもねること。國語鄭「讒諂・巧從之人也」

さんと 〔三都〕(名) 我が國の三つの大都會。即ち、京都・東京・大阪の稱。三府。

さんと 〔山徒〕(名) 比叡山延曆寺の僧徒。やまほふし。

さんと 〔山途〕(名) やまみち。魏書裴衍「搖レ策納レ屣、便陟二山途一」

さんと 〔山斗〕(名) たいざんほくと(泰山北斗)の略。泰斗。唐書韓愈「其學行、學者仰レ之、如二泰山北斗一云」

さんど 〔產土〕(名) さんち(產地)に同じ。

さんど 〔酸度〕(名)【化】鹽基の種類によりて、之を中和するに要する酸の量を異にすること。酸の場合に於ける如し。例へば、水酸化なとりうむ・の如きは、其の金屬が酸の水素一原子と置換して鹽を生ずるにより、之を一酸度の鹽基といひ、水酸化かるしうむ・の如きは、酸の水素二原子と其の金屬とが置換するにより二酸度の鹽基といふ如し。

ざんと 〔殘徒〕(名) のこりの徒黨。うちもらされたる徒黨。殘黨。餘黨。

さんどいり 三度入 (名) 小ぢゅうより大なる土器。海人藻芥「鍾はへいかう・二度入・三度入是れ也」狂言地獄聞「閒の物で十杯、三斗入りで十四杯」

さんとう 〔三冬〕(名) 冬季の三箇月。即ち、初冬・仲冬・季冬の稱。太平記四、呉越軍「潛龍は三冬に蟄して、一陽來復の天を待つ」漢書東方朔「年十二學レ書、三冬文史足レ用」

さんとう 〔山東〕(名) 山のひがし。

さんとう 〔山頭〕(名) さんてん(山巓)に同じ。崔顥詩「山頭野火寒多燒」

さんとう 〔山統〕(名) 山脈の系統。山のつづき。

さんとう 〔蠶豆〕(名)【植】そらまめ(蠶豆)の異名。

さんとう 〔山藤〕(名)【植】くまやなぎ(山藤)の異名。

さんどう 〔山童〕(名) 山家の童兒。山家そだちの童子。柳宗元詩「山童隔レ竹敲二茶臼一」

さんどう 〔贊同〕 同意すること。贊成。

ざんとう 〔殘燈〕(名) 消え殘りのともしび。夜あけまできえ殘りたる燈火。殘燭。隋煬帝詩「易レ製殘燈下、鳴レ砧秋月前」

さんとういうびんきょく 〔三等郵便局〕(名) 郵便局の一。特定三等局と通常三等局との別あり。通常三等局は其の集配事務を取り扱ふと否とによりて、集配三等局と無集配三等局とに分かつ。通信官署官制第八條「二等郵便局及三等郵便局の名稱及位置は遞信大臣之を定む」

さんとうきくわんし 〔三等機關士〕(名) ㊀海技免狀の一。其の所有者は湖川港內のみを航行する汽船又は發動機船に限り、船舶職員となることを得るもの。三年以上汽船に乘り組み、機關の運轉に從事し當該船舶職員試驗に合格したる者に交付す。船舶職員法第三條「三等機關士」㊁機關士の一。前項の海技免狀を有するもの。

さんとうさい 〔山東菜〕(名)【植】十字花科、蕓薹(アブラナ)屬の二年生草本。あぶらなの一品種。全形ほぼ同じけれども、根葉は圓頭短濶にして、缺刻齒牙等無く、梢葉また短濶なり。嘉永年間舶載せるものにして、食用に供す。

さんとうしゅけい 〔三等主計〕(名) 主計の一。最下級にて、少尉相當官。

さんとうせいぢ 〔三頭政治〕(羅 Triumvirat)(名) 羅馬の共和時代に行はれたる一種の政治組織。三人鼎立して政權を執るもの。

さんとうな 山東菜 (名)【植】さんとうさい(山東菜)の異名。

さんとう-はくきん〔三頭膊筋〕(名)【醫】肩胛部より起こり、尺骨に終はる筋肉。前膊を伸ばす作用をなす。

さんとう-れき〔三統曆〕(名) 支那漢の成帝の時、劉歆の作りたる曆。宋書曆志序「向子歆作二三統曆一」

さんど-がさ〔三度笠〕(名) 深く額を隱すやうにつくりたる菅笠。貞享の頃、三度飛脚などのかぶりたるもの。大深。冥途飛脚上「商ひ功者、駄荷積もり、江戸へも上下三度笠」

(さがどんさ)

さん-とく〔三德〕(名) 一智と仁と勇との稱。三達德。太平記十六、正成兄弟討死「智・仁・勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古へより今に至る迄、正成程の者は未だ無かりつるに」二正直と剛と柔との稱。書經洪範「三德、一日正直、二日剛克、三日柔克」三天德と地德と人德との稱。大戴禮大代「有二天德一、有二地德一、有二人德一、此謂二三德一」四佛語。法身德と般若德と解脫德との稱。法華經科註「圓二成三德一也」五三種の德用。「三德なべ」六紙入の一種。賤苧環「三德と云ふもの流行り出て、鼻紙袋の通り仕立て、片方は脇入れなしに口附けて、薄くして、書附・楊枝さしなどを入れ、中に鼻紙をはさむやうにしたる物なり。今も猶是れを用ふ。口の引懸は脇入れのなき方より紐を附け、ぼたんがけにして、しめ置きたり」七とうしんおさへ(燈心押)をいふ、筑後國久留米の方言。物類稱呼

さん-どく〔三毒〕(名) 佛語。人の性命の害毒となる三つの事。即ち、貪・瞋・痴の稱。盛衰記十八、文覺高雄勸進「本有心蓮之月光幽而、未レ顯二三毒四慢之大虛一」大藏法數「三毒。一貪、二瞋、三癡」

さん-どく〔慘毒〕一いためそこなふこと。むごたらしき害毒を加ふること。漢書陳湯「郅支單于、慘二毒於民一」二いたみかなしむこと。曹植文九愁賦「嗟二離思之難一レ忘、心慘毒而含レ哀」

ざん-とく〔慙德〕(名) 德の古人に及ばざるを慙づること。書經仲虺之誥「成湯放二桀于南巢一、惟有二慙德一」左傳襄公廿九年「見下舞二韶濩一者上曰、聖人之弘也、而猶有二慙德一、聖人之難也」

ざん-とく〔竄匿〕にげかくるること。のがれひそむこと。竄伏。易林「狐狸雉兎、畏レ人逃去、分レ首竄匿、不レ知二所處一」陳造詩「田廬有二笑歌一、魑魅亦竄匿」

ざん-とく〔讒慝〕陰險にして人を讒言すること。左傳桓公六年「所レ謂馨香無二讒慝一也」

さん-どくくわい〔三讀會〕(名)【法】三次の讀會。即ち、議案の大體の討議、逐條の審議、及び全體の可否決の稱。議院法第二十七條「法律の議案は三讀會を經て之を議決すへし、但し政府の要求若は議員十人以上の要求に由り議院に於て出席議員三分の二以上の多數を以て可決したるときは三讀會の順序を省略することを得」

さんど-ぐり〔三度栗〕(名)【植】しばくりの類。一年に三度みのるもの。

さん-どしより〔三年寄〕(名) 江戸時代、町年寄を世襲せし三家。即ち、奈良屋・樽屋・喜多村の稱。

さんど-ささげ〔三度大角豆〕(名)【植】いんげんまめ(菜豆)の異名。

さんど-まめ〔三度豆〕(名)【植】さゐんどう(荷蘭豆)の異名。一年に三度作るよりいふ。

さんとめ〔棧留 聖多默〕(名) 一さんとめじま(棧留縞)の略。二さんとめがは(棧留革)の略。萬金產業袋四、衣服類「棧留島(サントメ)聖多默(サントメ)幅同斷、丈三丈二三尺、もやら赤絲入の立てじまを、俗に奧島といへり」

さんど-め〔三度目〕(名) 江戸時代、大名方にて夜食の稱。俚言集覽

さんとめ-がは〔棧留革〕(名) 西印度國さんとめ・より渡り來たれる皺文あるなめしがは。古渡(コワタリ)・中渡(ナカワタリ)・大絞(オホシボ)・小絞(コシボ)・湯入(ユイリ)等の種類あり。今は我が國にても製す。

さんとめ-じま〔棧留縞〕(名) 一もと西印度國聖多默(サントメ)より渡來せし縞織の厚く美しき絹布。後には西洋より輪入せり。たうざんとめ。たうざん。大猷院殿御實記四十「算留縞二十卷」二織物の縞柄。竪縞にて、赤又は淺黃のまじれるもの。

さんとめ-ばり〔棧留針〕(名) ぬひばりの一種。普通の木綿針より少し長きもの。

さんとり-さう (名)【植】菊科、さんとりさう屬の一年生草本。莖の高さ一二尺、毛茸を生じ、よく分枝す。葉は橢圓狀披針形、質薄く、下部の葉は葉柄を有し、上部の葉は葉柄無くして、葉脚莖を抱く。夏季、黃色の花を開き、頭狀花序に排列す。歐羅巴の原產。

さんどゐっち (英 Sandwich)(名) 〔さんどゐっち伯の發明なるにより出づ〕一種の食品。薄く切りたる麵麭(パン)の兩片の中に肉片を挾みたるもの。

さんど-をけ〔三斗桶〕(名) 三斗入る桶。宇治拾遺三「こし折れたる雀、三斗桶にとり入れて」

さんな (名) 拳にて三の稱。冥途飛脚中「拳の手品の手もたゆく、ろませ・さい・とうらい・さんな」

さん-な〔山柰〕(名)【植】ばんうこん(三辣)の異名。

さん-ない〔山内〕(名) 一山のなか。山中。山間。唐書高儉「充二塞山內一」二寺の境內。

ざん-ない〔慙無〕(形口語) 無慚(ザンムシ)なり。見るに堪へず。百合若大臣野守鏡三「亭主は御前へ丸裸でざんない形やと云ひければ」傾城島原蛙合戰三「木の葉を著たる荒法師、雲に乘じ、口より虹を吹く繪像、おお、ざんない佛樣や」

ざんなう-さけ-た (句) くたびれる(草臥)をいふ、伊勢國の方言。物類稱呼

さんなき-ぐるま〔三泣車〕(名) 荷車の一。車輪小さく、梶棒長く、車臺の後方に鐵欄をつけたる小車。商家の丁稚などの荷物を運搬するに用ふ。

(まるぐきなんさ)

さん-なく〔三惡〕(名) 佛語。さんあく(三惡)の音便。

さん-なくしゅ〔三惡趣〕(名) 佛語。さんあくしゅ(三惡趣)の音便。

さん-なくだう〔三惡道〕(名) 佛語。さんあくだう(三惡道)の音便。

さん-なふ〔山衲〕(名) 山寺の僧。山僧。

さん-なん〔三男〕(名) 一三人の男子。後漢書折像「有二三男兩女、孫息盈レ前」二三番目の男の子。江濃記「道三は子息新九郞が爲めにうたれける中略三男喜平次と云ふ、是れは當腹なり」

さん-なん〔山南〕(名) 山のみなみ。書經禹貢「至二于岳陽一」傳「山南曰レ陽」

さん-に〔散位〕(名) さんゐ(散位)の音便。

さんに-さんくわくろむ (英 chromium sesquioxide)〔三二酸化――〕(名)【化】酸化くろむ・に同じ。

さん-にち〔三日〕(名) さんじつ(三日)に同じ。

さん-にち〔散日〕(名) 佛語。法會の

結願(ケチグワン)の日。

さん-にふ〔山入〕(名) 鷹の頭部の名所。たか(鷹)を見よ。

さん-にふ〔參入〕まゐること。入り來ること。參上。盛衰記卅九、長光寺「來詣・參入之類、散レ花合レ掌之輩」用明天皇職人鑑二「手勢・手勢を引率し、著到のため參入す」

さん-にふ〔算入〕かぞへいるること。數にいるること。加入。

ざん-にふ〔竄入〕一にげこむこと。かくれはひること。二誤りて入りまじること。

さん-によ〔三女〕(名) さんぢよ(三女)に同じ。

さん-にょう〔算用〕(名) さんよう(算用)の音便。

さん-にょらい〔三如來〕(名) 信濃善光寺の阿彌陀如來と、嵯峨清涼寺の釋迦如來と、京都因幡堂の藥師如來との稱。壒嚢抄十二「三如來とは何。善光寺阿彌陀・嵯峨釋迦・因幡堂の藥師也」

さんに-れう〔散位寮〕(名) さんゐれう(散位寮)に同じ。

ざん-にん〔殘忍〕殘酷なることを忍びてなすこと。なさけを知らぬこと。無慈悲。史記吳起「起殘忍薄行之人也」

ざん-にんき〔殘任期〕(名) のこりの任期。殘任期間。市制第二十五條二項「殘任期の最長き前任者」

ざんにん-きかん〔殘任期間〕(名) 殘りの任期間。殘任期。衆議院議員選舉法第七十九條「補闕議員は其の前任者の殘任期間在任す」

さんにん-ごし〔三人輿〕(名) さんまいがた(三枚肩)に同じ。三十二番歌合こしかき「三人輿にてさへ、遠路はかなひ難きに、さし合せの苦行あぢきなくぞ侍る」

さんにん-ばり〔三人張〕(名) 三人にて弦を張る程の强弓。二人にて弓を押したわめ、一人これに弦をかく。四人張・五人張などいふもこれに同じく、一人は弦をかけ、他は弓をたわむ。參保元山田小三郞「弓は三人ばり、やつか十三束、さげはりをも射んと思ふものなりけるが」

さん-ぬる〔去〕(連體)〔さりぬる(去)の音便〕過ぎたる。前の。平治信賴信西不快「去んぬる保元三年」

ざん-ねい〔讒佞〕佞辯を弄して能く人を讒言すること。又、其の人。論衡「讒以レ口害レ人、佞以レ事危レ人」後漢書傳燮「速行二讒佞放殛之誅一」

さん-ねつ〔三熱〕(名) 佛語。蛇龍の受くるといふ三つの熱き苦惱。一は熱風・熱砂の皮肉・骨髓を燒くこと、二は惡風の起こりて居所・衣飾等を失ふこと、三は諸龍娛樂の時、金翅鳥の其の居所に入りて龍の子を食ふこと。轉じて龍以外のものにもいふ。太平記廿九、師直怪異「あら熱や堪へがたや、いで三熱の焰さまさんとて、閼伽井に飛び漬かれば」謠葛城「なほ三熱の神ごころ」

さん-ねつ〔散熱〕熱を放散すること。唐明皇詩「廚人嘗二散熱之饌一、酒正行二逃暑之飮一」

ざん-ねつ〔殘熱〕(名) 名殘りのあつさ。殘暑。白居易詩「早陰江上散、殘熱日中來」

さんねつ-はんおう〔散熱反應〕(名)【化】熱を發生する反應。即ち、酸とあるかり・の中和又は普通の燃燒の場合等の如く、變化に際して熱を發生する反應。

さんねつ-ぶんかい〔散熱分解〕(名)【化】分解に際して熱を發生する化學變化。此の如き分解をなす物質は、一旦分解を始むれば、外部より熱を與ふることなくして、其の分解は續いて進行するものなり。

ざん-ねん〔殘年〕(名) 一のこりのよはひ。死期に瀕したる年。晚年。餘命。杜甫詩「短衣匹馬隨二李廣一、看レ射二猛虎一終二殘年一」韓愈詩「本爲二聖明一除二弊事一、肯將二衰朽一惜二殘年一」

ざん-ねん〔殘念〕一念の殘ること。未練あること。殘り多きこと。遺憾。大藏流狂言萩大名「はて、是れ程までに思し召し立たせられて、御出でなされぬと申すは、殘念な事でござる」二くやしきこと。くちをしきこと。無念なること。遺恨。

さんねん-き〔三年忌〕(名) 三年目の回忌。大祥忌。三回忌。梵舜日記慶長十三年七月六日「宗喜大姉三年忌雖レ爲二來月一、當月取越」

さんねん-ごめ〔三年米〕(名) 前前年にとりたる古米。日本武尊吾妻鑑三「我れはひね米・三年米の、白み兼ねたる心から」

さんねん-だけ〔三年竹〕(名) 三年を經たる竹。竹は三年目に切るをよしとするより、固く强き竹にいふ。保元白河殿義朝夜討「三年竹の節近なるを少し押し磨いて」用明天皇職人鑑二「三年竹の八つ割りにて、汝が五體に七つ輪を入れ中略なし物桶にしてくれん」

さんねん-の-も〔三年喪〕(句) おやの喪。支那にては其の期三年なるよりいふ。論語陽貨「夫三年之喪、天下之通喪也」

さんねん-ふさがり〔三年塞〕(名) 陰陽家にて、大將軍といふ星の方位に當たるときは、何事を爲すにも愼むべしといふこと。下文を見よ。假名曆略註「大將軍。是れもと西方の星にして、金の精なるが故に、萬物を殺伐する事を主る。則ち俗家に所謂三年塞是れ也。若し此の方を犯し用ふれば、三年の內に死を受くるの災ありといふ。特に百日の內を大に愼むべし」

さんねん-みそ〔三年味噌〕(名) 三年前のみそ。其の味ひのからきより、轉じて、吝嗇なること、又、勘定だかきことなどにいふ。

さんねん-みつき〔三年三月〕(句) 永き歲月をいふ語。浮世床下「酒屋の門に三年三月お立ち被レ遊ても、飮(ノ)らぬ酒には醉はぬ道理」

さんねん-もの〔三年物〕(名) 一魚類などの生まれてより三年間も經たるもの。二【動】鯊(セ)の一種。

さん-の-あをり〔三泡折〕(名) 水戰の語。船尾の稱。

さん-の-いた〔三板〕(名) 兜の錣又は鎧の袖などの三枚目の板。保元白河殿攻落「淸國が兜の三の板より直違ひに」太平記卅一、武藏野合戰「義興甲の錣、袖の三の板切り落とされ」

ざん-の-いを (名)【動】じゅごん(儒艮)の異名。

さん-のう〔山王〕(名) さんわう(山王)の音便。

さん-の-かっせん〔三合戰〕(名) いちばんかっせん(一番合戰)を見よ。

さん-の-かはり〔三替〕(名) 昔時、三月に興行する芝居の稱。京阪の方言。劇場新話上「芝居年中行事。三月三日新狂言に替はる。尤も曾我狂言二番目也。是れを三の替りといふ。顏見せ狂言を始めとして、春狂言は二の替り也。夫れ故此の替りを三の替りといふ也」守貞漫稿後集二遊戲追補「三月興行。俗に三月芝居と云ふ。蓋京阪にては三の替りと云ふ。江戸にて三月芝居と云ふ」

さん-の-きど　三城戸　(名)　第三の木戸口。つめのきど。太平記十八、金崎城落「よからんずる敵と倶に差し違へて死なんとて、五十餘人の兵共、三の木戸を同時に打ち出で」

さん-の-くは　鏟鍬　(名)　くさけづり(草削)に同じ。和漢三才圖會卅五農具「鏟サン鍬クワ音產」

さん-の-くるわ　三廓　(名)　さんのまる(三丸)に同じ。甲陽軍鑑廿九「三のくるわに長坂左衞門、是れは長閑ことなり」

さん-の-しやうじ　三掌侍　(名)　明治二年十月十二日に定められたる第三等の掌侍。即ち、二の掌侍の下、新掌侍の上なる掌侍。

さん-の-ぜん　三膳　(名)　本膳より第三の膳。傾城酒呑童子四「朝晩王樣のあがるやうな二の膳・三の膳」

さん-の-つづみ　三鼓　(名)　くれつづみ(腰鼓)に同じ。和名四、鼓「腰鼓俗云三乃豆豆美」

さん-の-どう　三胴　(名)　船の胴の名所。どう(胴)五を見よ。

さん-の-まつ　三松　(名)　能舞臺に、橋掛(ハシガカリ)の前面にある松。舞臺に最も遠きもの。かかりのまつ(懸松)。

さん-の-まる　三丸　(名)　二の丸を繞れる外郭。まる(丸)三を見よ。信長記一下、小清水籠山城開退「敵・味方入り亂れ、散散に切り合ひ撞き台ひけるが、終ひに三の丸迄押し詰め、猶息をもつかせず攻めければ」元和日記「江戸の城三の丸、虎口石壁を築く」

さん-ば　三番　(名)　さんばそう(三番叟)の略。

さん-ば　散飯　(名)　さば(散飯)に同じ。

さん-ば　產婆　(名)　產婦を幇助して其の分娩を安全ならしむるを業とする婦人。とりあげばば。穩婆。助產婦。產婆規則「產婆」經國大典「產婆則給料」蓐母。

ざん-ぱ　殘葩　(名)　散り殘りの花。殘花。殘英。柳宗元詩「貯愁聽夜雨、隔淚數殘葩」

ざん-ぱ　殘破　そこなひやぶること。こはるること。

さん-ぱい　山背　(名)　山のうしろ。山かげ。山後。桂海虞衡志「穿出山背」

さん-ぱい　三拜　⊖三度繰り返して禮拜すること。用明天皇職人鑑三「ああ忝しと三拜す」國語楚「湫舉降三拜」⊜佛家にて、身・口・意の三業の歸敬を表し、三度繰り返して拜跪すること。

さんぱい　きうはい　三拜九拜　⊖三拜の禮と、九拜の禮と。⊜幾度となく禮拜すること。⊜書翰などにて、極めて厚き敬意を表するに用ふる語。

さん-ぱい　參拜　神社・佛閣に參り拜むこと。參詣。明治三十八年十二月內務省令第二十二號第二條「神佛の參拜若は神樂祈禱禁厭の請求」

さん-ぱい　酸敗　胃中に停滯したる食物の、腐敗して酸(ス)くなること。

さん-ばい　三盃　(名)　さんばいず(三盃酢)の略。

ざん-ぱい　殘盃　(名)　飲み殘りの杯の酒。太平記一、資朝俊基關東下向「同官も肥馬の塵を望み、長者も殘盃の冷に隨ふ」杜甫詩「殘盃與冷炙、到處潛悲辛」

ざんぱい　れいかう　殘杯冷羹　「飲み殘りの盃の酒と、つめたくなりたる吸物との義」馳走の殘り物。轉じて、冷遇せらるる時の粗末なる飲食物の稱。

ざんぱい　れいしや　殘盃冷炙　「飲み殘りの盃の酒と、つめたくなりたるやき物との義」前條に同じ。顏氏家訓雜藝「人不可見役勳貴、處之下座、取殘杯冷炙之辱」

ざん-ばい　殘梅　(名)　散り殘りの梅花。釋貫休詩「晚風吹不盡、江月落殘梅」

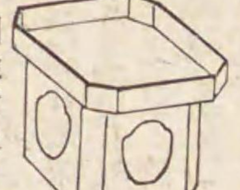
さんぱい-えき　酸敗液　(名)　胃中に停滯せる食物の、腐敗して生ずる酸味の液。

さんばい-くわ　山梅花　(名)【植】ばいくわうつぎ(山梅花)の異名。

さんばい-ず　三盃酢　(名)　味醂又は酒と醬油と酢とを等分に割りたるもの。物を漬(ツ)して食ふに用ふ。

さん-ぱう　山砲　(名)　山地の戰爭に使用する火砲。野砲より小形にて、場合により砲身・砲架・車輪等を分解して各別に馬などにて運搬するを得るもの。

さん-ばう　三方　(名)　⊖三つの方角。⊜檜の白木にて造れる方形の折敷に、三方に孔ある臺を附けたるもの。古代にては食事する臺に用ひ、今は神前の供物を載するに用ふ。國姓爺後日合戰二「見苦しき土の盃中略三方取って突き除けたり」


(さんばう二)

さん-ぽう　三報　(名)　佛語。現報・生報・後報の稱。現報は現世に善惡の行爲をなして現世に其の報を受くること、生報は現生に善惡の行爲をなして來生に其の報を受くること、後報は過去生に善惡の行爲をなして現生又は未來生に其の報を受くること。

さん-ぱう　散亡　ちりうすること。ちりうせたるもの。晉書「收集散亡、甚有惠政」蘇軾詩「百金購書收散亡」

さん-ぱう　訕謗　そしること。譏ること。あしざまにいふこと。讒謗。誹謗。北史賈彝「坐訕謗繫獄」

ざん-ばう　讒謗　あしざまにそしること。誹謗。訕謗。魏志王烈傳注「朋黨之人、互相讒謗」

ざん-ぱう　殘亡　⊖やぶれほろぶること。敗亡。敗滅。滅亡。隋書宇文愷「訪通議于殘亡、購冬官于散逸」⊜やぶれてにげうすること。

ざん-ぱう　殘暴　殘酷にして亂暴なること。

さんばう-がくにん　三方樂人　(名)　中古以降、豐原・多・狛・大神・安倍・中原等の諸家の樂人の、京都にありて禁中に奉仕するものと、奈良及び天王寺に住して其の寺社に專屬するものとの總稱。諸家家業記「南都天王寺、京方三方之樂人共、都べて四辻家之支配にて、每月日を定め、宅に於いて、三方之樂人被樂稽古有之」狛氏新錄「一、禁裏三方樂人之事」

さんばうがた-きつかふみつはなびし　三方形龜甲三花菱　(名)　紋所の名。三龜甲崩。

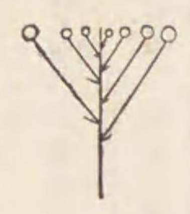
さんばう-き　三紡機　(名)　そばうき(粗紡機)に同じ。

さんばう-きふだい　三方及第　(名)　三方樂人の子弟にて、課試に當選したること。樂所日記「廿九日丁酉三方及第中略十月十四日庚戌三方及第付不參」

さんばう-ぎん　三寶銀　(名)　三寶丁銀と三寶豆板銀との總稱。みつはうぎん。みつはうじぎん。貨幣祕錄「寶永七年庚寅七月永字銀を改む、寶字の極印三つあり、是れを三寶銀といふ。享保六年辛丑十二月通用止む」寶曆集成絲綸錄六廿「三寶銀百目に付、代り銀四十四匁八分」金銀御吹替次第一吹「三寶銀は三寶銀何百目」

さんばう-くわじよ　繖房花序　(名)【植】植物學上の用語。總狀花序の一變態。其の花梗は下部のもの程長くして、殆ど一平面に花を排列するに至りしもの。

さんばう-じやう　繖房狀　(名)【植】植物學上の用語。花穗の一にして、一の中軸の周圍に花梗を出だし、下方の花梗は次第に長く、上方の花梗は次第に短くして、上面は一樣に平かになりたるもの。


(さんばうじやう)

さんばうじろ-の-かぶと　三方白兜　(名)　かたしろのかぶと(片白兜)を見よ。

さんばう-ぜん　三方膳　(名)　三方形の膳。狂言文藏「三方ぜんには砂糖・羊羹」

さんぱう-たい　山砲隊　(名)　山砲を使用する軍隊。

さんぱう-ちやうぎん　三寶丁銀　(名)　寶永七年四月より正德元年まで、江戸幕府の發行せし丁銀。面に寶の字の極印三つあり。縱二寸五分・橫一寸、重量三十二匁八分。品位は百分中、約銀三十二分、銅六十八分。享保七年其の通用を廢せらる。大日本貨幣史六「三寶丁銀」

さんばう-づな　三方綱　(名)　陣立ての名。籾井日記池上陣敗北「是れ程の四方綱・三方綱の備へに、取り逃がし候事」

さんぱう-まめいたぎん　三寶豆板銀　(名)　寶永七年四月より正德元年まで、江戸幕府の發行せし豆板銀。面に寶の字の極印三つあり。縱八分・橫八分五厘、重量七匁五分。品位は百分中、約銀三十二分・銅六十八分。享保七年其の通用を廢せられたり。大日本貨幣史六「三寶豆板銀」

ざんばう-りつ　讒謗律　(名)　讒謗の罪に關する刑律。

さん-はかせ　算博士　(名)　古昔の大學寮の職名。算術の敎授を掌るもの。職員令「大學寮中略算博士二人掌敎算術」全唐詩話「號爲算博士」

さんばがは-けい　三波川系　(名)【地】關東地方に發達し、太古代の地層と認定せらるる一地層。種種の片岩より成る。

さんば-かり　三羽雁　(名)　紋所の名。

さんば-かりがね　三羽雁　(名)　紋所の名。三羽飛び雁金。三つ飛び雁。三つ飛び雁金。

さん-ぱく　三白　(名)　正月三箇日に降る雪。西北農諺「要宜麥見三白」

さんぱく-さう　三白草　(名)【植】かたしろぐさ(三白草)の異名。

さんぱくさう-くわ　三白草科　(名)【植】かたしろぐさくわ(三白草科)の異名。

さんぱく-ちく　三白竹　(名)【植】くまざさ(熊笹)の異名。

さんば-げふ　產婆業　(名)　產婆の營業。產婆規則第十五條「產婆業の禁止又は停止」

ざんば-けん　斬馬劍　(名)　馬を斬る銳利の劍。漢書朱雲「臣願賜尙方斬馬劍」

さん-ばし　棧橋　(名)　人又は貨物を船に上下せしむるために、岸より水上に突き出だしたる木造の橋。

さんばし-げふ　棧橋業　(名)　棧橋を設備して、其の使用者より報酬を受くる營業。營業稅法第一條十號「棧橋業」

さんば-しけん　產婆試驗　(名)　產婆業を許すに足る學術・技藝の有無を試るため、地方長官の擧行する試驗。學說試驗と實地試驗とに分かち、學說試驗に合格したるものにあらざれば、實地試驗を受くることを得ざるものとす。產婆試驗規則「產婆試驗」

さんばし-れう　棧橋料　(名)　船舶の繫留又は貨物の積卸し等にて棧橋を使用せる者が、棧橋の所有者に支拂ふ料金。

さんばし-わたし　棧橋渡　(名)【商】賣買せる貨物の受渡しを、其の到達港の棧橋にてなすこと。

さんば-そう　三番叟　(名)　⊖猿樂にて翁の曲に出づる老人。黑き面をかぶりて舞ふもの。淀鯉出世瀧德上「三番叟も高砂も、皆猩猩の亂れかと思ひますとぞ笑ひける」⊜芝居にて序幕の前に祝儀として行ふ舞。⊜物事の手はじめ。序幕。

さん-ぱち　三八　(名)　⊖每月の三と八との數に當たる日。即ち、三日・八日・十三日・十八日・二十三日・二十八日の稱。佛祖統紀釈新「乃於福源創淨土院、造像栽蓮、月三八集道俗繫念」同定國「月三八集僧俗、就淨土院諷觀經念佛」⊜昔時、遊廓にて、其の階級の、大夫と天神との閒にありし遊女の稱。其の玉代三十八匁なりしよりいふと。色道大鑑

さんはち-やうじ　(名)【植】せんじゆぎく(萬壽菊)の異名。

さん-ぱつ　散髮　⊖ちらしがみ。亂髮。後漢書袁閎「閎遂散髮絕世」楊雄賦「升崑崙以散髮兮、踞弱水以濯足」⊜ざんぎり。斬髮。

さん-ばつ　傘伐　舊林を、閒を置き漸次に斬伐して日光の透るやうにし、飛散せる種子より生じたる稚樹の生長するをまちて皆伐採し、十年乃至十五年にて森林を更新すること。

ざん-ぱつ　斬髮　⊖髮を刈ること。⊜ざんぎり。散髮。半日閑話三「非人共儀は髮を束ね候義、一向不相成、斬髮に而、手拭之義、暑氣寒風雨之節凌ぎ之爲被候共、天窓江卷き附け、斬髮を不隱樣、丈八寸を限り、手拭持ち候事」

ざん-ばつ　斬伐　⊖伐(キ)ること。⊜きり殺すこと。討伐。誅伐。詩經小雅「斬伐四國」漢書尹齊「斬伐不避貴勢」

ざん-ばつ　殘伐　むごたらしく征伐すること。國語吳「將殘伐越國」

ざんぱつ-てん　斬髮店　(名)　次條に同じ。

ざんぱつ-や　斬髮屋　(名)　髮を刈るを營業とする店。又、其の人。とこや。

さんば-とびかりがね　三羽飛雁　(名)　紋所の名。さんばかりがね(三羽雁)に同じ。

さん-ぱふ　算法　(名)　計算する法。算術。北史馮熙「尤明算法、爲算術三卷」

さんば-めいぼ　產婆名簿　(名)　產婆業を營む者を登錄するため、地方廳に備ふる名簿。この名簿に登錄を受けたる者にあらざれば、產婆の業を營むを得ざるものとす。產婆規則第二條「產婆名簿」產婆名簿登錄規則「產婆名簿」

さん-ばやし　(名)　昔時、美濃にて、正月に、肩衣を著、大小の刀をさし、人家の前に立ちて、其の年の大小の月の數、吉凶などの事をいひてあるきしもの。嬉遊笑覽

さん-ぱん　山阪　(名)　やまさか。漢書鼂錯「上下山阪、出入溪澗」

さん-ぱん　杉板　三板　(名)　てんまぶね(傳馬船)に同じ。

さん-ぱん　散飯　(名)　さば(散飯)に同じ。

さん-ぱん　散判　(名)　奉公人口入を業とする者にあらずして、多人數の奉公人の受人となりて判を捺すもの。撰要集法度「近來兎角番組人宿共の外、散判・蔭判

と唱へ、組合等にも無レ之、多人數奉公人之受けに立ち、人宿に紛敷き自儘之渡世致し候もの有レ之、不埒之事に候」

さん-ぱん〔餐飯〕 めしをくふこと。喫飯。杜審言詩「疆場及二無事一、雅歌而餐飯」

さん-ばん〔算盤〕（名） そろばん（算盤）に同じ。養新錄「古人布レ算以レ籌、今用二算盤一」

ざん-ぱん〔殘飯〕（名） 食ひ殘りの飯。

さん-ばんがしら 三番頭（名） 江戸時代、小性組・書院番・大番の頭の稱。

さん-はんきくわん〔三半規管〕（名）【醫】內耳の迷路の一部をなす上・下・外の三箇の半圓形の小管。身體、殊に頭部の廻轉を知覺す。

さん-はんげつべん〔三半月瓣〕（名）【醫】心臟の各左右兩室と肺動脈（右室）・大動脈（左室）との境にある瓣。血液の逆流を防ぐ。

さんばん-しゆ〔算盤珠〕（名） そろばんだま（算盤珠）に同じ。輟耕錄「稍久曰二算盤珠一、言二撥レ之則動一」

さんばん-て 三番手（名） いちばんて（一番手）を見よ。

さんばん-どり 三番鳥（名） 夜明けに鳴く雞。又、其の時刻。

さんばんめ-もの 三番目物（名） かづらもの（鬘物）を見よ。

ざんぱん-や 殘飯屋（名） 學校又は軍營などの殘飯を販賣する家。又、其の人。

さん-ぴ〔三碑〕（名） 日本にて有名なる三つの古碑。即ち、下野國那須國造の碑と、上野國多胡の碑と、陸前國多賀城の碑との稱。

さん-ぴ〔爨婢〕（名） 炊事をする下婢。めしたき女。みづしめ。學蔀通辯「則天下之傭奴・爨婢・黥髠・盜賊、亦匍匐而歸レ之矣」

さん-ぴ〔散飛〕 とび散ること。飛散。散亂。白居易詩燕「舉レ翅不二回顧一、隨レ風四散飛」

さん-び〔贊美〕讚美 ほめそやすこと。讚賞。賞讚。晉書衛恒「竭二愚思一以贊二其美一」

さん-び〔酸鼻〕 甚だしくいたみかなしむこと。漢書傅宣「父子夫婦不レ能二相保一、誠可レ爲二酸鼻一」後漢書公孫述「聞レ之可レ爲二酸鼻一」

ざん-ぴ〔殘碑〕（名） 廢殘せる石碑。又、殘りたる石碑。高啓詩「風雨斷レ蘚埋二殘碑一」

さんび-か〔讚美歌〕（英 Hymn）（名） 耶蘇教にて神・救世主の德を讚美する歌。

さん-ぴつ〔算筆〕（名） 計算と筆蹟と。算術と習字と。浮世床下「算筆もよし、何ひとつ如在ねえといはれる人が」

さん-ぴつ〔三筆〕（名） 本邦の三人の能筆。即ち、嵯峨天皇・橘逸勢・僧空海の稱。

さん-ぴやう〔讚評〕 稱讚せる評論をなすこと。

さん-びやうし〔三拍子〕（名） 一 三種の樂器にて拍子をとること。二 三種の條件。

さんびやうし そろふ 三拍子揃 三種の條件を悉く具備す。何もかも完全に具はる。若風俗八「かたち見よけれども心疎し、或ひは賢くて藝にならず、さんびやうしに揃ひ兼ね」

さん-びやく〔三百〕（名） 一 數多きことにいふ語。中庸「禮儀三百、威儀三千」 二 次條の略。

さんびやく-だいげん〔三百代言〕（名） 一 辯護士の資格なくして、ひそかに人の訴訟又は談判の事を引き受くるを業とするもの。もぐり代言。二 辯護士を卑しめていふ語。

さんびやく-だな 三百店（名） 屋賃の極めてやすき家。了阿歌「世はやすき法の道とてあのくたら、三百店にすみぞめの袖」語彙

さんびやく-づら 三百面（名） 品格のなき顏。

さん-ぴん 三一（名） 一 雙六などにて、二箇の采に、三の目と一の目との出づること。二 さんぴんやっこ（三一奴）の略。

さん-ぴん〔三品〕（名） 一 繪畫の三つの品位。即ち、神品・妙品・能品の稱。圖繪寶鑑 二 士の三つの品位。即ち、道德に志すと、功名に志すと、富貴に志すとの稱。

さんぴん-ざむらひ 三一侍（名） 次條に同じ。

さんぴん-やっこ 三一奴（名）〔一年に僅か三兩と一人扶持とをあてがはれ居る奴の義〕昔時、祿の薄き若黨・侍などをいやしめていひし語。三石さん。さんぴん。

さん-ぶ〔三府〕（名） 我が國の三つの都府。即ち、東京・京都・大阪の稱。三都。三大都。

さん-ぶ〔三賦〕（名） 三種の賦課。即ち、租・庸・調の稱。群書拾唾「唐三賦、租庸調」

さん-ぷ〔山父〕（名） さんし（山子）を見よ。

さん-ぷ〔爨夫〕（名） 炊事をする男。めしたきをとこ。

さん-ぷ〔爨婦〕（名） 炊事をする婦人。めしたきをんな。蘇軾詩「闕レ食惟㦜二爨婦知一」

さん-ぷ〔產婦〕（名） 產月（ウミヅキ）の婦人。產後尙は產蓐にある婦人。うぶめ。

さん-ぷ〔蠶婦〕（名） 養蠶をなす婦人。詩疏纂要「蠶事方興、蠶婦以爲レ候」

さん-ぷ〔參府〕 江戸時代、大小名の江戸に參觀せしこと。

さん-ぷ〔散布〕 ちりしくこと。又、ちらしくこと。まきちること。又、まきちらすこと。韓愈詩「攢生猶有レ際、散布忽無レ垠」

ざんぶ（名、副） 物の水に投ぜられし時の音にいふ語。ざぶり。ざんぶり。

ざん-ぶ〔殘部〕（名） のこりの部分。のこれる部分。

ざん-ぶ〔讒誣〕 しこづりしふること。讒謗。歐陽修詩「讒誣不レ須レ辨、亦止百年間」

さんぶいち-ぎん 三分一銀（名）【化】銀三、あるみにうむ九七の合金。銀よりも硬く、細工容易にして、美なる光澤を有し、硫化水素等によりて異變せず。

さん-ぷう〔山風〕（名） 一 山より吹き下ろす風。やまかぜ。二【地】夜間、山岳の空氣が冷却するによりて、溪谷に吹き下ろす風。（谷風の對）

さんぶ-きやう〔三部經〕（名） 佛語。三部の尊崇すべき佛經。即ち、無量壽經と觀無量壽經と阿彌陀經と、或ひは大日經と金剛經と蘇悉地經と、或ひは仁王經と金光明經と法華經と、或ひは上生經と下生經と成佛經との稱。曾我扇八景下「是れは淨土の三部經とて、權大乘の一分、往生極樂の法要たり」

さん-ぶぎやう〔三奉行〕（名） 江戸幕府の三つの奉行。即ち、寺社奉行と町奉行と勘定奉行との稱。

さん-ぷきよ〔三不去〕（名） 妻を離別すべからざる三箇條。即ち、歸る所なきと、父母の喪をつとめたると、始め貧賤にして後ち富貴になりたるとの稱。大戴禮本命「有二三不去一、有レ所レ取無レ所レ歸不レ去、與更二三年之喪一不レ去、前貧賤後富貴不レ去」

さん-ぷく〔山腹〕（名） 山の嶺・麓との間の傾斜ある部分。山の中腹。山のなかほど。やまのはら。廬山記「水出二山腹一」

さん-ぷく〔三伏〕（名） 一 極暑の候、金氣の伏藏する日。初伏即ち夏至後の第三の庚（カノエ）の日と、中伏即ち同じく第四の庚の日と、末伏即ち立秋後の第一の庚の日との稱。又、小暑の後の第一・第二・第三の庚の稱。朗詠「但喜三暑隨二三伏一去上、不レ知三秋逐二二毛一來上」同「九夏三伏之暑月、竹含二錯午之風一」梁簡文帝文謝レ賚レ扇啓「飮レ露青蜩、應二三伏之修景一」二 夏の極暑。

さん-ぷく〔三復〕 三度くり返すこと。度度くり返すこと。論語先進「南容三二復白圭一」

ざん-ぷく〔竄伏〕 にげかくれて出でざること。竄匿。劉基詩「竄伏草莽間、股慄面玄黃」

ざん-ぷく〔慚服〕 はぢ入りて心服すること。はぢて服從すること。漢書何武「自レ是後聖慙服」

さんぷく-いっつゐ〔三幅一對〕（名） 次條に同じ。狂言見物左衞門「吡首の達磨、東坡が竹、牧溪和尙の墨繪の觀音、三幅一對」

さんぷく-つゐ〔三幅對〕（名） 一 三つの對（ツヰ）したる幅物。三幅一對。博多小女郎波枕中「何や狩野の三幅對」二 三つの對したる事物。

さん-ぶくろ 算袋（名） 算木を納むる袋。大藏流狂言居杭「未だ算袋の紐をしめて、そこへ手もやりは致さぬ」

さんぶ-さし 三分差（名） のみ（呑）を見よ。

さんぶ-しんたう〔三部神道〕（名） 唯一神道と兩部神道と習合神道との稱。

さん-ぶた（名） 船の舳先（ヘサキ）の板。

さん-ぶつ〔產物〕（名） 其の土地より產出する物。曹植文帝誄「中二和產物一、啓二有人倫一」

さん-ぶつ〔三物〕（名） 一 六德と六行と六藝との稱。周禮地官「大司徒以二鄉三物一教二萬民一、一曰六德、二曰六行、三曰六藝」二 三種の家畜。即ち、雞・犬・豕の稱。詩經小雅「出二此三物一、以詛二爾斯一」

さん-ぶつ〔讚佛〕 佛の功德を讚美すること。太平記二南都北嶺行幸「稱揚讚佛の砌には、鷲峰の花、薰りを讓り」

ざん-ぶつ〔殘物〕（名） のこりもの。あまりもの。

さんぶつ-じよう〔讚佛乘〕（名） 佛典を讚美すること。朗詠「願以二今世世俗文字之業、狂言綺語之誤一、飜爲二當來世世讚佛乘之因、轉法輪之緣一」謠加茂物狂「讚佛乘の心ならば、何はの事も愚かならじ」

さんぷっ-たう〔三沸湯〕（名） 古昔の煎藥の名。和名抄「三沸湯」

さんぶつ-とりひき-かうくわんじよ 產物取引交換所（名） 貨物の取引毎に代價の支拂をなさずして、最後に支拂ふ方法による取引の決算のため、特に設けたる所。

さんぶつ-とりひきじよ 產物取引所（名） 生產物の賣買・取引を爲す取引所。即ち、米穀取引所・商品取引所の類。

さんぶつ-ほけん〔產物保險〕（名）【商】損害保險の一。產物に關する損害を塡補するもの。

ざんぶり（名、副） ざんぶに同じ。

さん-ぷわく〔三不惑〕（名） 酒と色と財との三つに惑溺せざること。萬紫千紅「三不惑は、口ぎれいなる唐人の寢ごとも心もとなし」後漢書楊秉「我有二三不惑一、酒色財也」

さん-ぷん〔三墳〕（名） 支那上代の書物。左傳昭公十二年「左史倚相趨過、王曰、是良史也、子善視レ之、是能讀二三墳・五典・八索・九丘一」

さん-ぶん〔散文〕（名） 詩・歌・賦などに對して、普通の文章の稱。（韻文の對）

さん-ぶん〔慘聞〕（名） いたましき風聞。又、むごたらしき風聞。

ざん-ぷん〔慚忿〕 はぢていかること。慚恚。

ざん-ぷん〔慚憤〕 はぢいきどほること。はぢふづくむこと。慚恚。柳宗元文乞レ討二黃賊一狀「遇二成功之辰一、慚憤空積」

さんぶん-げき〔散文劇〕（名） 散文にて作れる演劇の脚色。（韻文劇の對）

さんぶん-ていそく〔三分鼎足〕（句） 天下を三分して、鼎の足の如く相對立すること。史記淮陰侯「莫レ若下兩利而俱存レ之、三二分天下一鼎足而居上」

さん-べい〔傘柄〕（名） 一 傘（カサ）の柄（エ）。二【植】植物學上の用語。菌の軸（ヂク）。傘の柄の如きよりいふ。

さん-ぺい〔三兵〕（名） 一 三つの兵器。即ち、弓・劍・槍の稱。穀梁傳莊公廿五年「諸侯置二三麾一、陳二三鼓・三兵一」二 步兵と砲兵と騎兵との總稱。

さん-ぺい〔撒兵〕（名）〔撒は音さつなれど、習慣音による〕昔時、西洋式の步兵操練の稱。又、其操練の傳習を受けたるもの。嘉永明治年間錄廿「美濃守殿渡書附。此の度御目見以上、當主子弟厄介に至る迄、十五歲より卅五歲迄の者は、吟味の上、佛蘭西國より御雇ひ相成り候敎師より、撒兵傳習可レ被二仰附一候」

さん-ぺい〔散兵〕（名） 一 四散せる兵士。散亂せる兵士。史記田儋「榮弟橫收二齊散兵一、得二數萬人一」同夏侯嬰「漢王既至二滎陽一、收二散兵一復振」二 軍隊を解きて兵士を散ずること。又、其の兵士。三 兵士を密集せしめず、適當の距離を隔てて處處に配布・散置すること。又、其の兵士。四 役務のなき兵士。隋書禮儀志「安營之制、馬步隊與二軍中散兵一、交爲二兩番一、五日而代」

ざん-ぺい〔殘兵〕（名） のこりの兵卒。敗殘の兵士。

さんぺい-がう〔散兵濠〕（名） 散兵線を張る時、兵士をして內に潛みて敵彈を避け、又は敵を射擊せしむるために築造する空壕（カラボリ）。

さんぺい-がしら〔撒兵頭〕（名） 慶應二年九月二十日御持小筒組の頭を改めたる稱。嘉永明治年間錄五十一「慶應二年九月廿日御持小筒組の頭を改めて撒兵頭と唱ふ」

さんぺい-ぐみ 撒兵組（名） さんぺいたい（撒兵隊）に同じ。嘉永明治年間錄五十一「御坊主壯年の者は、撒兵組へ御入人となり、追ひ追ひ蓄髮す」

さんぺい-けうれん〔散兵敎練〕（名） 兵卒に、地形を利用して行進し、停止し、又は射擊すること等を敎練すること。

さんぺい-しくわんがくかう〔撒兵士官學校〕（名） 撒兵の士官を養成する爲め慶應三年六月陸軍所にて設立したる學校。嘉永明治年間錄廿「慶應三年六月陸軍所に於いて撒兵士官學校を設立。壹岐守殿渡書付。於二陸軍所一撒兵士官學校御取立てに付き、年齡十四歲より十九歲迄の者は寄留傳習請け度き志願の者は、名前取調べ撒兵傳習掛へ可レ被二差出一候」

さんぺい-せん〔散兵線〕（名） 兵士を密集せしめず、適當の距離を隔てて、配布・散置せる一定の區劃線。

さんぺい-たい〔撒兵隊〕（名） 撒兵を以て編成したる軍隊。

さんぺい-にまん〔三平二滿〕（名）〔額と鼻と腮との三つが平かにして、兩の頰の肥え膨れたる義。〕一說、平は心安かなること。滿は不足のなきこと。三と二と

は大數をいふと。(嬉遊笑覽) おかめ。おたふく。おとごぜ。傾城反魂香上「三平二滿の口べに、しなだれかかる會釋顏」

さんぺい-ほんぶ〔三兵本部〕(名) 明治四年兵部省内に置かれたる一部。歩兵・砲兵・騎兵の檢閱等を掌りしもの。歩兵・砲兵・騎兵の檢閱使・權檢閱使・副官・中尉の職員を置く。同五年陸軍省の所屬となり、六年廢せられたり。明治職官沿革表(附錄、歷年武官表、明治四年)「陸、軍、三兵本部」 同(同、同、明治五年)「三兵本部」

さん-ぺき〔三碧〕(名) 九星の一。木星を配す。本位は東、卽ち、震。

さん-ぺん〔散片〕(名) 散り殘りたるきれ。ちりぢりになりたるきれ。四庫全書提要凡例「散片二百八十四種」

ざん-ぺん〔殘片〕(名) 殘りの一片。ちりぢりになりたるのこり。楊發詩殘花「殘片逐風廻」

ざん-ぺん〔殘編〕(名) 散佚したる殘りの書册。殘本。成廷珪詩「白首殘編萬書心」

ざん-ぺん〔竄貶〕 官を貶して遠地に流すこと。宋史徽宗紀「爲王黼所劾、竝竄貶」

さん-へんとう〔山扁豆〕(名)【植】かはらけつめい(山扁豆)の異名。

さん-ぽ〔山圃〕(名) 山地にある菜圃。蘇軾詩茶「山圃正春風」

さん-ぽ〔散步〕 あてもなく遊びあるくこと。そぞろあるき。ぶらぶらあるき。嫏嬛記「古之老人、飯後必散步。欲搖動其身以消食也。故後人以散步爲消搖」

さん-ぽ〔刪補〕 删除と補足と。けづることとおぎなふことと。宋史畢仲衍「損益删補、皆曲盡其當」

さん-ぽう〔山峰〕(名) 山の頂。みね。山頂。左思文選蜀都賦「松柏蓊鬱於山峰」

さん-ぽう〔山鋒〕(名) やまほこ。だし。山車。

さん-ぽう〔三寶〕(名) 一佛語。三種のたから。卽ち、佛・法・僧。又、耳・口・目の稱。敏達紀「三寶之力」 推古紀「篤敬三寶、三寶者佛・法・僧也」 源手習「とまれかくまれ、おぼしたちての給ふを、三寶のいとかしこくほめ給ふ事なり」 二土地と人民と政事との稱。

さん-ぽう〔三寶〕(接尾) はうだい(放題)に同じ。浮世風呂上「病人の言ひなり三寶にして上げなせえ」

さん-ぼう〔參謀〕 一謀議に參與すること。唐書百官志「行軍參謀、關豫軍中機密」 二軍議に參劃する職。李氏刊誤「參謀奏漢之職、在賓幕中、籌畫戎機」 三陸海軍高等將帥の職務を輔佐し、殊に國防及び用兵に關する機務に參劃する武官。陸軍にては參謀本部・師團司令部・要塞司令部・對島警備隊司令部・東京衞戍總督部・朝鮮駐剳軍司令部に、海軍にては海軍軍令部・鎭守府・防備隊・艦隊・要港部に置く。東京衞戍總督部條例第三條第一號「參謀」 要塞司令部條例第二條「參謀」 海軍軍令部條例第六條「參謀」

さんぼう-えんしふりよかう〔參謀演習旅行〕(名) 將校演習旅行の一。參謀將校及び戰時參謀勤務に服すべき將校に、大部隊の作戰を實地に講究し、戰時高等指揮官並びに參謀の要務を習得せしむるため、參謀總長自ら統裁し、或ひは次長若しくは特に參謀總長の指名する將校に統裁せしめて行ふもの。將校演習旅行條例第三章「參謀演習旅行」

さんぼう-きょく〔參謀局〕(名) 明治八年十一月二十五日陸軍省職制の改革によりて陸軍省に置かれたる一局。陸軍參謀科の事務幷びに陸軍文庫を掌るもの。同十一年十二月五日廢せられたり。明治八年十一月陸軍職制及事務章程第十九條「參謀局は陸軍參謀科の事務幷陸軍文庫を掌る」

さんぼう-くわうじん〔三寶荒神〕(名)

(んじうわくうぼんさ)

一竈の神として祭る神。もと印度にて惡人を治罰する神にて、如來荒神・麤亂荒神・忿怒荒神の三身を現ずと。(和訓栞) 佛・法・僧の三寶を守護す。一說、古昔、内膳司に平野・庭火・忌火の三つの釜ありて神靈を祀る。之を三所皇神といふより起こると。(夏山雜談) 二馬の脊の左右に結びつけて、その中、並びに馬の脊に一人づつ乘らるるやうに造りたる火燵の如き鞍。(嬉遊笑覽) 五代女三「大津馬を借りて、三ぼうくわうじんに、男女の一つに乘るを」

さんぼう-くわうじん-まつ〔三寶荒神松〕(名) 每月晦日、荒神棚に捧ぐる松の枝。米の粉などを塗りたるもの。荒神松。

さんぼう-くわん〔參謀官〕(名) 參謀の職にある武官。明治三十一年六月勅令第百二十號陸軍大學校條例第三條「校長敎頭及兵學敎官は參謀官とす」

さんぼう-じちやう〔參謀次長〕(名) 參謀本部の職員。陸軍中將若しくは陸軍少將を以てこれに補し、參謀總長を輔佐し、本部一切の事務整理に任ずるもの。參謀本部條例第四條「參謀次長」

さんぼう-しやうかう〔參謀將校〕(名) 參謀の職にある將校。陸軍參謀條例「參謀將校」

さんぽう-ぜん〔三峰膳〕(名) あつものの一種。葛の粉にて作り、五色に色を染めて三つの山の形を作りて盛り、たれ味噌の汁をかけ、むきくるみを前に入れて食ふ。(貞丈雜記) 宗吾大雙紙「さんぼう膳の眞たしかならず候」 下學集下「三峰膳サンポウゼン羹之類也」

さんぼう-そうちやう〔參謀總長〕(名) 天皇に直隸し、帷幄の軍務に參畫し、國防及び用兵に關する一切の計劃を掌り、參謀本部を統轄し、又、陸軍參謀將校を統督し、其の敎育に任じ、陸軍大學校及び陸地測量部を管轄する職。陸軍大將又は陸軍中將を以て親補す。參謀本部條例「參謀總長」

さんぼう-ちやう〔參謀長〕(名) 幕僚長又は參謀將校を統督して、參謀に關する事務を整理する陸海軍の武官。陸軍にては師團司令部等に、海軍にては鎭守府・艦隊・要港部等に置く。師團司令部條例第十二條「參謀長」 鎭守府條例第十七條「參謀長」 艦隊條例第二十三條「參謀長」 要港部條例第二十一條「參謀長」

さんぼう-のし〔三寶熨斗〕(名) 紋所の名。

さんぼう-ぶ〔參謀部〕(名) 參謀官が其の事務を取り扱ふ所。師團司令部條例第十一條第一號「參謀部」

さんぼう-ほんぶ〔參謀本部〕(名) 參謀總長の統轄の下に、國防及び用兵の事を掌る所。參謀本部條例「參謀本部」

さんぼう-ほんぶ-じちやう〔參謀本部次長〕(名) 明治十一年十二月五日に置かれたる參謀本部の職員。將官を以てこれに補し、參謀本部長、後には參謀總長を輔佐し、本部一切の事務整理に任ずるもの。後、參謀次長と改稱す。明治十一年十二月參謀本部條例「參謀本部次長」 明治職官沿革表(職官部上、一、明治十一年)「參謀本部次長」

さんぼう-ほんぶ-ちやう〔參謀本部長〕(名) 明治十一年十二月七日に置かれたる參謀本部の長官。勅旨によりて將官これに補し、部事を統轄し、機務に參畫することを掌り、總べて平時に於いて陸軍の定制・節度、團隊の編制・布置を審かにし、軍事に違算なきを任とするもの。後、參謀總長と改稱す。明治十一年十二月參謀本部條例「參謀本部長」

さんぼう-ほんぶ-ぶちやう〔參謀本部部長〕(名) 參謀本部の職員。參謀總長の命を承け、課長以下を指揮し、其の主務を管理するもの。參謀本部條例第五條「參謀本部部長」

さん-ぼうらい (名) 粗服を著て、祭文を誦する乞食。(語麗)

さんぽう-ゐん-りう〔三寶院流〕(名) 眞言宗、醍醐流の一派。後白河天皇の第二皇子守覺法親王を祖とするもの。

さんぽう-ゑ〔三寶繪〕(名) 佛・法・僧に關する繪畫。佛畫。大鏡中「この宮に御覽ぜさせんとて、三寶繪はつくれるなり」

さん-ぼく〔山北〕(名) やまのきた。山のうしろ。山陰。周禮柞氏「陰木。注生山北、爲陰木」

さん-ぼく〔山木〕(名) 山にある立木。山の樹木。山樹。左傳昭公三年「山木如市、弗加於山」

さん-ぼく〔三木〕(名) 一古今傳授中の三種の木。卽ち、をがたまの木・めどにけづり花・かはな草の稱。或ひは、をがたまの木・とし木・めど木。或ひは相生の松・めどにけづり花・をがたまの木。或ひは、をがたまの木・さがりごけ・かはなぐさ。或ひは、めど木・をがたまの木・とし木ともいふ。其の說種種あり、一定せず。 二罪人の頸・手・足にはむる三つの木。漢書司馬遷「魏其大將也、衣赭衣、關三木」 注師古「三木在頸及手足」

さん-ぼく〔散木〕(名) 一役にたたぬ木。材木にならぬ木。莊子人間世「已矣、勿言之矣、散木也」 二轉じて、役に立たぬ人の稱。太平記十四(新田足利確執奏狀)「爰有源家之昆弟尊氏・直義、不恥散木之陋質」

さんぼ-だい〔三菩提〕(名) (梵 Sambodhi 遍智の義) 佛語。遍く一切の法を知る智。賀古敎信七墓廻五「此の結緣にひかれ、繼母の三毒、三菩提となり」

さんぼて (名)【植】さぼてんの異名。

さん-ぼん〔三盆〕 三品 (名) 砂糖の一種。純白にて上品なるもの。始めは支那より渡來せしが、後に和製出で來て、舶來のものを唐三盆といひ、和製のを和三盆といふ。さんぼんじろ。

ざん-ぽん〔槧本〕(名) 刊行の本。刊本。東觀餘論「余得子美詩集、頗與今行槧本小異」

ざん-ぽん〔殘本〕(名) ざんぺん(殘編)に同じ。

ざん-ぽん〔竄奔〕 にげ走ること。奔竄。竄走。

さんぼん-いてふ〔三本銀杏〕(名) 紋所の名。

さんぼん-うちは〔三本團扇〕(名) 紋所の名。三本の團扇の柄を中心にして、三方へ向かふさまを描きたるもの。門出八島三「桔梗は佐原の十郎、三本團扇・鱗形、風に揉まれて上がり藤」

さんぼん-おもだか〔三本澤瀉〕(名) 紋所の名。

さんぼん-かい〔三本櫂〕(名) 紋所の名。かい(櫂)三を見よ。

さんぼん-がさ〔三本傘〕(名) 紋所の名。

さんぼん-かさねあふぎ〔三本重扇〕(名) 紋所の名。

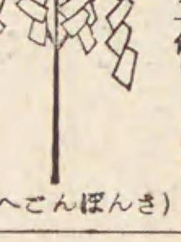
さんぼん-かさねかぶらや〔三本重鏑矢〕(名) 紋所の名。

さんぼん-かさねや〔三本重矢〕(名) 紋所の名。

さんぼん-かしは〔三本柏〕(名) 紋所の名。

さんぼん-からかさ〔三本傘〕(名) 紋所の名。三本の唐笠の柄を中心にして、三方へ向かふさまを描きたるもの。太平記九(久我畷合戰)「三本唐笠を金具に磨ったる鞍を置き」 同七(千劔破城軍)「三本唐笠の紋書きたる旗と、同じき紋の幕とを」

さんぼん-ごへい〔三本五幣〕(名) 指物の一。三本の御幣を取りつけたるもの。聖德太子繪傳記三「立烏帽子に三本五幣の指物」


(いへごんぼんさ)

さんぼん-じろ〔三盆白〕 三品白 (名) さんぼん(三盆)に同じ。

さんぼん-すぎ〔三本杉〕(名) 紋所の名。すぎ(杉)三を見よ。

さんぼん-たか〔三本鷹〕(名) 紋所の名。たかのは(鷹羽)三を見よ。

さんぼん-たかのは〔三本鷹羽〕(名) 紋所の名。

さんぼん-たてや〔三本立矢〕(名) 紋所の名。

さんぼん-ちがひあふぎ〔三本違扇〕(名) 紋所の名。

さんぼん-ちがひからかさ〔三本違傘〕(名) 紋所の名。

さんぼん-どう〔三本籐〕(名) 一弓の上・中・下三所に籐を巻きたるもの。 二空穗の名所。うつぼ(空穗)を見よ。

さんぼん-ならびあふぎ〔三本並扇〕(名) 紋所の名。

さんぼん-ならびあふぎのまる〔三本並扇丸〕(名) 紋所の名。

さんぼん-ならびや〔三本並矢〕(名) 紋所の名。や(矢)三を見よ。

(ちねんぼんさ)

さんぼん-ねぢ〔三本捩〕(名) 武具。指物の名。

さんぼん-ほねむつ-あふぎのまる〔三本骨六扇丸〕(名) 紋所の名。

さんぼん-や〔三本矢〕(名) 紋所の名。

さんま〔秋刀魚〕(名)【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ尺餘に達し、細長にして且つ圓し。腹底鋭くして刃の如く、背部は藍色にして、腹部及び側部は銀白色、體側に眞珠色の横條あり。我が國、東海に產す。食用に供す。さいら。さいり。のそざより。ばんじよ。

さん-まい〔散米〕(名) 神事を行ふ時、神前にまき散らす米。うちまき。くましね。神供。ぜんぎり(錢切)を見よ。謠俊寛「眞砂を取りて散米に」

さん-まい〔三枚〕(名) 一魚を料理するに、先づ頭を切りて後、脊骨と並行に左右兩側の肉を二枚にすき取ること。兩側の肉二枚と骨とにて三枚となるよりいふ。狂言續八「是れは三枚におろすと申す」 二さんまいがた(三枚肩)の略。賀古敎信七墓廻三「古へ乘りし三枚も、身は一枚の夏ごろも」

さん-まい〔三昧〕(梵 Samadhi)(名)(正定また正受・平等などと譯す) 一佛語。心思を一事に集注して他念なきこと。思想を靜めて散亂せしめざること。ぢやう(定)。さんまだい(三摩提)。さんまぢ(三摩地)。源椎本「三昧けふはてぬらんと、いつしかと待ち聞こえ給ふ夕暮に、人まゐりて」 同明石「いかめしき堂をたてて、三昧行ひ」 祖庭事苑「三昧者、三之曰正、昧

之曰レ定、亦云二正受一、謂正定不レ亂、能受二諸法一、憶持揀擇、故名二正受一」㈡墓地に建て、僧をして死者の冥福を祈らしむる所。はかば。墓所。葬地。墓地。荼毘所。三昧場。親鸞上人繪詞傳三「鳥邊野の南、延仁寺の三昧に送りて、火葬し奉る」越後記一、荻田主馬由緒「舘野の三昧にて葬りの御座候は、何物の死に候ぞと問ふ」㈢兎角、其の方に傾き易きこと。聖德太子繪傳記二「刀ざんまい、てかした、てかした」㈣已れの意向次第なること。吉野都女楠五「所詮此の方構はぬ、供なりと舁きなりと、らぬがざんまい」女殺油地獄下「紙子著て川へはまらうが、油ぬって火にくばらうが、奴(ヌウ)が三昧」

さんまい-あはせ 三枚袷 (名) 表と裏との間に、倘ほ一枚入れて仕立てたる袷。嬉遊笑覽二代男八「女郎ぐるひほど骨の折るるはなし中略三枚袷きるほどになくては、おくぶかには見えず」

さんまい-がさね 三枚襲 (名) 小袖を三枚重ねて著ること。又、重ねて著る三枚揃ひの小袖。

さんまい-かさねたかのは 三枚重鷹羽 (名) 紋所の名。

さんまい-かしは 三枚柏 (名) 紋所の名。

さんまい-がた 三枚肩 (名) 駕籠(カゴ)に、舁夫(カキ)の三人附くもの。さんまい。さんにんごし。淀鯉出世瀧德上「駕籠の衆頼む。合點と、北へ走れば新七夫婦、南無三枚肩見送りて、口を明いてぞ惘れたり」

さんまい-かぶと 三枚兜 (名) 兜の錏(シコロ)の板の三枚なるもの。半井本保元義朝白河殿夜討「黄匂の鎧に、三枚兜に染羽の矢負ひ」盛衰記五、澄憲賜血脈「三枚冑を猪頸に著なし」

さんまい-くまざさ 三枚熊笹 (名) 紋所の名。

さんまい-ざさ 三枚笹 (名) 紋所の名。さんまいささのまる。

さんまい-ささのまる 三枚笹丸 (名) 紋所の名。さんまいざさ。

さんまい-そう 三昧僧 (名) 專心に念佛又は誦經する僧。

さんまい-たう 三昧湯 (名) 寺院にて、暑氣はらひのために沸かす藥湯。

さんまい-だう 三昧堂 (名) 籠もりて念佛三昧をする堂。又、座禪する堂。枕八、うらやましき物「三昧堂たてて、宵・曉に祈られたる人」源浮舟「ふだんの三昧堂など、いとたふとく掟てられたりとなん聞き給ふる」

さんまい-たかくづし 三枚鷹崩 (名) 紋所の名。

さんまい-だきかしは 三枚抱柏 (名) 紋所の名。

さんまい-だきばせう 三枚抱芭蕉 (名) 紋所の名。

さんまい-だな 三枚棚 (名) 兩側と底とが、ただ三枚の板よりなれる細長き船。長さ四間餘り、幅二尺二三寸、一本水押(イツポンミオシ)にて横舳(ヨコトモ)なり。耕作用とす。

さんまい-ちがひたか 三枚違鷹 (名) 紋所の名。

さんまい-ぢがみ 三枚地紙 (名) 紋所の名。ぢがみ(地紙)二を見よ。

さんまい-ならびかしは 三枚並柏 (名) 紋所の名。

さんまい-ならびやはず 三枚並矢筈 (名) 紋所の名。

さんまい-ば 三昧場 (名) さんまい(三昧)二に同じ。

さんまい-ばせう 三枚芭蕉 (名) 紋所の名。

さんまい-ばな (名)【植】まんじゆしやげ(石蒜)をいふ、伊勢國の方言。俚言集覽

さんまい-ほなか (名) 紋所の名。

さんまい-や 三昧耶 (名) 佛語。さんまや(三摩耶)に同じ。

さんまいや-まんだら 三昧耶曼荼羅 (名)(梵語 Samaya-maṇḍala) 曼荼羅の製法の一。諸尊の所持の器杖・印契等にて組織せる曼荼羅。祕密曼荼羅十住心論十、祕密莊嚴住心第十「如レ是曼荼羅、各各有二四種曼荼羅・四智印等一、言二四種一者摩訶・三昧耶・達磨・羯磨是也」祕藏記本「四種曼荼羅。一、大曼荼羅五大也。謂繪像形、體等也、高廣之義。二、三昧耶曼荼羅尊等所レ執持二器杖・印契一不等義」

さんまい-りう 三昧流 (名) 天台宗山門派の一流。三昧阿闍梨良祐の創めたるもの。密門雜抄「山門十三流中略三昧流良祐中略當今世所レ傳は法曼流・穴太流・三昧流の三流なり中略三昧流は、今東塔南谷黑子千妙寺に所レ傳の灌頂なり」

さん-また 三股 (名) 先端に叉(マタ)をつくりたる棒。物を高き處に懸くるに用ふ。みつまた。またふり。杈。

さん-まだい 三摩提 (梵 Samādhi) (名) さんまい(三昧)一に同じ。

さん-まぢ 三摩地 (梵 Samādhi) (名) 前條に同じ。

さん-まや 三摩耶 (梵 Samaya) (名) 佛語。㈠時又は本誓と譯す。㈡標識、卽ち、諸尊所持の標識。不動の劍、藥師の藥壺の類。

さんまや-かい 三摩耶戒 (名) 佛語。眞言宗の特殊の戒法。

さんまや-ぎやう 三摩耶形 (名) 衆生を濟度せんとする諸佛の本願に基きて、其の形像の上に現じたる諸佛所持の器仗又は印契等の稱。三形。七十一番歌合かいた「流れ灌頂流させ給へ、率塔婆と申すは大日如來の三摩耶形」

さん-まん 散漫 ㈠ちらばること。ひろがること。水經注「廬山石門水、懸流飛瀑、近三百許步下、散二漫十數步上一、望レ之連レ天」謝靈運雪賦「散漫交錯、氛氳蕭索」㈡思想などの漠然として、とりとめのなきにいふ語。

さん-まん 散滿 ちらばりていっぱいになること。ちりみつること。太平記廿七、田樂「幔幕風に飛揚して、薰香天に散滿す」

さん-み 酸味 (名) 酸きあぢ。すみ。

さん-み 三位 (名) さんゐ(三位)の音便。

さんみ いったい 三位一體 さんゐいったい(三位一體)の條を見よ。

さん-みつ 三密 (名) 佛語。身・口・意、三つの祕密。身密とは手に印を結び、行住坐臥の威儀を勤むること。口密とは密かに眞言を誦し、文句を明了にして誤りなからしむること。意密とは菩提心を觀ずること。平家七、山門返牒「瑜伽三密法雨、回二時俗於堯年昔一」謠葛城天狗「三密の月すみやかにして、寥寥と有る折節に」菩提心論「所レ謂三密、一者身密者、如下結二印契一召中請聖衆上也。二者語密者、如下密誦二眞言一令中文句了了分明、无上レ謬誤上也。三者意密者、如下住二瑜伽一相應白淨月圓滿、觀中菩提心上也」

さんみつ いんくわん 三密印觀 佛語。〔印觀は印相觀心の義〕密教にて、手に印相を結び(身密)、口に眞言を誦し(口密)、心に本尊を觀ずる(意密)修行。盛衰記廿九、白山權現垂跡「三密印觀を凝らし、五相身心を調へて、祈念加持し給ひければ」

さんみつ ぎやうぼふ 三密行法 三密の行をなす法。盛衰記廿五、前後相違無常「三密行法の御薰修も積もれり」

さんみつ ゆが 三密瑜伽 佛語。行者の三密が、能く如來の三密と相應じて毫も捨離せず、卽身成佛の義を成就すること。瑜伽三密。盛衰記八、法皇三井灌頂「三密瑜伽の寶瓶には、東寺山門の花開け給へり」

さん-みやう 三明 (名) 佛語。宿命通と天眼通と漏盡通との稱。榮華玉臺「佛中略六通・三明そなへたり」雜阿含經「世尊告二諸比丘一、有二無學三明一、何等爲レ三、無學宿命智證通、無學生死智證通、無學漏盡智證通」

さんみやう の かくろ 三明覺路 〔三明は大覺たる佛陀となる捷路なる故にいふ〕佛語。ほとけとなるべきみち。佛門。太平記廿一、先帝崩御「今は偏へに十善の帝位を捨て、三明の覺路に趣かせ給ふべき御事をのみおぼしめして」

さんみやう の つき 三明月 三明の德の圓滿にして、能く一切を照らすを月に譬へていふ語。盛衰記四十、弘法入唐「僧俗心を研きて、三明の月高く晴れたり」

さんみやう ろくつう 三明六通 佛語。三明と六通と。平家五、大庭早馬「嚴島大明神は三明・六通の靈神にて御座せば」盛衰記十七、祇王祇女佛前「佛と名をば附けたれど、三明・六通悟らねば、惘(ア)れ迷ひたる樣なりけり」法華經「皆得二深妙禪定三明六通一、具二八解脫一」觀經「應時卽得二阿羅漢道一、三明六通具二八解脫一」注「宿住智證明治二前際愚一、死生智證明治二後際愚一、漏盡智證明治二中際愚一、名二之明一。又加二神境・天眼・天耳・他心一、都名二六通一」

さんみやう-さわがせ (名) つまらぬ事にて、近所をさわがすこと。

さん-みやく 山脈 (名)【地】山の長く連續するもの。朱熹詩「山脈自二雲中一來」

さんみやく-さんぼだい 三藐三菩提 (梵 Samyaksambodhi) (名)〔正偏知また正偏覺と譯す〕死の迷ひを去りて、一切の法を覺ること。さみやくさぼだい。新古今釋教「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、我がたつ杣に冥加あらせ給へ」

さん-みん 山民 (名) 山中の民。申鑒「山民樸、市民頑」

さん-む 山務 (名) ㈠寺の事務。㈡比叡山延暦寺の事務。

さん-む 參務 事務に參與すること。業務に參すること。

ざん-む 殘務 (名) 殘りの事務。處理し終はらざる事務。

ざん-む 殘夢 (名) 見のこしたる夢の跡。のこりのゆめ。芭蕉句「馬に寢て殘夢月遠し茶の烟」李洞詩「藥杵聲中搗二殘夢一」

さんむ-ゐん 參務員 (名) 神部署の職員の一。署長の諮詢に應じて、署務に關し意見を開申する奏任待遇。神部署官制第六條「參務員」

ざん-めつ 殘滅 そこなひほろぶること。又、そこなひほろぼすこと。盛衰記卅八、重衡下向上洛西國「國之殘滅、積年益滅歟」史記高祖本紀「諸所レ過、無レ不二殘滅一」同項羽本紀「徇レ齊至二北海一、多レ所二殘滅一」

さん-めん 三麵 (名) 饅頭と蒸麥と餠との稱。俚言集覽

さん-めん 三面 (名) ㈠三つの顏。狂言蛭子大黑殿「此の大黑殿、三面・六臂とあらはれけれ」山海經「大荒之山有レ人焉、三面六臂」㈡三箇の平面。又、第三の平面。周禮春官「軒縣。注軒縣三面、其形曲」㈢新聞紙の三頁(ページ)目の紙面。社會の雜事・雜話を記載するところ。

さんめん-かく 三面角 (名)【數】三つの平面の一點に會してなす角。

さんめん-きじ 三面記事 (名) 新聞紙の三面の記事。雜報。

さんめん-きしや 三面記者 (名) 三面記事を擔當する新聞記者。雜報記者。

さんめん-だいこく 三面大黑 (名) 三つの顏のある大黑。狂言蛭子大黑「西の宮の蛭子三郎殿と、比叡山の三面の大黑殿へと祈誓をかけて御座れば」

さんめん-だね 三面種 (名) 三面記事の種。

さん-もつ 散物 (名) 金物の上に漆して消を押したるもの。松屋筆記「錺鈔中「矢尻の具、散物鐙堅食散物轡堅食」信範記壽永元年「移鞍中略鐵・散物、共有二加點一」

さん-もん 山門 (名) ㈠寺の樓門。㈡比叡山延暦寺の稱。嘉興志「立二山門一」保元朝敵所燒拂「山門其の精誠を抽んでけり」

さんもん の さんもんぜき 山門三門跡 山門派の三つの門跡、卽ち、梶井と靑蓮院と妙法院との稱。海人藻芥「山門三門跡者、梶井・靑蓮院・妙法院是也」

さん-もん 三門 (名) ㈠大なる中央の門と、小なる左右の二門との相連なれるもの。㈡佛語。寺の門の稱。寺を法空・涅槃にたとへ、其の門を三解脫門、卽ち空門・無相門・無作門にたとへていふ。釋氏要覽「寺宇開二三門一者、佛地論云、謂二空門・無相門・無作門一」

さん-もん 三文 (名) 極めて價低きものにいふ語。

さんもん-さんたふ 三問三答 (句) 鎌倉・室町時代、官府が訴人の訴狀を受理するとき、問狀を論人に發して其の答辯を求め、かくして訴人・論人互ひに狀を以て訴陳すること三回に及ぶこと。庭訓往來八月「番二三問三答訴陳一、於二御前一遂二對決一、任二雌雄是非一」尺素往來「本領事、近年庶子等成二敵人一、構二種種之奸濫曲折一、依レ奉レ掠二上聞一、及二違亂一候之間、遂二三問三答之訴陳一候之處」

さんもんさんたふ の そちんじやう 三問三答訴陳狀 訴人・論人が三問三答に提出する訴狀と陳狀と。卽ち、本解狀・初答狀・二問狀・二答狀・三問狀・三答狀の總稱。沙汰未練書「以レ之謂二三問三答訴陳狀一也」

さんもん-じやう 三問狀 (名) 鎌倉・室町時代、原告の、官府に提出したる三度目の訴狀の稱。沙汰未練書「一、三問狀、三箇度訴狀也」道照愚草「一、訴論人の事中略三問狀、三箇度の訴狀也」

さんもん-じゆ 三文珠 (名) 三つの著名なる文珠。卽ち、山城國新黑谷の文珠、大和國安部の文珠、丹後國切渡の文珠の稱。節用集十、數量「三文珠サンモンジユ 城州新黑谷・和州安部・丹州切渡」

さんもん-づくり 山門造 (名) 寺の樓門風のつくり。家屋雜考「樓門は常人の家に用ひず、豐臣家の聚樂の第には樓門ありしよし、當時の記錄にみえたり。こは俗にいはゆる山門造の事なり」

さんもんと-は 三門徒派 讃門徒派 (名) 眞宗の一派。釋如導を流祖とし、越前國福井の專照寺を本山とするもの。明治十一年別派獨立を許可せられたり。大谷本願寺通紀六、越州三門徒「專修寺・專照・證誠・毫攝・誠照五寺、並傳二如道・道性・如覺三子法義一、故稱二三門徒一、或作二讃門派一、恐後人私度耳」和漢三才圖會七十、越前「毫攝寺中略淨照寺中略淸淨寺中略以上三箇寺、稱二三門徒一、或云二讃門徒一」

さんもん-は 山門派 (名) 天台宗の一派。傳敎の高足の弟子圓仁を流祖とし、比叡山を本山とす。其の派十三流に分かる。

さんもん-ばん 三文判 (名) 極めて低き價の印判。出來あひの粗末なる印判。

さんもん-ぶぎゃう 〔山門奉行〕 (名) 比叡山延曆寺の事を沙汰する奉行。

さんもん-ぶんし 〔三文文士〕 (名) 極めて劣等なる文士。

さんもん-ゑ 〔三文繪〕 (名) 極めてねだんやすく粗末なる繪。傾城反魂香上「祭する所、店に張ったる三文繪を、生物と見違へしか」

さん-や 〔山野〕 (名) 一山と野原と。のやま。平家十二、六濱沙汰「山野廣しといへども、立ちより宿るべき所もなし」南史侯景「每使下竄二山野一捕上レ鳥」 二ゐなか。田野。蜀志杜微「怪君未レ有二相誨一便欲レ求レ還二於山野一」

ざん-や 〔殘夜〕 (名) よあけがた。太平記廿七、雲景未來記「されば此の神器無からん代は月入りて後の殘夜の如し」王灣詩「海日生二殘夜一江春入二舊年一」杜甫詩「四更山吐レ月、殘夜水明レ樓」

さん-やう 〔山陽〕 (名) 一山のみなみ。山南。二山陽道の略。

ざん-やう 〔殘陽〕 (名) ゆふひ。いりひ。殘照。斜陽。夕照。羅隱詩「鳥噪二殘陽一草滿レ庭」

さんやうさう-くわ 〔山羊草科〕 (名) 【植】やぎさうくわ(山羊草科)の異名。

さんや-かね 〔三夜鐵漿〕 (名) 三の日に鐵漿(カネ)を著くることを忌むにいふ語。俚言集覽

さん-やく 〔三役〕 (名) 一相撲(スマフ)にて大關・關脇・小結の三つの稱。二江戶時代、御料所村村御傳馬宿入用米と六尺給米と御藏前入用との稱。地方凡例錄五、三役「三役と言ふは私領には無き事なり。其の始年曆も不レ知、尤も課役の人夫等を出だし、庸調之法あれば、三役に類したる義はあれども、三役と名目附け定納に成りたるは、御當代にて始めし事とみえたり。御料村村御傳馬宿入用米・六尺給米・御藏前入用、是れを三役というて、高懸りに而納む。前方は年年御勘定所より御割賦に而、年により不同ありしが、享保年中より定納と員數定まりたり」

さん-やく 〔三譯〕 (名) 〔三度の通譯を重ぬる義〕遠く隔たりたるにいふ語。十八史略「交趾南有二越裳氏一重二三譯一來」

さん-やく 〔山藥〕 (名) 藥の名。やまのいもを乾して粉にしたるもの。本草衍義「薯蕷因二唐代宗名預一避レ諱爲二薯藥一又因二英宗諱曙一改爲二山藥一」

さん-やく 〔散藥〕 (名) こぐすり(粉藥)に同じ。

さんや-ざうり 〔山谷草履〕 (名) 藺殼(ヰガラ)にて編みたる草履。正德の頃、流行せしもの。江戶の山谷を經て吉原に通ふ遊客の好んではきしよりいふ。我衣「さんやざうりと名附け、吉原通ひの若男の履物なり」

さんや-ぶね 〔山谷船〕 (名) 昔時、江戶の吉原の遊客の、山谷堀より乘りて通ひし小舟。川柳「傘を帆にして戻る三谷舟」

さんやれ (名) 唄の節にいふ語。室町千疊敷四「寒さうに御坐るに、火桶やりたや炭添へて、さんやれ、さんやれ」

ざん-ゆ 〔讒諛〕 へつらひて、人を讒言すること。史記賈誼「闒茸尊顯兮、讒諛得レ志」同鼂錯「夫以二孔墨之辯一不レ能三自免二於讒諛一而二國以危」

さん-よ 〔三餘〕 (名) 〔支那、魏の董遇の言に基く〕讀書に最も適當なる冬と夜と陰雨の時との稱。太平記廿九、自太元攻日本「倩三餘の暇によって、千古の記する處を看るに」任昉文天監三年策秀才文「雖二一日萬機一早朝宴罷、聽覽之暇、三餘靡レ失」魏略「或問二三餘之意一遇言、冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘也」

さん-よ 〔山輿〕 (名) やまかご(山駕籠)に同じ。文翔鳳文登石山記「以二山輿一登」

さん-よ 〔讚譽〕 ほめそやすこと。讚稱。稱讚。

さん-よ 〔參與〕 一其の事に與(アヅカ)り加はること。參加。二慶應三年十二月九日に置かれたる三職の一。事務を參議し、神祇・内國・外國・海陸軍・會計・刑法・制度の各課を分務するもの。公卿・諸侯・藩士(後には徵士)等を以てこれに任じ、公卿・諸侯のこの職に任ずるものを上の參與といひ、藩士以下のこの職に任ずるものを下の參與といふ。明治二年七月廢せられたり。參與職。太政官日誌「參與」三明治元年七月十七日に置かれたる鎭將府の職員。議定の次に位し、議定と同じく鎭將府の管轄内に於ける法制の制定・機務の決定等を掌るもの。同年十月十八日鎭將府の廢止と共に廢せられたり。鎭將府日誌「參與」

さん-よ 〔參預〕 前條一に同じ。晉書唐彬「朝有二疑議一每參預焉」

ざん-よ 〔殘餘〕 (名) のこり。あまり。剩餘。歐陽修詩「狼藉烏鳥爭二殘餘一」

さん-よう 〔蠶蛹〕 (名) かひこのさなぎ。

さん-よう 〔山容〕 (名) やまのかたち。陸暢詩「秋天木落見二山容一」

さん-よう 〔算用〕 一計算すること。勘定。狂言胸突「今日は自身まゐり、算用を致そと存ずる」二みつもり。目算。甲陽軍鑑廿「跡・先き算用をきはむれば」薩摩歌上「然やうな者を抱へては、こっちの算用あはづの原」

さん-よう 〔散用〕 所所に分配すること。延曆儀式帳「散用」

さんよう-あひ 〔算用合〕 (名) さんよう(算用)一に同じ。天網島下「最前の金で、そなたの算用合ひも仕まひ」

さんよう-すうじ 〔算用數字〕 (名) 筆算に使用する數字。卽ち、あらびあ數字の稱。

さんよう-だかし 〔算用高〕 (形ク) 勘定高し。吝嗇なり。

さんよう-だて 〔算用立〕 (名) 算用の吟味。勘定のあらひだて。淀鯉出世瀧德下「前髮もある私が、親程な山城屋、算用だても申しにくし」

さんよう-ば 〔算用場〕 (名) 會計場。帳場。戀八封杜曆上「算用場には手代共」

さん-よく 〔贊翼〕 傍より力をそへて助くること。翼贊。贊助。魏志邢顒「臨菑侯植有レ寵、丁儀等並贊二翼其美一」

さんよ-くわん 〔參與官〕 (名) 統監府の職名。上官の命を承け府務を掌理せる勅任官。明治三十八年十二月勅令第二百六十七號統監府及理事廳官制第十一條一項二號「參與官」

ざんよ-ざいさん 〔殘餘財產〕 (名) 【法】組合又は法人の解散の場合に、其の債務を完濟して殘りたる財產。民法第七十八條一項三「殘餘財產の引渡」商法第九十一條一「殘餘財產の分配」

さんよ-しょく 〔參與職〕 (名) さんよ(參與)二に同じ。太政官日誌二月「參與職」

さん-らい 〔山籟〕 (名) やま風の、樹木などに當たる音。鮑照詩「野風振二山籟一朋鳥夜驚離」

さん-らい 〔三籟〕 (名) 天籟と地籟と人籟との稱。

さん-らい 〔三禮〕 一支那の三部の禮書。卽ち、周禮・儀禮・禮記の稱。南史傳隆「特精二三禮一」二支那にて天神・地祇・人鬼を祭る禮。書經舜典「帝曰、咨、四岳、有二能典朕三禮一」三佛語。さんばい(三拜)一に同じ。謠東方朔「西王母、此の君へ參禮申すべし」參禮。

さんらい-さう (名) 【植】かはぢさ(水苦賣)の異名。

さんらい-し 〔三禮師〕 (名) 七僧の一。讀經の始めに、聲を揚げて三禮の唄をいふ者。

さん-らく 〔三樂〕 (名) 君子の三つのたのしみ。卽ち、一家の恙なきと、俯仰心に愧ぢざると、英才を教育するとの稱。孟子盡心上「君子有二三樂一而王二天下一不二與存一焉、父母俱存、兄弟無レ故、一樂也。仰不レ愧二於天一俯不レ怍二於人一二樂也。得二天下英才一而教二育之一三樂也」

さん-らく 〔參洛〕 都へ上ぼること。上洛。保元新院御所各門門固「爲朝猶參洛せざりければ」

さん-らく 〔散落〕 一ちりうすること。おちちること。二散失・脫落すること。左傳莊公廿六年「虢人侵レ晉。杜注簡牘散落、不レ究二其本末一」

さん-らふく 〔山蘿蔔〕 (名) 【植】まつむしさう(山蘿蔔)の異名。

さんらふく-くわ 〔山蘿蔔科〕 (名) 【植】まつむしさうくわ(山蘿蔔科)の異名。

さん-らん 〔蠶卵〕 (名) かひこのたまご。かひこのたね。梁四公記「蠶卵大如二鷰雀卵一」

さん-らん 〔山巒〕 (名) さんがく(山岳)に同じ。王建詩「水驛門旗出、山巒洞主參」

さん-らん 〔散亂〕 ちりみだるること。ちりぢりになること。朗詠「雪似二鵝毛一飛散亂、人被二鶴氅一立徘徊」史記秦始皇本紀「古者天下散亂、莫二之能一一」同酈食其「足下起二糾合之衆一收二散亂之兵一不レ滿二萬人一」

さん-らん 〔燦爛〕 〔粲爛〕 (副) うつくしくかがやくさまにいふ語。きらびやかなるさまにいふ語。朗詠「欲レ謂二之水一則漢女施レ粉之鏡清瑩、欲レ謂二之花一赤蜀人濯レ文之錦粲爛」宋玉文風賦「眴煥粲爛、離散轉移」

さんらん-し 〔蠶卵紙〕 (名) 蠶の蛾に卵を産みつけさせたる紙。たねがみ。

さん-り 〔三里〕 (名) 灸穴の名。膝頭の下の外側の稍や凹みたる所。甲陽軍鑑廿「すねの三里に灸をおろし申し候」冥途飛脚中「おっとまかせと足輕く、走る三里の灸よりも、小判の利きぞ應へける」

さん-り 〔散吏〕 (名) 職務のなき官吏。晉紀總論「王彌者靑州之散吏也」

さん-り 〔散離〕 はなればなれになること。ちりぢりになること。離散。左傳成公十三年「散二離我兄弟一撓二亂我同盟一」

さん-りう 〔山流〕 (名) 【地】一傾斜急なる土地を流るる河。二河の上流と中流との稱。(野流の對)

ざん-りう 〔殘溜〕 (名) のこりてたまりたるもの。殘りのしづく。

ざん-りう 〔殘留〕 のこりとどまること。ゐのこり。

ざん-りう 〔竄流〕 島流しになること。ざんる。流竄。

さん-りく 〔三陸〕 (名) 陸前・陸中・陸奧、三國の稱。

ざん-りく 〔斬戮〕 きりころすこと。殺戮。

さんり-さい 〔鑽籬菜〕 (名) 【動】にはとり(雞)の異名。東坡志林「僧謂酒者爲二般若湯一、魚爲二水梭花一、雞爲二鑽籬菜一、人有レ爲二不義一而文レ之以二美名一」

さんり-じ 〔山梨兒〕 (名) 【植】さるまめ(山梨兒)の異名。

さん-りつ 〔山立〕 まっすぐにたつこと。禮記注「山立猶二正立一也」

さん-りつ 〔簒立〕 君の位を簒ひて其の位に卽くこと。左傳隱公四年杜注「諸簒立者、諸侯既與レ之會、則不二復討一」

さん-りつ 〔攢立〕 むらがりたつこと。司馬相如文上林賦「攢立叢倚」

さん-りつ 〔慘慄〕 一慘酷にして、ぞっと慄(ヲノノ)ふほどなること。褚少孫文楚辭「感二予志一兮慘慄」二ものすごきこと。古詩「北風何慘慄」

さん-りゃう 〔山梁〕 (名) 【動】きじ(雉)の異名。

さん-りゃく 〔三略〕 (名) 支那の兵法の七書の一。上略・中略・下略の三つに分かる。周の太公望の著述なりといふ。國姓爺後日合戰四「繰り廣げたる卷卷の軍書は、孫子・吳子・三略・六韜の七つの文の道よりも」李康文運命論「受二黃石之符一誦二三略之說一」謝靈運文「誨以二三略一惠以二六韜一」

さん-りゃく 〔刪略〕 けづりはぶくこと。省略。荀悅文漢紀序「省レ要刪略」

ざん-りゃく 〔殘掠〕 殘害・掠奪すること。そこなひかすむること。唐書張建封「殘二掠鄉縣一」

さん-りょう 〔山陵〕 (名) 一やまとをかと。禮記王制「山陵林麓」同月令「仲夏之月、可二以居二高明一可二以遠眺望一可二以升二山陵一可二以處二臺榭一」二みささぎ(陵)に同じ。水經注「秦名二天子冢一曰レ山、漢曰レ陵」

さんりょう くづる 山陵崩 帝王の崩御するにいふ。戰國策秦「王之春秋高、一旦山陵崩、太子用レ事」

さん-りょう 〔三稜〕 (名) 一稜(カド)が三つあること。又、その物。二【植】みくり(黑三稜)の異名。

さんりょう-きゃう 〔三稜鏡〕 (名) 【理】ぷりずむ・に同じ。

さんりょう-きん 〔三稜筋〕 (名) 【醫】さんかくきん(三角筋)に同じ。

さんりょう-こう 〔三稜口〕 (名) 【地】さんかくかう(三角江)に同じ。

さんりょう-しう 〔三稜洲〕 (名) 【地】さんかくしう(三角洲)に同じ。

さんりょう-しん 〔三稜鍼〕 (名) 稜(カド)の三つある鍼術用の鍼(ハリ)。

さんりょう-すゐ 〔三稜錐〕 (名) みつめぎり(三目錐)に同じ。天工開物「凡鏃治鐵爲レ之、中國則三稜錐象也」

さんりょう-そうくわん 〔山陵總管〕 (名) 明治元年七月二十八日に置き、山陵修補の事務を總管することを掌らしめたる職。同二年八月十六日廢せられたり。明治職官沿革表一、職官部上、明治元年「置二山陵總管副總管一」

さんりょう-たい 〔三稜體〕 (名) ひしがた(菱形)に同じ。

さんりょう-はり 〔三稜玻璃〕 (名) 【理】ぷりずむ・に同じ。

さんりょう-ぶぎゃう 〔山陵奉行〕 (名) 江戶幕府の奉行の一。山陵を修補し、其の他諸陵の事を掌るもの。

さんりょう-ふくそうくわん 〔山陵副總管〕 (名) 明治元年七月二十八日に置き、山陵總管を佐けて山陵修補の事務を總管することを掌らしめたる職。同二年八月十六日廢せられたり。明治職官沿革表一、職官部上、明治元年「置二山陵總管副總管一」

さん-りん 〔山林〕 (名) 一やまとはやしと。盛衰記十八、龍神守三種心「入道して再び在家に歸らず、更に人に諂ふ事なし。猶山林流浪の行人也」左傳隱公五年「若夫山林川澤之實、器用之資」二山にて樹木の叢生する所。はやし。森林。孟子梁惠王上「斧斤以レ時入二山林一」史記周本紀「適會二山林多一人、遷レ之」

さんりんのし 山林士 山林に隱遁せる人。漢書王吉傳贊「山林之士、往而不レ能レ反」

さん-りん 〔三輪〕 (名) 一佛語。地下にありて大地を支持すといふ金輪と水輪と風輪との稱。二渦宮術(クワウキユウジユツ)にて、生年

月日の干支の稱。又、その干支の相會すること。

さんりん-がく ～山林學 (名) 山林の培養・保存等を研究する學問。

さんりん-きょく ～山林局 (名) 明治四年正月晦日民部省に置きたる一局。森林・原野に關する事務を掌るもの。後、內務省の所管となり、地理寮の一課として山林課と改稱せしが、同十二年五月十五日舊稱に復し、同十四年四月七日農商務省に屬し、其の一局として現存す。農商務省官制第七條「山林局」

さんりん-くわ ～山林課 (名) 明治七年八月內務省の地理寮に設けたる一課。山林の事務を掌るもの。同十二年五月十五日廢して山林局を置けり。明治職官沿革表明治七年三、官廳部上「山林課」

さんりん-くわい ～三輪會 (名) 淘宮術にて、其の人の生まれたる年月日の干支の相會するときに行ふ祝宴。

さんりん-さう (名) 【植】毛茛(ウマノアシガタ)科、白頭翁(オキナグサ)屬の多年生草本。莖の高さ七八寸。葉は三出複葉、長き葉柄を有し、各小葉は通常二三裂し、各裂片も亦缺刻狀鋸齒を有す。總苞の葉は三箇にして、短き葉柄を有し、亦、分裂せり。六七月頃、白色の花二・三箇を莖頂に開く。我が國、各地の山地に自生す。

さんりん-しゃ ～三輪車 (名) 輪の三つある車。

さんりん-ぶぎゃう ～山林奉行 (名) 江戶幕府の奉行の一。山林を預かりて樹木を培養し、用に從ひて材木を伐採すること等を掌るもの。

さん-る ～三流 (名) 三つの流罪。即ち、遠流・中流・近流の稱。天武紀下「死刑沒官三流並除二一等一」獄令「凡流人應ㇾ配者、依二罪輕重一各配二三流一」

ざん-る ～竄流 ざんりう(竄流)に同じ。

さん-るゐ ～酸類 (名) 【化】酸性あるもの。即ち、硝酸・硫酸・鹽酸・酒石酸などの總稱。

ざん-るゐ ～殘淚 (名) なみだのあと。劉長卿詩「點點留二殘淚一枝枝寄二此心一」

ざん-るゐ ～殘類 (名) 殘りたるやから。殘盜。餘類。蜀志後主傳注「殘類餘醜」

さん-れい ～山靈 (名) やまの神。山神。山精。庾信文終南山義谷銘「川后讓ㇾ德、山靈景從」

さん-れい ～山嶺 (名) やまのみね。山峰。宋書鮮卑吐谷渾「或在二山嶺一或在二平地一」

さんれい-ごしん ～三令五申 (句) 幾度もくりかへして命令すること。史記孫子呉「約束既布、乃設二鈇鉞一即三令五申、於ㇾ是鼓二之右一婦人大笑」

さんれい-さう (名) 【植】かはぢさ(水苦賣)の異名。

さんれい-とう ～山黎豆 (名) 【植】つるふぢばかまの異名。

さん-れき ～算曆 (名) 算術と曆法と。晉書郭璞「好二古文奇字一妙二于陰陽算曆一」

ざん-れき ～殘曆 (名) ㊀歲末に僅か殘れる日數。かぞへび。曆尾。㊁年老いて、殘りいくらもなき齡。餘生。餘命。餘年。

ざん-れき ～殘瀝 (名) のこりのしづく。殘滴。餘瀝。餘滴。歐陽修文蒼蠅賦「杯盂殘瀝」

さん-れつ ～參列 他の人人と倶に其の席に列すること。參加して列席すること。まじはりつらなること。太平記三、主上臨幸依ㇾ非二實事一山門變議事「西塔の衆徒、理にをれて、仙蹕を促さん爲めに、皇居に參列す」戰國策「魏卒戍二四方一守二亭障一者參列」

さん-れつ ～慘烈 ㊀極めて悲慘なること。甚だいたましきこと。㊁きびしきこと。甚だしきこと。酷烈。張衡文西京賦「雨雪飄飄、氷霜慘烈」

さんれつ-けん ～參列權 (名) ㊀參列する權利。㊁【法】國際會議に代表者を出席せしめて、其の議事に參與せしむる國家の權利。會議の目的たる事件に關係ある獨立國は、皆、此の權利を有す。

さん-ろ ～山路 (名) 山間のみち。やまぢ。やまみち。山道。謠鳥追船「山路に日暮れぬ」北周書辛昂「過二絕山路一」

さん-ろう ～山樓 (名) 山上のたかどの。山閣。庾信文佛龕銘「山樓石柱」

さん-ろう ～參籠 神社・佛閣に參り、日夜籠もり居て祈ること。保元新院召爲義「聊か宿願の事ありて、八幡に參籠仕りて候」百鍊抄治承四年三月廿日「上皇御二幸石清水一十箇日令二參籠給一被ㇾ修二八講一」

さん-ろく ～山麓 (名) 山のすそ。ふもと。山脚。山足。水經注「亞父冢、項羽掠馬臺之西南山麓上、即其冢也」劉峻文山棲志序「登二自山麓一漸高漸峻」

さん-ろく ～纂錄 あつめて記載すること。

さん-ろく ～散錄 種種の事を統一なく記錄すること。雜錄。

さん-ろくすん ～三六寸 (名) 馬術の語。手綱の持樣の三法。大坪流馬書「三六寸之有二口傳一」

さんろく-たい ～山麓帶 (名) 【植】植物學上の用語。植物の分布上、山麓一帶の地。玆所に生ずる植物は一般平野のものと異なる無し。此の帶を過ぎ登れば即ち喬木帶に入る。

さん-ろん ～三論 (名) 佛語。㊀中論と百論と十二門論との三部の佛書。續紀十五、天平十六年十月辛卯「涉二覽經典一尤精二三論一」類聚三代格四「三論業三人二人令ㇾ讀二三論一一人令ㇾ讀二成實論一」㊁次條の略。類聚國史十九「今聞三論・法相二宗、相爭各專二一門一」盛衰記四十五、內大臣京上被斬「痛哉、法相三論、八不唯識の金言、衰沒之露、消二春日之野一」

さんろん-しう ～三論宗 (名) 佛語。八宗の一。三論を所依とするもの。我が國にては推古天皇三十三年高麗の僧惠灌の渡來して弘めしに起こる。されど宗名は東大寺の僧道慈が唐より養老元年に歸朝して立てたるに始まる。二中歷三、顯「三論宗」拾芥抄下本、諸宗「三論宗」

さん-わ ～三和 (名 さんわさん(三和散)の略。風俗文選病氣傳「世に醫術の良藥ありて、三和・五積の煎湯を施し、あるは蕎麥切のおろしに驚き」

さん-わう ～三王 (名) 支那の夏の禹と殷の湯王と周の武王との稱。禮記學記「三王四代、惟其師」

さん-わう ～山王 (名) 近江國坂本の日吉の神の稱。大巳貴命を祭る。狂言富士松「今日は山王の緣日、山王へむけて社參する」

さんわう-ごんげん ～山王權現 (名) 山王の神社と山王七社との總稱。

さんわう-しちしゃ ～山王七社 (名) 山王の神社に附屬する上・中・下各七社の稱。上は大宮・聖眞子・二宮・八王子・客人宮・十禪師・三宮、中は牛尊・大行事・早尾・氣比・下八王子・王子宮・聖女、下は惡王子・新行事・岩瀧・劒宮・大宮竈殿・聖眞子竈殿・二宮竈殿といふ。

さんわう-とりゐ ～山王鳥居 (名) 笠木の上に合掌ある鳥居。山王權現に建てたるよりいふ。合掌鳥居。そらがふとりゐ。

(さんわうとりゐ)

さんわう-まつり ～山王祭 (名) 山王の神社の祭禮。狂言大藏流鈷誓「只醉狂や、額は朱傘の、赤きは猿の山王祭か」

さんわ-さん ～三和散 (名) 昔時の藥の名。

さん-ゐ ～散位 (名) 位のみありて職なきものの稱。左傳文公十二年杜注「晉自有二散位從ㇾ卿者一也」

さん-ゐ ～三位 (名) ㊀第三の位階。又、その人。著聞廿七「衞門の陣の內より、三位一人出合ひたり」㊁基督教にて父(天帝)と子(耶蘇)と聖靈との稱。

さんゐ いったい ～三位一體 ㊀佛語。佛は法身・報身・應身の三位に分かるれども、其の本は一體なりといふこと。㊁基督教にて、三位二あれども、もと惟一なる神の三樣の變體にて、其の實は一體なりといふこと。

さんゐ へんたい ～三位變體 基督教にて神は三位二あれども、もと惟一の神の顯はしたる三種の變態なりといふこと。

さん-ゐ ～三畏 (名) 君子の畏るべき三つのもの。即ち、天命と大人と聖人の言との稱。論語季氏「孔子曰、君子有二三畏一。畏二天命一、畏二大人一、畏二聖人之言一」

さん-ゐ ～簒位 君位を簒奪すること。左傳僖公十一年「王子帶召ㇾ之也。杜注召二戎欲一以簒位一也」

さん-ゐ ～山彙 (名) 【地】山の集まりて群をなすもの。

さんゐ-ちゅうじゃう ～三位中將 (名) 三位にて近衞中將に任じたるもの。盛衰記三、成親望二大將一「殿の三位中將師家」

さんゐ-れう ～散位寮 (名) 式部省の被管。內外文武官の散位に關する事を總掌し、又諸國の朝集使の上日の事を判ずる所。頭・助・允・屬の職員を置く。令義解職員「散位寮、頭一人、謂、文武散位皆總掌之。掌二散位名帳・朝集一謂、諸國朝集使皆於二此寮一判二其上日一也事一」

さん-ゐん ～三院 (名) 古昔の勸學院と奬學院と學館院との稱。

さん-ゐん ～散員 (名) 職務なき人員。又、其の人。白居易詩「散員足ㇾ庇ㇾ身、薄俸可ㇾ資ㇾ家」

さん-ゑ ～三會 (名) 佛語。㊀興福寺の維摩會・藥師寺の最勝會・大極殿の御齋會の稱。又、圓宗寺の法華會・最勝會・法勝寺の大乘會の稱。天台三會。江次第五、季御讀經「三會已講」㊁彌勒佛出世して龍華樹下に三會の說教をなすといふこと。盛衰記十六、三井寺燒失「慈尊の朝、三會の曉を待つゆゑに、三井寺とも申すとかや」太平記十五、三井寺合戰「早三會の曉に成りぬらん、いでさらば八相成道して、說法利生せん」

さん-ゑ ～產穢 (名) 出產したるとき、其の父母の身に掛かるといふ穢(ケガ)。江戶時代にては父は七日間、母は三十五日間とす。續古事談四「兵庫頭知定といふ陪從ありけり。產穢に入りて、廿日餘りをへて、八幡の御神樂に參勤てかへり」權記正曆四年三月二日「請假三箇日產穢、還昇之後未ㇾ奉ㇾ假文一初奉二凶事假文一有ㇾ憚、仍今日產穢所ㇾ奉也」

さんゑふ-くゎとう ～三衞府火頭 (名) 三衞府の厮丁。衞士の爲めに汲炊を事とするもの。大日本農史 續紀廿六、寶龜十二年三月辛巳「三衞府火頭」

さん-ゑん ～山園 (名) 山中に造りたる庭園。又山中の別莊。山墅。山莊。北史齊世宗紀「每二山園游宴一必見二招攜一」

さん-ゑん ～山猿 (名) 山に棲むさる。杜荀鶴詩「水鳥山猿一處居」

さん-ゑんたい ～三圓體 (名) 【數】圓壔・圓錐及び球の總稱。

大正五年十月五日 初版印刷發行
昭和三年十月三日 十八版印刷發行
昭和十五年一月廿五日 修訂版發行
昭和十五年六月十日 修訂六版發行

修訂 大日本國語辭典第二卷

定價金拾五圓

著作者 松井簡治
著作者 上田萬年
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房
右代表者 同所 合資會社冨山房社長 坂本守正
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 寺井藤左工門
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

發行所 東京市神田區神保町 明治二十九年三月設立 合資會社 冨山房
電話神田(25)自二、一七一番 電信略號(ヤマフ)
至二、一七八番 振替貯金口座東京五〇一番

92-3